

尾三雄魂錄



愛知縣



始



特231
138



尾
三
雄
魂
錄

愛知縣教育會編





足助重範



足助町眞弓山上
日 月 碑

序言

尾三の地古來英雄偉人を出し、我が國世々の新しき時代が尾三人によりて作られ、國史の七分は尾三關係の絢爛たる記録であるを思はしめる程である。この土に育まれ此の土に學徒たる現代青少年をして、先人の雄魂氣魄に觸れしめ、世界大國民としての資質を培ひ、以て青少年學徒に賜りし勅語の 聖旨に副ひ奉らしめんとするのが、本書の刊行を企てた所以である。

本書編纂にあたり、本會は廣く之が懸賞募集を行ひ、多數の應募原稿の中より、優秀篇十有五を選出した。入選者には教育者あり、女學生あり、遠く海外より應募せられたものもある。各篇皆凜然たる正氣の輝であり、崇高なる雄魂の躍動であり、一字一行血の湧き涙に咽ばないものはない。

敢ていふ。本書を讀んで泣かざるものは日本精神を有せざるものであり、本書を

讀んで感奮しないものは神國日本の血の流れてゐないものである。中等學校生徒を初めとして青少年學徒が座右に一本を備へて、心を養ひ體を鍊り、神州の正氣雄魂を振作するの資とならば幸である。

本書刊行にあたり、本縣當局よりは多大なる御賛助を仰ぎ、又本會中等教育調査部委員の諸君には編纂計畫から懸賞募集・審査・編輯・刊行に至るまで一方ならぬ御盡力を戴き、深く感謝の意を表する次第である。

昭和十五年十二月五日

愛知縣教育會主事 伊奈森太郎

尾三雄魂錄目次

- 一、笠置山の總大將足助重範……………一
- 二、織田信長と平手政秀……………一九
- 三、天下一の木下藤吉郎……………二九
- 四、堀尾金助の母……………四五
- 五、家康と三河武士……………六三
- 六、真田信之の夫人……………七九
- 七、柳生連也……………九五
- 八、忠臣真木定前……………一〇七
- 九、獨眼龍松本奎堂……………一二六
- 一〇、倉田珪太郎と其の母……………一四二

一一、尊皇愛民の古橋父子……………一五八

一二、興亞政策の先覺者東方齋荒尾精……………一七四

一三、海軍大將 八代六郎……………一九一

一四、發明王豊田佐吉と其の母……………二〇七

一五、明治川神社……………二二五

尾三雄魂録

一、笠置の總大將足助重範

【重範事績の梗概】元弘の亂、純忠武臣の先驅。三十二歳總大將として笠置の險に天皇を護り奉り、行宮を嬰守する廿餘日。一の木戸に據つて強弓敵膽を寒からしむ。衆寡敵せず城陥るや、天皇の遷幸を全うし奉り、刀折れ矢盡き捕へられて六條磔に斬らる。一門悉く血肉を戰場に曝し、其の誠忠補氏に譲らず。後胤に展墓香花を捧ぐるものなく埋れて明治に至り、恩光枯骨に及び、正四位を贈らる。昭和八年贈從三位に追陞せらる。重範は三河武士の元祖。由來三河武士はこの足助精神に輝きて、剛健實實、滅私奉公、精神的に生きるを本領としてゐる。



笠置寺の仁王堂近くに岩をきり、石をたたんでその上に、がつきと組まれた一の木戸

一、笠置の總大將足助重範

の砦とりでやぐら。京都附近から馳せ集つた勤皇の兵六千餘人が、今しもここに籠つてゐる。山の木肌はだは雨に曝さられ、矢きずにいたんで血潮のあとさへ止めてゐる。

楠木多聞兵衛正成は、家臣和田五郎正遠一人をつれてこの木戸の下に立ち、じつと槽を仰いでゐた。やがて彼等は木戸口へと歩をはこんで行く。砦の中は静まり返つてはゐるものの、緊張の氣満ち満ちて、矢間やまや板のすき間から物の具を煌かせた兵どもが、ひしひしとつめかけてゐる。

「さすがちやなう。」

正成は正遠をかへりみて言つた。

「君います城の大手にふさはしい守りの見事さ。この堅固さの破れぬ限りは行在所によもや敵手はとどくまい。兵は將を信じ、將は敵を呑む、その意氣こそは頼もしく、ごの木戸もかくあつたらば、笠置もまだまだ磐石であらうが。」

烏合の衆にあらずとも、諸國から集合の軍では意氣に統一がない。それにて十倍に餘る賊の大軍を邀へ撃たうとは……。智謀深慮の楠木には、ありありとそれがよめる。櫓に高く閃くは、白地に日月を金銀でうちぬいた大旗。それには墨痕鮮やかに數行の

文字ををぞらせてゐる——此の木戸を固める總大將足助重範の軍旗である。

「足助殿に御意得たい。ご案内頼み入る。」

和田正遠の聲に應じて番士は言つた。

「誰人にわたらせらるる。」

「河内の楠木多聞兵衛正成。」

番士は正成に一禮する。

「楠木多聞兵衛殿、御參着候。」

と、幕の中に應ずる。つづいて

「何、楠木殿の御出でとな。」

聲と共に陣幕をかかげて現れたのは廿四、五歳の逞ましい武者一人。

眼聴く鋭く、温顔に氣魄の強きをつつんだ頼もしい面をほころばせて、鎧の袖を後へはねたが

「思ひがけぬ楠木殿の御入來。兄と御噂申し居りて候。いざ。」

と請じた。重範の弟三郎重春である。足助次郎重範は、萌黄緘もえぎの鎧に、胄下かぶとしたのまゝま楠木

主従をむかへたが

「これはよくぞ、よくぞ參られて候。」
會釋して毛皮でしつらへた席をすすめる。

一段下の床にはいかめしく鎧よろいうた武者がひしひしと詰めかけて、すはと言はば寄手に矢ぶすまを以てこたへる待機の姿をみせてゐる。

重春は兄の側にひかへた。侍等が時時幕をかかけて重春と言葉をかはし、又命をうけては出入りする。初秋、九月上旬の日ざしは櫓にしんかんと照りつけ、遠くから敵のどよめきがきこえて來る。

「先日の手痛きいくさ。御見事な功名でござつた。」

正成は重範に微笑みかけて言つた。

「いやなに、取るに足らぬ寄手の雜兵ざうへうばら、矢間の板を開きしのみにて退け申した。」

「荒尾兄弟を矢先にかげられし武勇、帝・宮をはじめ奉り、流石は鎮西八郎が末よと、いたく御稱美でござつた。」

「拙き弓わざ、上聞にまで達せしとは、恐れ多きかぎり候。なれど寄手も流石に二の

足をふみしか、その後は攻め寄せず、御覽あれ、侍どもも力餘つて苦しみ居ります。」

「足助殿の如き武勇すぐれし將を得たまひしは、帝の御運開かるるしに候。」

「御言葉いたみ入つて候。大智大勇は實に楠木殿のこと、承れば、主上の御夢枕に立たせられしとか。」

「いや。」

と正成は恐懼に堪へぬもののやうに打ちけして

「正成如き匹夫、いかで御夢枕になごたち申さうや。なれど忝くも、龍顔に閱をたまひ、『汝を頼みとする。』とまでの御言葉。『正成一人生きてあらば御運必ず開き奉るべし。』なごど、人もなげなる廣言いたしたのも偏に、主上の大御心を安んじ奉らんがために候。」

正成の聲はややうるむ。

まなじり長く、鼻高く、四十歳の叡智にかがやくその面貌に對して、眉濃く頬ゆたかに剛勇の氣あふるるばかりの重範は、語氣にも三十路をこえたばかりの生氣がみちてゐる。

「われらは清和源氏の初祖經基が末でござる。祖先満仲、頼光をはじめ、近くは山田重忠等、代代の者いささか勤皇にはげみ、朝廷の御領なる三河國足助の庄の地頭に任せられ居り、一族をあげて、帝に御味方いたすはわが家憲に候。

つらつら思ふに北條氏は義時・時宗執権の頃より恐れ多くも朝議、皇位にさへ干渉し奉ること幾度、近くは高時入道暗愚にして政をみず、長崎高資執政するといへどもごより邪惡の者、賄賂をとり、惡政を恣にして萬民を苦しめ、天下を亂すこと限りなし。この重範も微力ながらかねてより、帝の御旗揚に加はり奉り日野資朝卿・尹大納言師賢卿・四條中納言隆資卿・藏人右少辨俊基卿等と謀をねりしも、遂に事あらはれて成らず、帝には畏くもこの笠置へ行幸なし給ふに至り候。皆これ臣等が不覺のいたすところ、この上は一死以て罪を、帝に謝し奉り、高時をたふして御代萬代の安きにおかん覺悟に候。」

「御心中察し入る。帝に頼まれ奉りて志かたき人人とはいへ、諸國諸郷の侍どもを統べ、嶮なりとは言へ五丁にたらぬ小山に據つて、十倍に餘る大軍を引うけられし御苦心の程、察し入り候。」

重範は正成の面を鋭くみつめた。

「楠木殿には、主上の、この山によつて戦ひ給ふことの利、不利を如何思し召すや。」その聲は沈痛であつた。正成はおもむろに

「京には近く、中國西國に至る要路の地をしめ、しかも木津川をひかへて峙つこの笠置、もごより要害といふにはばかりなし。なれど、今に北條方、二十萬三十萬の大軍、高時入道の聲に應じて繰出し取圍まば、四方の口は塞がれ、退いて計を立てん道なきは勿論、兵糧の道を絶たれては如何に義勇にはやる侍なればとて、つひえくづるは炬を見るよりも明かでござらう。」

「おお、まさにまさに我らが懸念もそのことに候。若しこの山の破れなば、身を以て敵を喰止め、屍を岩根に曝すは顧みねど、主上を何處へ遷し參らせ、如何にして再舉をはかるべきか。楠木殿、この儀御深慮は如何に？」

二人はきびしく眼を見交はしたまややしばし黙然として聲を吞む。

「如何にも。この正成が今日かぎり笠置を下り、お別れ申さんとするも皆そのため、主上御迎への儀はこの正成必ず身にかへ神明に誓つて御引受仕る。」

「何、では楠木殿が……。」

「本日只今、行在所に参つて 主上に御暇なし奉りしも、それを言上いたさんがために候。」

正成は軍扇を膝について徐ろに語る。

「われらが笠置を見すて奉り河内へ歸るは、わが城へ 帝を迎へ奉らんがために外ならず。抑、金剛山に近き千早赤坂の二山は前に河内の野をひかへ後に紀和の深山巨岳を負ひ、伊賀・伊勢・金剛の山並を圍壁となす。ここに城を築かば、賊の大軍を一手にひきうけ諸國に勤皇の志ある侍を起たしむるまで操るには屈強の場所なり。もしや城ぬかるるも峰より峰へつたつて兵をうつすは間道を行くが如く、山ふみわけて紀和の山に入らばその跡を見せず。正に天然の一大要害にひとしく、帝を迎へ奉りて北條方の大軍すべてを引受くるも磐石の安きにござる。用意ごものはば必ず敵に一あわふかせ、帝の行幸をあふぎ奉らん。」

ああ、帝の御運いまだ末ならず……。重範の胸には喜の感激が嵐のやうにおこつた。「それを承るからは、たとへ重範の武運つたなくこの山に斃るるも思ひのこすこと

更になし。」

二人はしかと手をとり合つた。

日月の御旗は秋風に閃いた。その白地にあざやかにしたためられた文字

「忠節を重んじて不道にくみせず、名を萬天にあげて榮花を子孫に傳へん。敵人胃を脱ぎ刃を収めて我が幕下に降れ。」

いともすがしく眼に映るのであつた。

「重春、重政は何れに在るぞ。」

重範は弟をふりかへつて言つた。

重春が答へようとするすきもあたへず

「父上。」

と呼んで現れた少年武者。小櫻さくら緘せきと覺しい腹巻に身をかため、高高と幕をかかけて立つた。父に似て大兵な骨ぐみ、重範の嫡子太郎重政しげまさである。

「おお、逞しい武者ぶり。御息か。」

「河内の楠木多聞兵衛殿。かねがね話しきかせた御仁ぢや。御挨拶申し上げい。」

重政はひきあはせられて

「お見知りおかれませ。」

と手をつかへた。

「頼もしき若武者かな。何歳になられしぞ。」

「十四歳にござりまする。」

「初陣で御座るの。いや、正成御羨しう存する。われらにも五指に餘る子はあれど、長子正行は未だ十歳に充たず、しかも病弱のからだ。かくては君の御用にたつべしとも思はれず心痛いたし居る折柄、よき御子息に相見えて正成御羨しき限りに候。」

しみじみと言ふのであつた。

「強ひての願ひ故、この笠置まで召しつれたれど、重範が死後もこやつ一人は長らへさせて我が志をつがせ、足助氏が第二第三の旗揚げたさせん所存に候。」

「御心底さもあらう。げに次の代の勤皇方は、重政殿、御身たちこそ柱となるのぢや。かまへて輕輕しく身命をなげうつまいぞ。」

「御教訓、心魂に徹してござりまする。」

かねてきき及んだ名將のその一言は、少年の胸に深く刻まれた。

「おお、陣中に長座は恐れあり。いざ足助殿御暇仕る。」

正成は和田をうながして立上つた。

「千早・赤坂にての御軍略のほど、たのしみて相待ちまするぞ。」

豪快な笑を交したが、互に生會は期せぬ心中であつた。

蘇芳^{すほう}緘の鎧の袖も音おもく、悠然と歩み去る正成。

「大智にして義心たくましく楠木、いかにも稀なる英傑ぢや。重春、重政、足助一族の名にかけて楠木殿一門におくれまいぞ。」

聲はげまして重範は

「我が亡きあとは重政、叔父重春を父とも兄とも仰ぎ、晴晴しく勤皇の旗あげいたせよ。」

言ひ放つや、傍の弓をとつて満月の如く引きしぼり、引きためすのであつた。三人張の強弓は生ある如く弦鳴した。

元弘元年九月つごもりの夜。宵近く降り出した雨は横吹きよこぶきの風を加へ、岩壁の谷、つたかづらの路、松柏生しょうぼくせいひわだかまる笠置の山の、しかもぬば玉の暗闇に、いたたく胃も覆へさんばかりに降りしぶく。

笠置軍強しの報に加へて、楠木・櫻山等の旗揚げ相つぐこの知らせに驚愕した北條高時が一族をすぐつてさし立てた部將は六十三人。總軍勢あはせて二十萬八千騎の先陣は既に美濃尾張をこえ、笠置の守りに攻めあぐんだ寄手の心を勇ましめた。

よし、幾十萬の敵來らば來れ。笠置方は決死の覺悟いよいよかたく危機をはらんでの折からに、恰もこの嵐であつた。木津の流れも雨鳴りに音は消されて、風神阿修羅あしゅらと狂ふ夜半。

「夜討ぢや！ 敵襲ぢや！」

「御所が危い！」

「裏手よりぞ。ふせげ、ふせげ！」

亂れた叫びがどぎれどぎれに流れて、搦手にあたる北の口にどつとあがる鬨の聲。

「おのれ小ざかしき寄手かな。守りうすき北の口について夜討とは心憎いふるまひ。」

一の木戸よりのぞみ見た重範の目に、ばつと明るい雨空。火である。限られた小勢、大手、東、西、と三方は固めてゐたが、嶮を頼んで手うすに守つた北の口は遂に敵の乗する所となつたのだ。

「よし、あくまで戦ひ、ふみにじるまで。」

力足ふみしめて胃の緒をしめ

「重春、重春、重春は何れに居るか。」

と二聲、三聲。しかし既に嵐の中へ立向つたのか聲はなし。

「重政、夜討ぞ。出會つて初陣の腕だめしせい。」

言ひすてて木戸を出れば、すでに要所要所へ敵は火をかけ、なだれをうつてかけちがふ。これと應じて待ちかまへたか山下の寄手の軍、四方八方よりをめき叫んで攻めのぼる様は、嵐を壓してももの凄い。前も敵、後も敵。味方はすでに亂軍のま中にこり圍まれてゐる。

「きたなき人人のふるまひかな。帝に頼まれ奉つて戦ふほどの侍が、この様は何事ぞ。死ねや、死ねや。」

重範の耳をうつは錦織判官代俊政の聲。

「勇ましきかな俊政。彼を討たすな。足助次郎重範これにあり。」

むらがる敵を引きつけて、太刀ふりかぶるよとみれば、撫で斬り拂ひ斬り、修羅王の如くにつきすすむ。

「おお！」

まなじりを決して見やる彼方、行在所なる本堂の方に炎炎として立上る火柱。

「南無三、帝の御一大事！」

いらだつ心に、纏はる敵を斬りふせ斬りふせ、篠つく雨に面もふらず一二町。

「父上！ 父上！」

「おお重政か。犬死すな。この場はのがれて落ちのび、かねて言ひきかせし再度の旗揚げをはかるべし。早く去れ。早く行け。」

「いいや、父上かくなる上はこの重政、父上と共にふみ留まりまする。」

「ええ、うつけ者奴。うろたへるでないぞ。重春は如何せし。重春と共に早く逃れい。」

「叔父上は行在所の方へ。我も敵二三人はたふしたり。父上の足手まどひにはなり申さぬ。」

「いいやならぬ。初陣の腕をためせば、そちには用のないこの場ぢや。早く行けい！」

いらつて叫ぶ眼前へ、かへり血をあびてものすごくかけつけて来た三郎重春、しつかと兄の手をとる。

「おお重春か。」

「行在所こそ心もどなしと急ぎかけつけ見れば早手おくれ。寄手は長崎四郎左衛門尉が配下の陶山、小宮山のやからにて、恐れ多くも行在所は火の海でござる。」

「して、帝・宮がたの御有様は？」

「帝は、恐れ多くも御徒歩にて、藤房・季房二卿を召伴れ給ひ、河内をさして落ちのびさせられし御有様。」

「おお、何ごいふ御いたはしさ、勿體なさ。して大塔の宮は、尊良親王は？」

「御二方には訣別の盃を交はさせられ、宮は峰ごしに大和へ、親王は御太刀をふるはせ給ひ賊の中へ。」

「何、斬入り給うたか。」

潮の如くにせまる関の聲。

「よし、親王はこの重範必ず護り奉る。重春は重政をつれて早く逃れい。かねての申つけ通り後事はまかせたぞ。」

「お氣づかひあるな。兄上。」

「父上、父上！」

「さらばぞ！」

と、一聲を後へ投げて、重範は面もふらず敵の中へ。

阿鼻叫喚の中に一刻はすぎた。嵐はやうやく收まり、下弦の月は凄くあはれに光を投げる。屍算をみだして動かぬ中を重範は、よろほひよろほひ歩んでゆく。背に腰に篋ぶかく立つた數本の矢。腕に腹にうけた太刀傷あまた。既に視力はうすれ、のんごは渴き、胃をすてたさんばらの髪を滴つて流れる雨の雫に辛うじて唇を濕すのである。鬼

神の如くに戦ひ給ふ尊良親王に近づき奉り

「重範後殿仕る。宮にはとく落ちさせ給へ。」

「おお、頼むぞ。」

と、宮をおとし奉るや、思ひのこすことも無きままに、縦横無盡に戦つたが、「帝もゆるし給うた笠置の總大將、強弓のほまれ高き足助殿ぞ、み首しるしいただいて手がらにせよや……。」と、むらがり来る敵をしりぞけて、今は心靜かに自害すべくものかけさしてたどりゆく重範である。

「重春の兄にまさる智略、重政の父におどらぬ武勇、この重範はたふれても、足助一族はより強く立ちなほるぞ。勤皇の志はあくまでもとげられるのだぞ。」

重範のこはばつた頬には會心の笑が漂ふのであつた。

と、その後から不意に

「足助殿見參。長崎四郎左衛門尉が軍にて、陶山藤三。」

名のりかけてうちおろす太刀。

躲かむしはしたがよろめいて、肩へ淺く一太刀。

「小しやくなり。すさり居れ。」

胃も斬れよごふり下す剛刀、満身の力をこめた一撃に相手は聲も得たてず、打ちたふれたが重籠も亦返り血をあびてごうごたふれた。精も根もつきはてたのである。

「いざ最期を……。」と、鎧通しの小刀をさぐれば刀身はぬげ落ちて無し。又こぼれした太刀をとり直しては脇腹へかまへはするものの、氣力はうすれ精魂は盡きうとうとと眠におちる――。

「足助殿、足助殿は何處ぞ……。」

敵兵のさがし求める聲も、夢もなく現もなく重籠の意識はうすれてゆくのであつた。

——西加茂郡舉母第三尋常小學校 伊藤 巖——

二、織田信長と平手政秀

〔平手政秀の事績と梗概〕青年時代の信長は其の素行暴戻日に募る。其の傳平手政秀諫めて志賀村に引退割腹。信長裸馬に乗りて馳けつけ屍を抱いて悔悟す。僧澤彦に命じて政秀寺を建つ。

永祿三年今川義元兵三千を進めて尾張を攻む。信長時に歳二十七、清洲にあり、人生夢幻の語を吟じて手勢を以て出發。奇襲一舉義元を桶狭間に破る。正親町天皇の勅使を奉じ、天下平定朝威復興に着手す。京師に入り朝儀の衰頹を憂ひ、皇居を造營し、舊典を復し、紀綱頗る張る。不幸大志を抱いて逆臣光秀の爲に斃るも、三傑の筆頭として一時代を劃し、英雄信長の鴻業は没しない。

信長威勢いよいよ張るに及んで、常に政秀の力なりとて諫臣を賞讃したさいふ。

古渡ふるわたの城の奥深い一室、主君織田信秀は、病の床に亂れた髪をなであげなであげ、側わしにゐる醫者の木庵に言ふのであつた。

「儂わしも此の長患ひぢや、今度はとても助かるまい。それにつけても氣に掛るのは息信長の事ぢや、あの亂行ではなう……。」

二、織田信長と平手政秀

「殿の御心中如何ばかりかと御察し申し上げます。併し若君様にも御成人遊ばされまれば分別もおつき遊ばすは必定、御案じ遊ばされますには及びますまいかと存じ上げます。——それに平手政秀様もお附きのこと故、御心にお掛け遊ばされず、十分御養生の程願はしう存じ上げます。」

「……………」

信秀の病みほほけた眼差の奥には深い苦惱の色が窺はれた。

これより先、信秀は名古屋に城を築くと、これを子の信長に與へ、後事を平手政秀・林新五郎・青山與三右衛門・内藤勝介等の老臣に託し、特に平手政秀には信長傳育の大役を命じて自分は古渡の城に移つたのであつたが、何分にも信長の身持が悪く、治世なごいふことには少しの關心も持つてゐないやうに見えたので、父の信秀にとつては、それが一番心を痛める種であつた。かうした心を抱きながら、その夏以來の大病なのであつた。

その夜更

「大變に御座ります。殿が御重態でいらせられます。」

木庵が慌しく信秀の病室から駆け出して來た。此の聲に驚いて、政秀だの與三右衛門だのいふ老臣が病室に這入つて見ると、信秀はじつと眼を閉ぢたまま横に臥してゐる。一同息をのんで今は最後かと思はれる程青ざめ果てた其の顔に瞳をこらす。不吉な沈黙がつゞく——。

「殿、政秀奴に御座ります。氣をお確かにおもちなされませ。」

政秀の上ずつた聲である。信秀はちよつと眼を開いたやうであるがすぐまた閉ぢてしまつた。——再び開いた眼が政秀の眼をこらへると

「信長は如何致した……………」

政秀の眼の中から信長のゐないことを読みとると

「政秀、後後の事はしかと頼んだぞ……………」

信秀の眼はもう開かなかつた。

「殿！殿！」

政秀は耳元で二三度呼んでみたが、顔の皺一つ動かなかつた。

「御臨終に御座ります。」

木庵の沈痛な聲に一同は其の場にひれ臥すのであつた。



その翌翌日信秀の葬儀は萬松寺でとり行はれた。此の日早朝から一族郎黨等が寺につめかけ準備萬端整ひ、晝過ぎからは僧侶の讀經が始められた。その頃信長は寺の一室で小姓と遊び戯れてゐて、葬儀には參列しようともしない。其の有様を見兼ねた政秀が

「若君、御葬儀は始められて御座ります。早く喪服をお着け遊ばしませ。」
と、急立てるのである。けれども信長は平氣なもので

「苦しくない。余の一存でする事ぢや。捨て置け。」

「併し、世間體も御座ります。御願ひで御座ります。政秀奴心からの御願ひで御座ります。」

「うるさい！ では其方の望み通りにして遣はすわ！」

と言ふが早いか平常着のまま部屋をこび出して行つた。政秀は信長の喪服をかかへて後を追つて外に出た。

「若君！其の服装では、それでは……。」

式場に来てみると、はや信長は平然と座席に着いて居るのであつた。

一同は信長を見守つたまま固唾をのんでゐる。長い讀經の後、やがて焼香が始められると、信長はつかつかと前に進み出たかと思ふと香をつかむなりぱつと位牌の前に投げつけた。そしてそのまま寺の内に這入つてしまつた。

此の頃から信長の素行は眼に見えて治まらなくなつた。時には眼に餘るやうな亂行さへあつたので、人心は一日一日と信長から離れて行つた。

「おい皆の衆、今度の殿様はちと變り者だなう。」

「さうだとも、武勇はすぐれてゐられるさうだが、あれではまるで氣違だせ、何でも前の殿様の葬式の時には香を投げつけたさうではないか。あれには皆んな驚いたとよハハ……。」

「今に此の領地も取られてしまふせ。」

斯んな話が、しがない街の人人によつて次から次へと傳へられた。

或日信長が珍しく家に立ちこもつて讀書をしてゐると、そこへ一通の手紙が届けられた。手紙を裏返して見ると平手政秀とあるので信長はがっかりした。

「何だ、又八釜し屋の親爺め、儂に意見をし居つたわい。」
とつまらなさうに封を開いた。

「一筆啓上仕候、我が君様には御機嫌如何に在らせられ候や。さて臣下の身を以て斯く申上ぐるは如何かとは存じ候へ共一應御聞召し下され度候。承るところに依れば先日の武術始めの折の殿の御振舞に就き世間にてはとやかく申居候趣、臣下の身として残念至極に存候。近頃殿には稍荒荒しく下品なる御振舞も多しとか、御父上亡き後は殊のほか……。」

ここまで読んで来た信長は

「御父上亡き後は殊のほか——とは何と云ふ言ひ草だ。貴様等の様な古い頭で儂の考が解つて堪るか。」

獨りつぶやきながら、幾個條かに認められた御申上書などは讀まうともせず、ひき破りざま火鉢に投げ込んでしまった。



それから約一年の月日が流れた。信長の素行は直らなかつた。亂行は増すばかり。

「ああ申譯なし。あれほどまで先君のお頼みを受けながら……。」

政秀は志賀村の邸に退いて、悶悶の日を送つてゐた。

天文二十二年正月十八日の朝のことである。

「旦那様、お早う御座います。おや、今朝はお顔の色が大層お悪い様ですが御氣分でもお悪いので御座いますか。」

「おお久助……。」

政秀はじつと老臣山田久助の顔を見つめながら

「なう久助、お前にも大層世話になつたなう。」

「旦那様、何を今更さやうな事を仰せられます。」

「いや久助、お前が儂の家に始めて来たのは恰度今時分だつたなう。今それを思ひ出したのぢや。」

と、久助の顔をのぞき込む様に言つた。

「はい、恰度今から十年前の正月の八日でございました。雪のちらつく寒い晩で御座いました。」

「おお、さうだつたなう。時に久助濟まなたくげんいが澤彦和尚のところへ此の手紙を届けて呉れないか。」

「よろしう御座います。では一走り行つて参ります。」

久助は元氣のよい返事を残し家を出て行つた。其の後姿を見送つたまま政秀は

「これが永の別れになるのか。達者で暮して呉れよ。」

と、思はず眼頭をうるませるのであつた。政秀は萬松寺の澤彦和尚に自分の心中を打ちあけて後事を託したのであつた。

それから數刻の後、主人の呼ぶ聲に家人が居間に這入つて見ると政秀の手には脇差がしつかと握られ、すでに腹は一文字に切られ鮮血があたりに飛び散つてゐた。

「御主君をお呼び申して呉れい……。」

静かに言ひつけると政秀は固く眼を閉ぢてしまつた。

◇

信長は居間にゐた。今日は兎狩りに行くといふので早くから用意をさせてゐた。と、障子の外にあわたましい足音がして、それが止ると

「御主君様に申し上げます。平手政秀様からの使の者にござりますが……。」

ここまで聞くと信長はもう先きは解つてゐるといつたやうに

「もうよい。用件は解つてゐる。早く歸れ。」

「いえ、殿！ 一大事に御座ります。政秀様には御自害にござります。」

「何、政秀が自害致したと？」

信長の顔の色は見る間に變つて行つた。

「これ、早く馬の用意を致せ。何？馬の鞍が？」

言つてゐる間も待てぬといふ風であつたが、何を思つたか、廐へ入るなり裸馬に打ちま
たがつて志賀村をさして一目散に駆け出した。

やがて政秀の邸に着いた。馬から下りると信長は家人の案内も乞はず政秀の居間に這
入つて行つた。

「政秀！」

「おお御主君！」

二人の眼はぱつと合つた。

「御騷せ申して申譯御座りませぬ。政秀一生の御願ひ——先君の御意志をお繼ぎ下さ
れまするやう……。」

信長は黙つたまま恐しい形相で立つてゐる——と、其の眼が急に光つて

「政秀、悪かつた、儂が悪かつた。許して呉れ。これほどまで儂の事を思つてくれて
ゐるとは知らなかつた。——今日からは心を改めて眞の武士になる……。」

「有難き——仕合に——御座ります。そのお言葉をお聞きいたし——政秀、笑つて——
死んで——参りまする。」

政秀の青白い顔がひきつるやうな笑をもらすと、信長も聲をあげて泣くのであつた。

——名古屋市清水尋常小學校 戸田重市——

三、天下一の木下藤吉郎

【木下藤吉郎事績の梗概】竹の簀子の上に筵を敷いて坐し、瓦器を以て杉原氏との婚
禮をすました藤吉郎は、草履取となれば天下一の草履取であり、薪炭奉行となれば天
下一の薪炭奉行であり、普請奉行となれば天下一の普請奉行であり、隊長となれば天
下一の隊長であり、爲すこと悉く天下一を目標とした。信長不慮の死に斃るるや、敵
の毛利と和議を結んで、電光石火光秀を屠つたのも天下一の器量を發揮してゐる。そ
の後息をもつがず縦横畫策、天下に刺據する群雄を、或は懐柔し、或は威嚇し、或は
征服し、擒縦自在悉く膝下に首を垂れしめ、梟雄・悍將・策士・猛卒・茶人・文客・
畫家・僧侶等に至るで、一熔爐に收めて、大阪の築城から伏見桃山、聚樂第の造營、
天下一の關白となり、太閤となり、僅か十數年にして天下兵馬の權を掌中に收めたの
みならず、内に、花やかな桃山時代を作り、吉野・醍醐の花見に風流をつくし、外に
大明四百餘州を向ふにまばして大陸遠征を企てた。蓋し天下英雄多しと雖も、わが豊
太閤の如きは眞に英雄らしき英雄であつた。

尾張愛知郡中邑なかむらの水呑百姓、彌助の一子として天文五年正月元日に呱呱の聲を上げた
日吉丸こそ、「英才あり天先づ試練を下す。」と謂ふ、それに當るものであらうか。彼は八

三、天下一の木下藤吉郎

歳の時父を亡くした。それから、この日吉丸の苦闘の日は早くも始まつたのである。その頃近隣に筑阿彌ちくあみと呼ばれてゐる人があつた。この人は、かつて、尾張の領主織田信秀（信長の父）に仕へて、下僕として働いてゐた人であつたが、病の爲めに郷里の中邑に歸つて居たのである。恰度日吉丸の母が、父を亡くして獨りであつたので、近所の人が仲介となつて、この筑阿彌と母とを結婚させたのであつた。そこで日吉丸には繼父が出来た譯である。その中に、母と新しい父の間に男の兒と女の兒が一人づつ生れた。その男の子は、後の羽柴秀長であり、女の兒は成長後徳川家康に嫁した。

日吉丸は、二人の弟妹が出来て家が益々貧しくなつたので、隣村の光明寺と云ふ寺に小僧にやられた。ところが彼は僧になる事などは大の嫌ひであつた。で、何んとかして寺から追ひ出されようと思ひ、自分から進んで亂暴ばかり働いたのであつた。それで寺でも愛憎を盡かして彼を家に返した。日吉丸はその時やつと十歳であつた。だが素より家は貧しいので、復又他家の下男に遣られたのであつたが、何處へ行つても彼には三ヶ月とは勤まらなかつた。勤まらないのも道理、大體彼には勤める氣がなかつたのである。一體彼の希望は武士になる事であつた。二十歳の頃、彼は遠江に行き、土地の豪族

松下嘉兵衛之綱に仕へたが、併し彼の年來の望みである武士になれたのではなかつた。その下僕になつたのであつた。

彼は、どうしても武士になりたくて仕方がなかつた。松下嘉兵衛に仕へて居ても、見込みがなさうなので、やがて此處も辭して、又尾張に歸つて來た。



彼は、織田家に仕へたいと考へた。その時の織田家は、先代の信秀は死んで信長の代になつて居た。信長は當時戰國の中にあつて、出色の青年大將であつた。日吉丸は身體は小さかつたが、希望はなかなか大きかつた。「信長にあらざれば、共に功名を成すに足る者無し。」と獨りぢめして悦に入つてゐたのはよかつたが、さて何うして信長に近づいてよいか、如何にして仕官を申出たものか一向に見當もつかなかつた。色色と思案した後、遂に彼は一計を案じ出して、はたと膝を打つた。

「これは、なかなか妙手妙案であるわい。」

と彼は獨り頷いて其の折を待つたのであつた。その妙案といふのも、實の處は大變人を喰つた彼らしい計畫であつた。彼は、何處からか刀と衣服とを調達して來た。さうして

名前も自分で木下藤吉郎と附けて、密かに信長の外出する機を窺つてゐたのである。やがて待ちに待つた其の折が來た。或る日、信長が領内で狩を催したのである。

自稱木下藤吉郎は、その歸路を待伏せて信長の馬前に平服し、さて恭しく言上したのは

「臣の父筑阿彌は、嘗て君がお父上信秀公の下僕にて候ひき。臣幼より他方に流寓して、自ら君の御馬前に達する能はず候。願はくば君、復臣を收めて今より下僕となし給へかし……。」

といふのであつた。

これを聞いて信長は、先づぶつと吹きだしてしまつた。馬鹿と云ふべきか、又大膽と云ふべきか、苟くも一國の領主である自分を路傍に呼び止めるとは……。流石豪放一世に響く亂世の英雄織田信長も、これには少少面喰つた様であつた。又藤吉郎の姿もさぞ珍妙無類であつたに違ひない。やがて信長は、馬上からきつと藤吉郎の面を凝視した。そして口を開いた。

「汝の面は實に猿によく似て居るなう。さぞやその行動も敏捷であらう。宜し、願

の趣予が許すぞ。」

信長は、さう云ひ捨てると再び馬を進めるのであつた。先づこんな具合で、藤吉郎はまんまと希望通り信長の側近に仕へる事が出来る様になつた。側近と云つても、決して近仕や小姓ではなく、彼のは草履取であつた。主君の信長が、朝早くまだ暗い中に外出する時など、他の従者が一人もその間に合はぬ時でも、何時も藤吉郎だけは影の形に添ふ様に、信長の後に従つて居た。彼は一生懸命に仕へたのである。

唯一口に一生懸命と云つても、これがなかなか常人には出来ない事で、彼のは何事に對しても、他人の二倍も三倍も努力する事であつて、實際彼が後年秀吉となるまで、その處世術は終始一貫此の一事に盡きて居たやうである。

彼のやり方は他人から見れば如何にもずうずうしくて、一見人を喰つた様な出鱈目にも見えたであらうが、その實は正反對で、彼の頭腦の働きは誠に緻密で、主君信長の心理をしつかりと握つてゐたのだと云へる。だからこそ、如何に戦國とは謂へ、あれだけの異數な出世が叶つたのである。又一面から云へば、その主君が信長であつたからこそ彼のやり方もびつたりと合つた譯だ。明智光秀などがそのよい例證である。彼は家柄も

教養も秀吉とは雲泥の差があつた。光秀は美濃の國の明智城主の家に生れて、その血統を尋ねるなら、美濃源氏——土岐氏の嫡流であつて、主君の信長よりも血統は正しい位である。しかも光秀は、信長の夫人濃姫とは、實に従兄妹の間柄であつた。その上、武藝は勿論兵法や築城にも秀でて、又文學の造詣も深く、有名な安土城を築いたのは實に彼であつた。ところが、その教養の深かつた事がいけなかつた。教養のあるが爲に彼の言動は、ややもすれば、常識に墮して、荒れ果てた戰國の世には向かなかつたのである。その事が、又しても、天才的な信長の意に反したのである。その結果は本能寺の變となり山崎の合戦となつて悲劇的な終末を告げることになつた。それに比べると、秀吉の方は、全く非凡で、天才的でさへあつたから、他人から見ればおどけた出鱈目や大法螺の様に見えることがないでもなかつたのである。



藤吉郎が信長に仕へるやうになつた翌年の事であつた。當時信長の居た清洲城の壁が百間ばかり壊れたので、信長は早速役人に命じてこれを修復させたが、一月たつても出来上らなかつた。或る日藤吉郎は、信長に従つて恰度其の下を通りかかり、思はず上を

仰いで

「ああ、危険だ。」

と、呟いたものだ。信長 これを聞きとがめたところ、藤吉郎は謹んで答へたのであつた。

「當國には、東に武田・今川あり、西に齋藤・淺井・六角あり。虎視眈眈として我が國を窺つて居ります。然るに、此の様に備へが弛んで居りまして何といたしませう。」

お役人等は御當家に對し、誠に不忠で御座ります。」

これ聞いた信長は、黙つたまま城に歸り、密かに藤吉郎を召して、「ではお前に命じたなら、速かにこの工事を完成させるか。」と尋ねると、藤吉郎は「早速完成して御覽に入れます。」と答へたのであつた。で信長は、彼に命じて工事を監督させる事にした。喜び勇んだ藤吉郎は、掛の役人に向つて

「今日から自分が監督するやう、主君の命令であるから、この事を工夫等に傳へて、自分の命令を聞く様にしてくれ。」

と云つたが、役人は草履取である彼を馬鹿にして居るので

「お前が勝手にするがよい。そんな事は俺は知らない。」

と、答へて相手にもしてくれなかつた。そこで彼は一計を考へ附いた。といふのは「今度主君信長公から、お前等に御馳走を下さるのだ。」といふことにして工夫等と呼び集めて、酒を興へ肴を喰べさせて、さて彼は工夫の全部を十隊に配分して、一隊に十歩づつを受持たした。そして何れの隊が早く完成するか、一番早かつた隊には褒美をやること申渡しておいて、自分は一生懸命に監督した。

他の役人の様に、自分だけは詰所の内に這入つて朋輩等と無駄話に耽つて居る様な事をしなかつた。だから、修理工事は僅か二日で出来上つてしまつたのであつた。恰度其の時信長は、狩から歸つて来て、これを見て大に驚いて

「猿め、なかなか大法螺を吹くだけあつてやりをるわい。」

信長は遂に藤吉郎を役人に取り立てたのであつた。

これが藤吉郎出世の緒であつた。世間の人は、折角この緒をつかんでも、それで慢心を起すからいけない。併し彼にはそんな事はなかつた。彼の希望が、非常に大きかつたからである。決して、小役人などで満足する彼ではなかつた。其の後も益々忠勤を勵んで

で少しも怠らなかつた。



永祿六年の夏、信長は河洲と呼ぶ處で、今で云ふ閱兵式をやつた。信長も、戦國の武將としては珍らしい變つた人であつたので、その時戯れに、藤吉郎に命じてその指揮をさせて見た。ところが驚く可し、彼は實に立派に堂堂と采配を揮つて、まるで一かどの武將の様であつた。これを見ても、如何に彼が不斷に努力をして居たかが解るではないか。彼は、もともと武家に生長した者ではないのであるから、最初から兵の指揮を習つて居る筈はないのである。であるから秀吉の様な者こそ、今日で謂ふ全くの苦學力行の人であつたのである。

そんな風で、彼は次々と手柄を立てては次次に又信長に認められていつた。信長といふ人が又、革新的な思想の持主で、決して舊い慣習などに拘らない人であつた。一藝一能に秀でた人間は、ごしごし拔擢したものである。だから、藤吉郎の天性の奇才は、此處に信長といふ主君を戴いて一段とその光彩を發揮しはじめたのである。

或る時は又、信長の爲に城の薪炭部を司つて、その冗費を省いて、お褒めのお言葉

を頂戴した。恰度其の時、信長は大に雄圖を抱いて、天下を平定しようと思つて居た。それには、先づ勤儉を勵行して、軍資金を蓄へる必要があつたので、薪炭部の他にも色と城の經濟的な方面にも、藤吉郎を利用して見た。それを藤吉郎はいづれも信長の意に添ふ様見事に仕終せたのであつた。信長の彼に對する信頼は日日に加はつていつた。その度に、又彼の俸祿（今の給金）も上つていつた。だが彼は、まだ一度も戦には出してもらへなかつた。ところが彼の待つて居たその時が來た。信長が美濃の齋藤氏と戦を初めた時、信長方は洲股河^{オホまたがは}を踰えて度度攻め入つたが、勝利を得る事は出来なかつた。そこで信長は、或る日部下の諸將を集めて、河の西に壘を築いて、諸將の中の一人が此處に止つて敵を防ぐ事にしようと思ふと云つたが、あまり危険な役なので、柴田勝家や丹羽長秀・佐久間信盛等を初め、部下の猛將等は皆尻込みをして一人として進出るものはなかつた。此の時、藤吉郎が進み出て、その大役を自分が引受けよう云つた。人人は呆れてしまつたが、彼はあくまでも眞面目であつた。信長は困惑して居た時だつたので、危みながらも、一先づ彼にやらせて見る事にしたのであつた。

藤吉郎は、主君信長の兵を借りてこれを損傷した場合には、味方の迷惑だと思つたの

で、自分で蜂須賀小六や稲田大炊・梶田隼人・青山新七といつたやうな野武士を狩集めて、これ等の人を使つて奇計を以つて瞬く間に壘を築いてしまつた。そして敵の城に夜打ちを仕かけて、大勝利をしたのであつた。その上敵將の首級を信長に奉つたので、信長の喜び様は一通りではなく、自ら旗印を藤吉郎に授け、三千貫の知行^{ちぎやう}をあたへ、其上秀吉といふ名前さへこの時授けたほどであつた。此處に於て、草履取藤吉郎は遂に立派な武士となり、木下秀吉と名乗る様になつたのである。



それからの秀吉は、信長の部下の多くの武將の中にあつても、實に旭日昇天の様な勢で出世しはじめた。彼は戦ふ度に負けた事がなかつた。

永祿十一年、信長は既に美濃を平定して近江に進出し、六角義賢を攻めた。秀吉はその先鋒となつて、諸將と一緒に箕作城を陥れた。近江路を武力をもつて通過した信長は遂に京都に這入つて、長い間三好・松永等の逆臣の爲めに廢せられて居た足利義昭を將軍に擁立したのである。ところで、信長が京都を去るに、直ぐに三好の兵が攻め入るの危険を感じた將軍は、信長に一將を残して護衛してくる様に申入れて來たのであ

る。信長は、その役を秀吉に命じたのであつた。秀吉の偉名は益々高くなり、織田信長の軍が出ると、敵兵どもは秀吉の馬印である千生瓢箪を見て、これを避ける程であつた。

秀吉は此の頃から、大器たる可き鋭鋒を現しかけて居た。凡そ天下を掌握する程の人物は、人心收攬術とても謂ふか、つまり人望が集らなければ駄目である。即ち秀吉にはそれがあつた。これは話が少し前に戻るが、まだ信長が、すつかり美濃を平定してしまはない時の事である。美濃の國の宇留間城に、大澤某と呼ぶ豪傑が居て、大變強く、信長も少し手を焼いて居た處だつた。そこで秀吉は、計をもつてこれを降参させて、一緒に信長に面謁したのである。信長は大に喜んで、その夜又密かに秀吉一人を呼んだのであつた。何かと秀吉が伺候すると、信長は「大澤は又何時叛くかもしれないから殺してしまへ。」と、秀吉に命じるのであつた。今まで決して命に叛いた事のない秀吉であつたが、この時ばかりは「叛いた時には、即ち直ぐに殺せばよい。今大澤が折角降参して來てゐるのに、これを殺したら、今後誰も降参してくるものが無くなるから、これは決して殺す譯にはゆかない。」と云つて、どうしても信長の命に應じなかつた。そして、

その夜、家に歸つた秀吉は大澤を呼び、自分の帯びてゐる刀を抜いて、さて大澤に向つて、その身邊に危険の迫つて居る事を告げて彼を逃してやつたのであつた。

秀吉には、斯うした徳があつたので、美濃の各地に居た豪傑や、心ある武士は、多く秀吉に心を傾けるやうになつた。後年秀吉の幕下にあつて、黒田孝高と共に、名参謀と謂はれた竹中半兵衛重治などもその一人であつた。要するに秀吉といふ人は、一言にして云へば、どこまで氣持が廣いのか、一寸想像もつかぬ程大度量を備へた人であつた。それで居て、決して細かい人情の機微をも忘れない人であつた。

彼は、主君信長が、外面的には非常に寛闊な人のやうに見えて居て、その實心の中は割合に吝である事も、ちやんと見抜いて居たのだつた。恰度其の當時秀吉は、度度の戦の功勞によつて筑前守に任官し、近江の長濱の城で二十二萬石の大名になつて居た。そこで秀吉は考へた。自分が今後も今までの様に手柄を立てて、益々廣い土地の大名になる事になれば、終には、きつと信長から反感を持たれる様になるに違ひない。そしたら一身の破滅になると。彼は色色と考へた末遂に一策を案じた。信長は澤山子供があるから、その中から二人程もらつて自分が養育し、やがて自分の領土はこの子供等に譲る

事にしたならば、きつと信長も喜んでくれて、自分の身も全うする事が出来ると思つたので、或る日信長に此の事を請うた。すると信長が「ではお前は、自分の身を如何するつもりか。」と尋ねたので、「願くば自分には、これから西の方中國地方の征伐にやつてもらひたい。さすれば、二ヶ國や三ヶ國はすぐ取つてしまふから、取つたならこれをそつくり主君に献上しませう。自分はその餘りを頂戴すれば結構で御座います。」とお答へしたのであつた。それで信長も大變喜んで、秀吉に自分の子供の秀勝をあたへる事にした。斯うして秀吉は、自分の主君の若君を養子にする事が出来たのであつた。



此の頃の中國地方は、毛利輝元が、一族の叔父にあたる吉川元春や小早川隆景と共同で大勢力を備へて居た。凡そ其の一族の領土は、今の山口縣から岡山縣の一部である備中と北は鳥取縣全部に及んで居た。その上岡山の浮田直家が、備前・美作の領土をもつて、これに屬して居たので、隣の兵庫縣である播磨の國の大名等は、毛利氏に攻められる事を怖れて織田氏に誼みを通じようとした。そこで、姫路の小寺政職（こやまもと）の使者として黒田孝高が秀吉のもとにやつて來た。そして、自分が道案内をするから毛利を是非撃つやう

にと勧めたので、秀吉がこの由を信長に言上すると、信長も遂に意を決して、秀吉にその征西大將を命じて、先づ播磨を取つたならばこれを自分の領土にする事を許したのであつた。處が秀吉は、播磨をお前にやると云ふ信長の言葉を辭退してしまつた。秀吉の心は、もつともつと大きな野心に燃えて居た。

それで信長は——これは自分が播磨一國をやると云つたのが不滿なので辭退するな——と考へたので、今度は、自ら自分が書いた戰の時に使用する幟をあたへながら、「もしもお前が中國全部を平定した曉には、これもお前にみんなあたへよう。そのかはり次には進んで九州も征伐してくれ。應援隊ならば、お前の請ふままに、いくらでも送つてやるから。」と云つたのだつた。これに對し、秀吉は謹んで平服してから、「自分の様な賤い身分から上つた者に、織田家譜代の諸將等を含いてこの大任を命じられた事は感謝にたへません。中國は必ず平定して御覽に入れますが、その時には、これは決して自分が頂きたいとは思ひません。これは何卒、森・矢部・福富等（信長の近臣）の功あつて未だ大名に封じられてゐない人人にお與へ下さい。自分は早速勢に乗じて、九州を伐ち従へませう。いえいえ、まだ九州も頂かうとは申しません。願へますならば、九州の一年

分の收穫だけ頂き度う御座います。そしたなら、兵糧を蓄へ戦艦を造つて海を渡り進んで朝鮮を伐ちませう。もしも君にして自分の功を賞されんと思召すならば、何卒自分に朝鮮をお與へ下さい。その上は自分は朝鮮の兵をもつて明國に押寄せ、君の御威光によつて明國を席卷し、三つの國を合せて我が日本國と爲すこそ、自分の年來の希望で御座います。」と答へたのであつた。

これを聞いた信長は、内心大に驚きながらも——秀吉奴、何時に變らず大きな法螺を吹き居るわい——と笑つて、彼の思ひのままに一任してやらせる事にしたのであつた。後年遂に豊太閤となり、日本六十餘州の精銳を動員して、大陸經營の第一歩を先づ朝鮮に踏み出したのも、彼の若き頃の大抱負を想へば、決して偶然ではなかつたのである。豊太閤こそは、近代日本の先蹤をなした人と云つても過言ではあるまい。

——大連大黒町村上 宏——

四、堀尾金助の母



珠寶擬橋斷裁



天正元年織田信長は足利義昭を河内に追放して、名實共に天下の覇權を握つた。此の年羽柴秀吉は、先に淺井長政との戦に斥候として拔群の功績があつた堀尾吉晴に百五十石を與へた。吉晴は尾張國丹羽郡御供所村（現在大口村）の人である。其の年吉

晴夫妻の間には男子が生れて金助と命名した。二人の喜びは一通りでなく、殊に夫人は豫ねて夫吉晴から聞き及んでゐた、舅泰晴の堀尾家再興の遺言をしかと心に留めて、夫をして後顧の憂ひなく充分の働きをさせて遺言を必ず果す事が出来るやう、且又此の金助を立派に守育てて夫の後を受け継がせ其の事業を完成せしめようと、深く心に誓つたのであつた。けれども所所の合戦に出て忙しい夫の留守を守り、百五十石の武士の妻として家計を立ててゆくことは容易な事ではなかつた。

併し夫人には、其位の苦勞等何でもないと思はれる程大きな輝かしい希望があり、光があつた。夫を扶けて家名を再興させる事、それは勿論であるが、尙そこには金助と云ふ子供があり、金助こそ夫人の希望であり、光であり、正に夫人の全部であつたのである。併し夫人は、金助が可愛く我が希望の總てであり光であればあるだけ、一層嚴格な躰方をした。幼い頃から、武人の子としての禮儀作法は云ふ迄もなく、有らゆる點に氣を配り、夫人自ら細細と手を取つて養育して行つた。

一方吉晴も彼自身の撓みない忠勤と獻身的な努力、それに夫人の並並ならぬ内助の功に依つて、天正五年には播磨田千五百石、同十年には丹波黒江田三千五百石、同十一

年には若州高濱一萬七千石、次いで近江坂本二萬石、同十三年には佐和山城四萬石と一段は一段と封祿を増され、累進して立派な一城の主となつた。

其の時、吉晴夫妻には既に二男四女があつたが、とりわけ長男金助は、日頃の夫人の薫陶と、それに加へて早くから修禪の道に入つて精神を磨き、敬虔な信念を養つてゐた慈父吉晴からの影響を享けて、文武の道に優れてゐるは勿論の事、年頃には稀な程の心の落着を持つ立派な若者となつてゐた。



時は流れた。秀吉は信長の後を受け継ぎ、稀世の才智を以て群雄を次第に平げ、今や海内にて秀吉の威に靡かぬ者は、小田原の北條氏のみとなつた。そこで天正十八年、秀吉は總力を擧げてこれに當り天下統一の大事業を完璧たらしめようとしたのである。勿論吉晴も一方の旗頭として參加する事となつた。

佐和山城では、此度の合戦には若君金助殿の初陣とあつて、常の出陣よりは一層の活氣を見せ、夫妻の喜びも一通りではなかつた。明日は出發と云ふ天正十八年二月十七日の暮方、すつかり出陣の用意も整ひ、城中は少し落着を見せてゐた。宏壯な庭園の樹樹は

明日の快晴を示す薄紅の殘光の中に包まれてゐた。

中庭に臨んだ夫人の居間の明障子には、昏れ行く春のうすれ日が僅かに影を落して、灯を點けない室は薄暗く、火桶の炭だけが赤赤と熾つてゐた。室の片隅にある文机の上には、先程迄此處で侍女達と遊んでゐた末娘、おコヤの置き忘れて行つた黄色の千代紙が一枚載つてゐた。夫人は唯獨り文机の前に坐つて、靜かに眼を閉ぢてゐた。夫人の臉の中には明日初陣する金助の晴れ姿が現れては消えた。其時、廊下に人の來る氣配がして靜かに襖が開いた。

「母上様。」

その人は敷居際に手を突いて頭を下げた。

「ま、金助でありましたか、中へ——。」

と夫人は閉ぢてゐた眼を靜かに開いて、歩み入る息子の丈の高くなつた凜凜しい姿を今更の様に眺めやつた。

「金助、そなたも明日は愈、初陣、嘸かし嬉しい事でありませうな。」

「はい。胸が躍る程嬉しうてなりませぬ。」

金助は僅かに頬を染めて云つた。

「そなたも十八、母は今更改めて何も申す事はありませぬ。母が常常教へ諭した其の一つ一つの總てが初陣のそなたに贈る贖でありました。金助、母の心分つて呉れませうな。」

「はい。母上様よく分りました。母上様の日頃の御教訓をしかと肝に銘じ、身につけて立派な働を致す積りでございます。」

「お立派な覺悟、母も心から嬉しう思ひますぞ。」

今迄障子に光を映してゐた夕日も、何時の間にか消えて、黄昏の氣配が深深と身に迫つて來る。侍女が灯を持つて入つて來て文机の傍の行燈に灯を點すと、靜かに一禮して去つて行つた。淡い灯の光を受けて畏つてゐる金助の之が我子かと疑はれる程立派に成人した姿を、そして稍、面長な自分に似てゐると云ふ其の若若しい整つた顔を、沁沁と愛撫の眼差で眺めやつた。

「そして父上も、親子揃つての出陣とあらば、何かと御心強く思召される事でございます。そなたの父上も、十六の時に初陣なされてから此の方、三十餘年もの間、戦

場を馳せ廻り十指に餘る程の手柄を立てられました。其の間に、此の度の出陣程お
勇み遊ばした事は無かつた爺やが申して居りました。父上は言葉でこそ何とも仰せ
られませぬが心の中ではどんなにお喜びの事か、よくそなたも父上の御心のままに仕
へ、其の片腕ともなつて働き、孝行してくれませう様、母から願ひおきます。父上も母
も、そなたの今日ある日をどんなに待つて居りました事か……。」

「母上様忝なう存じます。必ず必ず御言葉のままに致す覺悟でございます。」

「金助、そなたは先程、胸が躍る程嬉しいと申しましたな、まこと、母の胸もそなた
と同じ様に躍つて居ります。そなたの初陣は、とりもなほさず此の母の初陣……。」

「……。」

「母は、そなたの幼い時から何時もそなたと共に育つて來ました。そなたが三つの時
は母も三つ、そなたが十の時は母も十、そなたが病であれば母も病でありました。こ
れから先も、そなたと何十里、何百里離れて居ようとも、母はそなたと共に、いいえ
そなた自身となつて居りませう……。」

「母上様……。」

「つまらぬ事を申しました、金助、許して呉れます様。」

「母上様、勿體なう存じます。」

「金助、覺えて居ますか、そなたがまだ幼かつた頃、母はよくそなたに紙で兜を拵へ
てあげましたが……。そなたはそれを被つて戦の真似を致しました……。」

夫人は文机の上の黄色い千代紙を手にとつて微笑み乍ら云つた。

「はい覺えて居ります。母上様、それがたうとう真となつて今やつて來たのでござい
ます。」

金助は膝の拳に力を入れて云つた。

「まこと、あれも昨日の様であつたのに。」

夫人は凝つと火桶の火を見詰めてゐたが、急に思ひ立つた様にして云つた。

「思はず長くなつて了りました。何時迄もお話は盡きませぬが、明日は夜明に出陣致
さねばなりません。それにそなたに取つては晴の初陣です。元氣に出立出來ませう様
今夜は早くお休みなさい。母はそなたの覺悟の程も良く分り、安心致しました。體に
氣を付けて確り働いて來てくれます様に。」

「有難う存じます。母上様にもどうかお體をお厭ひ遊ばして、父上様や我身の手柄をお待ち遊ばします様お願ひ致します。」

「金助、よく云うて呉れました。ではお休みなさい。」

「お休み遊ばせ。」

金助は静かに立上つて出て行つた。其の後姿を凝つと見送つてゐる夫人の眼には涙が一杯溜つてゐた。



明くれば天正十八年二月十八日、まだ眞暗だと云ふに城内はもう大騒であつた。親子夫婦、兄弟の水盃も濟んで、大庭には鎧姿の荒武者共が武器嚴しく出陣を待ち構へてゐる。聽て吉晴父子が鎧兜に身を固め、奥から夫人が侍女達を従へて静かに出て來る頃、別當の引立てる愛馬にひらりと跨つた。

「それつ出陣。」

よく響く強い聲で吉晴が下知すると

「ははつ。」

と答へて一同は後に従つた。

馬出口迄夫人達の見送を受けて、父子は馬を進めるのである。勇ましい掛聲や、陣鐘、陣太鼓、法螺貝の音の中を、馬に乗つて進み行く金助の輝く様な初陣姿は、如何にも微笑ましく、初初しい中にも頼母しい颯爽たる若武者振であつた。

「若君様の何と云ふお美しく御立派な……あれが此の婆のお相手申しました金助様とは信じられませぬ程の御成人振り、婆は唯嬉しくて涙がこぼれます。奥方様にも嘸かし……。」

涙を拭ふ乳母の言葉に、出陣に涙は不吉なものご只管押隠してゐた夫人も思はず眼頭の熱くなるのを覺えた。

それから一日二日と月日が経つて行つた。留守居の者達の間では、何時も小田原攻の事が取沙汰されてゐた。北條氏が案外強く、直ぐには落城しさうにもない事。其の爲に秀吉の軍も長圍の策を用ひねばならなくなつた事。中でも特に山中城の攻撃で吉晴の一隊が先鋒として建てた華華しい手柄の事等。あれを聞きこれを聞きする度に夫人の心は躍つた。そしてともすれば敵味方入混る阿修羅の如き戰場を駈け廻り駈け廻り斬りまくつて

ある勇ましい金助の姿や、敵の大軍を蹴散らして勝鬨を揚げてゐる夫吉晴の頼母しい姿を、果ては數數の手柄を建てて喜びに頬を輝かせ乍ら堂堂と凱旋して來る父子の姿を幻に描いてゐるのであつた。併し時時夫人の胸の片隅を暗い影が通り過ぎる事があつた。初はそれが何であるか判然とは分らなかつたが、日が経つにつれて其の影は夫人の胸に小聲で私語いて行つた。——あの子は餘り丈夫ではなかつたし、それに、ましてや不由な戦場の事故、若しかして病にでも罹りはしまいか——と。其の度に夫人の心は一瞬暗くなつて了ふが自ら心を引立てて——いやいやそんなはずはない——と強く打消してはみるものやはり考へれば考へる程堪らなく氣に懸つて來るのであつた。

聽て六月になつた。併し城はまだ落ちなかつた。例に依つて味方は和議を勸告するのださうだと云ふ噂が傳はつて來た。夫人は早かれ遅かれ、もう戦は終ると云ふ氣がしてならなかつた。戦が終る……それに續く事は凱歌を唱へ乍ら、華華しく歸城する父子の有様である。けれど一方あの不安な影は益々濃く繁く心の片隅を通り過ぎてゆくのであつた。



蒸し暑い日が數日續いた或日、東の方から眞赤な夏の夕日を浴びて佐和山城目指して馬を走らせて來る二人の鎧武者があつた。これは尾張の國海西郡戸田村（現在海部郡富田村戸田）西照寺第四世の淳誓、今は還俗して横井源助と名乗り、小田原の合戦に参加した一武士と其の供の者であつた。

源助の深く打沈んだ顔を一目見て、夫人ははつとした。何もかも分つた様な氣がした。若しやと懸念してゐた事が本當になつて了つたのかと思ふ夫人の胸は、早鐘の様に打ち始めた。

「遠路はるばる……。」

夫人の語尾はかすれてしまつた。併し夫人は氣丈にも心を取り直し源助の語るのを聞いた。

「御子息金助殿には去る六月十二日陣中にて御逝去なされました。只今拙者、御遺物をば御父吉晴殿の御意志に依り持參致してござります。」

夫人は黙したまま頷いた。そして涙一滴落さなかつた。

「奥方様の御心中、拙者深くお察し申し上げます。此の上は供養念佛をなされ、厚く

菩提を御弔ひなされます様、切に願ひ上げます。」

「源助殿とやら、まことに御丁寧に、妾も嬉しく存じます。武士の妻として母として誠に本望でございます。金助の事、豫てから覺悟を致して居りました。何もかもが御佛の思召でございます。これからは唯御佛の御心一つにお縋り致して參る積りでございます。」

源助が退出して誰も居なくなると、夫人は愛子の遺具に取縋つてよよ泣きくづれて了つた。堰を切つて流れ出す河水の様に、もうそこには何の理性、何の意志の力も働かなかつた。唯我が子愛しと泣悶える哀れな一人の女性の姿に過ぎなかつた。

この位の時が経つたであらうか。夫人はつと身を起すと、凝つと空間の一點を見詰めた。泣き濡れた頬は青褪めて、もう其の瞳からは一滴の涙すらも湧かなかつた。燃える様に美しい夏の夕日も何時しか沈んで、夕闇迫る部屋の中には、愛子の遺具を前にした夫人が其のままの姿勢で何時迄も端座し續けてゐるのであつた。そつと侍女が足音を忍ばせて雨戸を下して行つたのも、灯を持つて這入つて來たのも、夫人は氣附かなかつた。夫人の臉には初陣の日の金助の姿が判然と映つてゐた。籠手を嵌めた腕を稍、張つ

て、手綱を握り乍ら金助は兜の緒を心持強く締め、上氣した頬を輝かせ乍ら、鞍坪の上から微笑みかけるのであつた。又陣鐘や陣太鼓の鳴り轟く中を、幾百、幾千もの人馬の足音に守られて、金助は父と並んで繪の様に美しく馬を進めてゆくのであつた……。其の夜おそく夫人の部屋からは幽かに誦經の聲が流れてゐた。

悲しい夜が明けた。夫人は終夜寝もやらず遺具に對してゐたのである。併し人が起きて來る頃迄にはもう嗜み深い夫人にかへつて、眼のあたりに昨夜の悲しみの跡が僅かに暗い影を残してゐるのみで、不斷と少しも變りなく、流石は武人の母、留守居の仕事をあれこれと甲斐甲斐しく指圖するのであつた。それを見るにつけ侍女達は一入涙を催さずにはゐられなかつた。

◇

一日一日と日は過ぎて行つた。併し夫人の心の悲しみは時と共に深まつてゆくばかりである。夫人に取つては目に見るもの耳に聞くもの總てが亡き金助の思ひ出となつて、ともすれば悲しみに打ちのめされようとする事もあつた。此の頃の夫人に取つて楽しいものは夜と眠とだけであつた。眞暗な夜、唯一人靜かに遺具に對して誦經し、念佛する

時、金助の魂と自分の魂が一つに溶け合ふのを判然と感ずるのであつた。「金助や……。」と静かに呼び掛け乍ら、夫人は金助の色々の思出に耽つた。時には金助が夫人に話しかける事さへあつた。併しさうした事が、何の慰も與へて呉れない様な時、夫人は念佛を唱へ乍ら静かに眠に入つた。何もかも悲しみも苦しきも總てを一つに包んで魂を休ませてくれる眠こそは、悲しさ寂しさに堪へられなくなつた夫人にとつて、唯一の慰安であり、眠つてゐる間だけが幸福であつた。併しこの眠さへも惠まれぬ夜があつた。そんな時夫人は床の上に起き直つて溢れ出る涙を流れるままに任せて、静かに誦經するのであつた。

小田原に於ては、七月五日遂に開城となつた。そこで吉晴も凱旋して來る事となり、城中では何かと忙しかつた。併し何時もの凱旋の時の様に人人の心は躍らなかつた。聽て物見の侍が到着を知らせた。城に残つてゐた者は皆、馬出口迄出迎へるのである。夫人の眼は先頭に立つて唯一人馬を遣る夫の上に止つた。それから忙しくもう一つのものを探した——ゐない——夫人はそつと口の中で呟いた。——ゐない——もう一度呟いた。若しやと願つてゐた最後の望はもうぶつとりと絶たれて了つたのである。

吉晴は戦功に依つて濱松十二萬石に封せられたけれども、それとても夫人の心を慰めるには餘りに價値なきものであつた。

夫人と同じ様に、吉晴も金助について未練がましい事は一言も云はなかつた。併し心中で深く嘆いてゐた事は事實であつた。吉晴は其年、金助追福供養の爲に、京都花園妙心寺内に金助の法名逸岩世俊禪定門の中の二字を取つて俊岩院（現在は春光院）を建立し、九天の法嗣碧潭を開祖としたのである。其の中には金助の生けるが如き木像が父母の像に守られて今尙安置してある。



其後堀尾家は順調に發展して行つた。吉晴は慶長三年、三中老の要職に就き、其の翌年越前府中五萬石を増し、更に其の翌年關ヶ原の戦の功に依つて、出雲隱岐二十四萬石の大名となり、同八年には家督を次男忠氏に譲つて、己は松江城を築いて隱居した。けれど幸運はさう長くは續かなかつた。翌九年には忠氏が二十八歳の若さで惜しくも逝いて了つたのである。夫人は掌中の玉を又一つ取り落して了つた。當時孫の忠晴は僅か六歳にすぎなかつたので、吉晴は老軀を提げて再び政を執らねばならなかつた。併し同十六

年には最後の頼みとしてゐた其の吉晴も六十九歳を一期に逝つて了ひ、更に元和四年には娘二人揃つて世を去つたのである。

涙の乾く暇もなく相次ぐ不幸。それは夫人にとつて餘りにも冷い運命の痛撃であつた。それにつけても今更の様に、心に深くしんしんと喰ひ入つて來るものは金助の死であつた。他の子達は兎も角も此の一家の榮えた様を見、夫人としても心盡しの看護をしてやる事が出来た。けれども金助はあの不自由な戦場で、戦勝の喜びも知らずに、ほんの落城の直前、寂しく死んで行つたのである。それは夫人にとつて一通りの諦めでは諦め切れない悲しみであつた。さきに夫人は、嘗て金助の遺具を持參した横井源助が再び佛門に歸して淳誓と稱したのに依つて、淨土の信仰に入つてゐたのであるが、次々と續いて肉親と死別し年老いて幼い孫にかからねばならぬ不幸に逢つた夫人の心は、唯ひた向に深い信仰へと向つて行つた。そして古來の佛教女性の多くがさうであつた様に、夫人も其の信仰を何等かの形に現はしたいと思ふ様になつた。其の頃郷里尾張から來た人の話に依れば、熱田神宮の前を流れる精進川の裁斷橋が朽ちて通行人が非常に難儀してゐると云ふ事である。夫人は之を聞いて欣喜雀躍した。「諸惡莫作、衆善奉行……とは

兼兼から聞き及んでゐる御佛の教であるから、今此の橋を修造する事はとりもなほさず我子金助の供養になり、佛菩薩の大悲願にも同じいわけ、今年は恰度三十三回忌だ。さうだ、其の橋は是非私が修造させて貰ひませう。」と夫人は勇猛心に燃えた。

◇
それから數ヶ月を出ずして元和八年裁斷橋修造の工事は完成した。それは長さ十一間半、幅三間の石礎木製の立派な橋であつた。四隅には美しく磨き上げられた唐銅の擬寶珠があり、そこには夫夫銘文が印刻されてあつた。其中三つは漢文であり、簡單に此の度の橋修造の來歴を記したものであるが、西南隅の銘は國文であつて、恐らく夫人自らの作と思はれる。

「てんしやう十八ねん二月十八日に、をだはらへの御ちん、ほりをきん助と申十八になりたる子をたたせてより、又ふためとも見ざるかなしさのあまりに、いま此はしをかける事、ははの身にはらくるいともなり、そくしんじやうぶつし給へ、いつがんせいしゆんど、後のよの又のちまで、此かきつけを見る人は、念佛申給へや、卅三年のくやう也。」

何と云ふ哀れにも優しい慈愛に充ちた母の心遣ひであらう。——そなたが何十里、何百里離れてゐようとも母はそなた自身となつてゐませう——と云つたあの母は、其の子が逝いた後までも、尙涙の中から其の愛子の魂を守り続けようとしてゐるのである。そして自分の亡き後も尙永久に其の魂が誰かに守られてゐる様にと、世の人人に願つてゐるのである。何と云ふ熾烈な母性愛の現れであらう。古來、金石の銘文は多くあるが、これ程直截に母の子に對する深い濃やかな慈愛が盛られてゐるものは、恐らく他に多くは見ないであらう。そこに滲み出てゐる汲めども盡きぬ真情は讀む人をして感激させ、夫人の母としての慈愛に頭を垂れさせずには措かないであらう。

此橋は其後屢、架換へられ、大正十五年には精進川も改修せられて了つたけれども、其の四つの唐銅の擬寶珠のみは今尙原位置熱田區傳馬町に保存せられ、我が尾張の生んだ一女性の珠玉に等しい母性愛を道行く人に物語つてゐる。

——愛知縣第一高等女學校高等科第二學年 長谷川 正——

五、家康と三河武士

太閤が「天下に怖いものは家康の太い腹のみである。」といつたといふ。剛膽機略と質實堅忍とは、家康が三百年の太平を開くに至つた所以である。家康は七代前の祖松平信光の祈願文といひ、祖父清康の是の字の占といひ、父廣忠の鳳來寺祈願といひ、生をこの世に享けた以前から、天下の將軍たるべき一族の信仰と其の素質とが具はつてゐた。一族が家康を無事に生存せしめる爲に滅私奉公の限をつくしてゐる。これが三河武士の精神であり、やがて日本武士道として精華を發揮するに至つたのである。されば家康の臣下には、夏目吉信・鳥居強右衛門・本多平八郎・鳥居元忠・大久保忠教などを始めとして、武士の鑑として其の雄魂の躍動するものが尠くない。

永祿五年正月十五日、織田信長に招かれて岡崎を立ち、熱田正満寺の休息所に休んだ徳川元康（後の家康）一行は、出迎への林佐渡守通勝、瀧川左近將監一益、菅谷九郎右衛門の同勢を先に尾州清洲城さして馬を歩ませてゆく。

三河岡崎の城主徳川元康は生年廿歳であつたが、その豊かな頬、聴く和やかな眼にう

かがはれる深い思慮、すぐれた器量は、この若い武將の多難だつた人となりと思はせてゐた。一昨年の桶狭間合戦が終つた後、信長にしたがふ外戚の水野下野守信元を通じて信長は幾度か和解を申入れて來た。彼が父祖以來の争をすてて元康に和睦を申込んで來たのは何故か。

かの桶狭間の戦は、元康が生母と生別し、物心つかぬ幼時から人質とまでなつて服従して來た駿河の豪將今川義元を一夜にしてたふし、未だ三十歳に充たぬ青年信長を畿内隨一の雄將たらしめた。

そして、この信長は今、敵方の一客將である徳川元康に對して對等の和睦を申込んで來たのだ。今元康の胸に思ひあたるのは二年前の大高城兵糧入れの功名のことである。

義元が先に尾張攻略を企てるや、彼の命によつて要路の地知多郡大高城を守つた鶴殿長助長持は信長の疾風の用兵によつて四圍をかこまれ、敵中にとりこめられるに至り、兵糧は缺乏して落城せまり、義元の心痛は一方ならぬものがあつた。敵中を通り如何にして大高城へ兵糧を搬入するか。諸將士の軍議は次の如くに決せられたのである。

「若し兵糧運搬の小荷駄を奪はるることあらばかへつて味方に大害を招く重大事な

り。これをなすものは若年と雖も智慮非凡にして、老練武功の士を多くかかへられし徳川藏人殿を以て外になし……。」

合戦の度毎に、苦戦の地には必ず元康をさしむけて徳川家をしひたげ、その勢を殺がうとする今川氏一族の計らひを、じつと堪へて來た元康である。彼は昂然として言つた。

「か程に多き宿將剛兵の皆皆が、かなひがたしと仰せある一大事を、若年の元康ならではなし得ぬと申さるこそ、面目に候。」

かくして、手勢すぐつて八百人、荷駄人足三百人を以て兵糧を中にかこみ三段備への隊を組み、計を以て織田勢の虚をつき一氣に押し、一兵もそこねずして大高城へ運び入れたのである。十八歳の元康のこの功名は義元を驚嘆せしめると共に、敵將信長の剛毅な胸にも大きな感動をあたへずにはおかなかつた。

嵐について織田勢が桶狭間に殺到、信長が一舉にして義元を屠つたのは永祿三年五月廿日の午であつた。その時元康は義元の命によつて鶴殿長助と代つて大高城にあつたが、廿日夕刻に至つて義元討死、駿河勢總くづれの風説は頻りに城中に聞え、やがて信長勢が大舉してここを圍めば一敗は炬を見るよりも明かであると、城兵の疑惑や動搖は漸く

強くなつて行つた。

「かかる時は敵方の間者によつて虚説も傳へられるもの、輕輕しく動いて人人の謗をうけてはならぬ……。」

元康は諸兵をしづめて確報を待つたが、遂に織田方の部將水野下野守信元から、私かに義元の戦死と共に、織田勢の道をふさがぬ中、早く三河へ引上げたまへ……この知らせをうけたのである。

水野信元は刈谷の城主、元康にとつては生母傳通院殿の兄に當る。敵味方をこえた肉身の情に元康は深く感激しつつ、敵中を突破して岡崎へ歸つた。

廿日月の光淡い夜道を、幾度か敵方に遭つてはきりぬけつつ、しかも騒がず亂れず引上げる徳川勢。それを信長は追討たうとはしなかつた。信長の自分に對する好意、理解情誼、そして時代の動きを見とほす眼力、元康は心から敬服してゐるのである。

◇

元康はあたりを見廻した。彼をとりまく家臣たちは、信長の居城に近づくに従つて、いよいよ心をくばり、眼を鋭く光らせてゐるのである。

それを見ると又、元康も敵地に入るのだ……と言ふ感を深くする。

同勢が清洲城下へ着いたのは午の刻近くであつた。道道を、城の大手門まで群衆が群れてこの新しい客人の一行を見物するのである。群衆のがやがやとざわめく聲の中にはかつてこの地に人質として過した元康を侮る文句や、その年若い敵將の風貌をひやかす様な言葉が、馬上の元康にさへ聞えた。

群衆は立止り佇んで見てゐるのである。

出迎への林・瀧川等の同勢には土下座しておきながら、わざと徳川勢に對しては、うす笑を浮べて立上る者もゐた。元康が平然として馬をうたせる如くに、まはりに従ふ家臣らもつとめて、わき目もふらず、憤をおさへてゆくのである。

大手門に近づく。信長は諸將士を従へて二の丸に出迎へてゐたが、大手門前は群衆が雑踏し、さわがしさはいよいよ烈しくつにつていつた。

「殿、雑人どもが先ほごよりの無禮、とりひしいで参りまする。」

高力與左衛門が馬側に寄つて齒がみもしかねまじく言ふのを元康は

「よせ、大人氣ない。」

と、止めた。

「なれども、餘りにもわが君を侮り申せし態度、捨ておきましては御名にもかかはりませうに。」

元康は黙つてゐた。

群衆は道をせばめ聲をあげて近づいて來た。おのれ、馬足にかけて……と元康の家臣たちがたまりかねた時、す早くをどり出た一人の少年武士があつた。逞しい筋骨は十六七歳にも見えだが、面はまだ全くの童顔である。

少年は、脇にかかへた長刀を閃めかすと、まつ向にふりかざして進んだ。

「三河の徳川元康公御參着なるぞ！ 汝等何の無禮。目にもみせてくれうか。」その聲は凜凜とひびき、威丈高にはつたと睨んだ憤怒の形相は少年を羅刹の如き偉丈夫に見せた。

「おのれつ！」

少年は長刀をふり乍ら、三足四足、威嚇する様に進む。

「下座せい。えい、土下座せい。雜人ばら。三河武士の刃の錆になりたくなくば、土

下座して我君を拜し申せ！」

群衆のびたりと鳴りをしづめたのが不思議のやうであつた。

「やりをつたなう。」

元康に附添つてゐた石川伯耆守數正が皺の面をほころばせて言つた。元康は少年のふるまひを黙々と見てゐるのみであつた。

群衆は何時の間にか大手門前まで兩側に土下座の膝を揃へて一行を仰いでゐる。

「いざ、わが君。」

少年はつかつかと引返すと恭しく一禮して言つた。

◇

「おお、徳川殿、よくこそ、よくこそ參らせられた。」

二の丸の玄関に迎へた信長は、手をとらんばかりに元康を請じた。はげしい氣性の面にも、偽らぬ喜と懐かしみの情が溢れてゐた。元康が主だつた家臣數名を従へて式臺をふむ

「いざ、此方へ。」

と、信長は自ら案内に立つた。あたりの人などには少しも憚らぬ素直な態度であり、しかも禮儀は嚴重であつた。

元康の佩刀をささげ持った植村新六郎家政は逸早く、影が身にそふ様に主人の後へ従つた。信長の諸將士は機先を制せられた形であとに従ひ、元康の從臣らはそのあとについたのである。

本丸へ導かれ、定め席についた時、信長の家臣の佐久間信盛が植村新六郎の側へつかつかと近よると

「御大將同志の御對面に、側近く從ふは無禮であらう。ひかへられい。」と鋭く叱した。

双方の家臣等の間にさつと緊張の色が流れたが、植村は耳にもかけずに黙々と刀をささげてゐる。

「やあ、聞えぬか。強ひて無禮いたさば用捨はせぬぞ。」

柄つかに手をかけるばかりに詰寄るのを見返り乍ら植村は

「御和睦の儀全く終るまではまだ敵地ぢや。臣が君の御佩刀はかせを捧げて側近に坐するが

何の無禮ぞ。御身等の習はしはいざ知らず、われら三河武士には當然のことぢや。」きつぱりと言ひ放つと信盛の面を鋭く見返した。

信長の家臣等はごよめいたが、信長はそれをはげしく制止した。

「捨てをけ！ 苦しうない。」

泰然として居る元康に向つて

「植村の武勇剛直の氣骨はわれらも存じ居る。左様なことで引込む新六ではないぞ。

なう徳川殿。」

と笑つた。

その一言は相互の侍たちの心をやはらげてしまつた。

「新六郎奴はこの元康にとつては主従をこえた恩のある者。きかぬ氣のふるまひも常常大目に見過し居ります。無禮の儀は元康に免じて御許しの程を……。」

「いや、氣にかけられな。かまはぬ。かまはぬ。」

信長は上上の機嫌であつた。

元康の祖父松平清康は家臣阿部彌七郎のために斬られて横死し、又父の廣忠は佐久間

九郎左衛門からの刺客岩目八彌いはめはちやのために刺されて非業の死をとげた。植村新六郎はその
兩度共に逸早くかけつけて、その場を去らせず下手人を討ちとり主君の仇を二度までも
報じたのである。元康が言つたのはそれであつた。

新六郎はこの元康の言葉も耳にかけぬかの如くに、ただ鋭い眼で主君の身邊を守りつ
づけるのであつた。

「さて、この度の和睦の儀早速にも御承引にて、信長過分に存する。」
信長は徐ろに言ふ。

「したが、貴殿は父祖の代より今川氏に従はれ格別に深い因縁ある間柄、それを斷ち
きつてこの信長に快く應せられしことわれらのこの上なき喜びにて御座る。」
信長はさも満足げである。そして

「わが織田家は徳川殿とは松平の昔より事毎に争ひ戦つて仇となりし間柄、それを信
長より強ひて望んで和睦を求めしは竹千代の幼少の頃よりすでに徳川殿を御見込み申
して居つたからのこと。今川義元なき今は互に昔を忘れ永久に水魚の交をなし、兩家
の旗を以て天下の亂を平げん考、徳川殿がもし天下を取らるれば、信長喜んで幕下に

參する覺悟、又われら運よく天下に令せば、御身來つてわが旗下に參せられたい。」

「もとより、元康の喜んで望む所に御座ります。思へば竹千代の昔、御父君信秀公
の御もごに入質として過せし頃より、兄ども敬ひ親しみし信長殿でござる。したが織
田殿にはこの元康のごを御見込み下されしや。」

信長は笑つて

「今川義元、度度尾張を攻むるといへども、先手となつて手痛き軍するは何時も徳川
勢。殊に先年の大高城兵糧入れの折、われらの軍を尻目にかけてまんまと成遂げられ
しあの智、勇。信長はとほど敬服いたした。が、それよりも心ひかれたは、やはりそ
の昔共に暮した吉法師きちほうし、竹千代の幼心がよみがへつたからであらうかの。」

二人は遂に明るく笑ひ合つた。

酒肴が運ばれると信長は自ら呑みためして元康にすすめた。

元康が今川に人質として送られる途中、織田方へ奪はれて尾張に過したのは、元康六
歳、信長十五歳の昔である。傍若無人の若殿と、深慮成人の如き幼童とはすでに心通ふ
ものがあつたのだ。

「この信長が義元をたふして後は、かの息氏眞うせまね暗愚にして頼とならず、徳川殿は必ず水野下野を頼んで和睦申込まるるならんと思ひの外、剛氣の御身は義元の弔ひ合戦と稱して獨り尾張に攻め入り織田勢を惱まされし義心、勇武。信長いよいよ感じ入り、まことの英雄とは若年の元康殿、この人をおいてわが天下の業の輔けと頼む人はなしと思ひたちし次第に御座る。」

元康の沈靜な面に強い感動が漂つた。聲は凜凜と響く。

「仰のおもむき、元康身にとり、いかばかりの光榮ひまらに候。かの今川とは先代よりの交り深く殊に某それかし幼くして義元に育てられしことは世人の知るどころ、もし氏眞が父の弔ひ合戦の軍をおこさば、催促されずとも、まつ先かけて尾張に攻入り織田殿にはむかつて義元の舊恩に報いんと覺悟いたし、氏眞のもとへ言ひおくりしことも度度なれど、氏眞はわれらを疑ひ、心臆して更に同意せず、つくづくと思ひあきらめるより外なき次第でござつた。」

信長はさこそと頷く。

「この元康、死者を誇るは好まねど、義元はもとより邪惡の心ある人にて、某を庇護

いたすを口實に、わが家の領地を取り上げ、苦戦の折には必ずわれらをさし向けて兵を損じ勢を殺がしめる有様。ひたすら堪へ通したれど今川はわれらにとり仇にこそあれ味方にあらずと思ひ定め候。」

激する思ひに元康の言葉は亂れた。

「その策にかかりわが幼少より譜代の臣を犬死させしこと幾許ぞ……元康が終生の怨でござる。」

元康の頬をつたつて涙ははらはらと散つた。信長も流石に深く背いたが

「過ぎしことは悔やまるるな元康殿。殊にこの信長を羨やます程の家臣を許多もたれし御身、植村といひ、石川・高力かうりきといひ主のためには身命を顧みず、鬼神も恐れぬ面魂。羨しうござるよ。」

「盃をどらさう。進め。」

信長に聲をかけられて元康の臣、石川數正・高力與左衛門・酒井與四郎等はするすゝと膝行した。

「お見知りおかれませ。」

と、平伏する家臣等を見つつ元康は言つた。

「これなる石川・高力・酒井は、この竹千代が織田殿のために人質として奪はれ申した時、身を以てわれらを守り、この尾張までつきしたがひし者共に候。」

信長は、はたと膝を打つて

「うむ、信長も覺え居る。その折手痛く織田方の侍をなやまし竹千代殿の輿につきそつて離れなかつたといふのはそち達であつたか。さてはその頃よりの忠誠か。」

盃が下された後、信長は刀掛の愛刀を取ると、植村新六を呼んで言つた。

「その方、今日の意氣は樊噲はんくわいが鴻門こうもんの會の勇にもまさるものぢや。引出物取らさう。小氣味よい奴。この行光の一刀そちに遣はさうぞ。」

新六郎は元康の許を得、臆せず進んでうけた。

「先刻よりの無禮御咎もなく、この上なき御賜はり物、忝く頂戴仕る。御禮には戰場の働にて、この行光を十二分に役立て申さん。」

「もし信長と戦はば、わが首をとる心であらう。逞しい奴なう。」
と笑つて、信長は性急に何かを求めてゐたが

「大手門前にて、先程雜人ばらを取りおさへし若者といふは、何れにある。」

「お召しに御座りまするか。」

信長の聲に應じる様に、先程の少年武士が進み出てゐた。

「そちか。おおこれは若い。思ひの外に若い奴、何歳ぞ。名は何と申す。」

「元康公家臣本多平八郎忠勝生年十四歳、御見知りおかれませ。」

「愛い奴。おぼえおくぞ。面をあげい。」

平八郎は信長をきつと見上げた。

「平八、無禮ぞ。下り居れ。」

とたしなめる元康に

「かまはぬ。すておかれよ徳川殿。こやつ三河武士の雛形つらだまといふ面魂おもたましいぢや。頼もしい奴。功名せい。功名せい。」

元康は靜かに言つた。

「この貧しき元康にとつてこの者共こそ唯一無二の寶でござる。」

「さうあらう。さうあらう。この信長にとつても實に望ましい寶ぢや。」

二人の若い武將は各、違つた心境で、しみじみとこの侍たちを見つめるのであつた。

——西加茂郡譽母第三尋常小學校 伊藤 巖——

六、眞田信之の夫人

〔眞田信之事績の梗概〕天下分け目の關ヶ原の戦に際し、眞田信之は徳川家の恩義に感じ東軍に赴き、父の昌幸と弟の幸村とは豊臣家の恩義忘れ難く西軍に與し、上田の城によつて、中山道を西上する徳川秀忠に抗して秀忠に戦機を失はしめた。關ヶ原では小早川秀秋の裏切りによつて東軍の勝利となつたが、戦に遅れて譴を受け且つ嘯を中外に遺した秀忠の憤怒は一方でない。戦後昌幸を斬罪に處することとなつた。信之は井伊直政・榊原康政に因つて減刑せられんことを父の爲に嘆願したが、容れられない。そこで信之は「臣が父の大罪素より今日あるを知つて居た。臣既に徳川氏の厚恩を受け、父に負くとも君に負くことは出来ない。然れども今坐して父の死を救ふことの出来ないのは不孝これより大なるはない。冀くは父が刑を被るの日、請ふ臣に先づ自殺を賜へ、罪人の子刑を受くるは當然のことである。臣の父をして、臣が君に負かず甘んじて刑を受くることを見せしめたならば、父も甘んじて刑につくであらう、臣も亦笑を含んで地に入らん、是れ臣が好死期であり、又臣の願ふ處である。」と。康政これを開き深く感動し、保元の義朝まきに地下に愧づべしと、直政と共に秀忠に進言した。秀忠大に歎賞し卒に昌幸の死を宥し、幸村と共に紀伊に放つた。昌幸は九度山に入りて僧となり、信之は上田三萬八千石、沼田二萬七千石を賜ひ、尋いで三萬石を加賜し、尙大阪役後十三萬石を加賜し、松代城に徙つた。幸村は父昌幸の死後、徳川方にて重く用ひんとしたが聞かず、大阪の役に紀州を出て秀頼の許に參じ、家康の軍を苦しめ勇名を轟かせた。

父子兄弟と頼み親しんでも、今日あつて明日を量られないのが戦國武士の習であつた。世の亂れのあはれさは、怨敵互に角を闘はせ、骨肉相食むといふ悲惨な世相をさへ繰返すことが少くなかつた。

これは豊臣方と徳川方とに確執が生じた時の事で、慶長五年徳川家康が上杉氏征伐の爲に關東に向つた時、徳川氏の臣であつた眞田伊豆守信之(信幸)は、家康勢に加勢するため關東に向ふことになり、その居城上野國沼田城下は出陣の慌しさにごつた返してゐた。城内では凜凜しく甲冑に身を固めた信之が夫人に向つて

「確と留守居を頼んだぞ。」

と心をこめて言渡した。夫人も

「畏まりました。留守居のことは御懸念遊ばさずに、心ゆくばかりの御武勳をお建て遊ばしませ。吾子諸共、めでたき御歸城の日をお待ち申してをります。」
と、決心の色も頼母しく夫を勵ました。

「おお、よく云うた。では參る——そちも體に氣をつけるがよいぞ——。」

信之が立上つた時、夫人は更に信之の袖を押へて

「暫くお待ち下さりませ。此の期に及んで斯様な事を申すも妻として如何かと思はれ、心苦しうはござりますが……。」

「何事ぢや、申してみい。」

信之は眉をひそめて振返つた。

「實は御舅君の御心中に穩やかならぬものが潜んでゐるやうに思はれます。或は大阪方に御心變りせられるのではございますまいか。此の事よくよくお心にお置き下さいませやう。」

と夫人は聲をひそめて注意を促した。

「その事であつたのか、案ずる迄もないわい。では參るぞ。」

信之の眉宇には堅い決意の色が表れてきつぱりと云ひ放つた。夫人は夫の強い覺悟を面に悟り、袖を放して、ただ

「お幸よき御奮闘を……。」

と深く頭を垂れた。信之は頷いて出て行つた。後を見送る夫人の眼頭にはかすかに光る

露があつた。

信之は父昌幸と弟幸村（信繁）との三人で、佐野と云ふ處まで來た。と一行の後に蹄の音も高らかに一頭の栗毛が駆けて來た。馬上の武士は昌幸の姿を見るとひらりと馬より降りて

「昌幸殿でござりまするか。」

と聲をかけた

「左様昌幸でござる。」

昌幸の聲に若者は恭しく一禮を捧げて一通の書狀を差出した。昌幸が開いてみると、豊臣方からの度重なる催促狀であつた。しかも此の度は石田三成の直筆で

「今度徳川方と手切れに及び豊臣家の爲に一戦に及ぶべし。是非共父子三人打連れて豊臣家の舊恩を偲ばれ御味方に參り給へ。」

と記されてあつた。これを見て父昌幸は信之兄弟と談合すべきか否かに迷つたが、やがて無言の中に其の書狀を信之に渡した。信之は一讀すると太い眉をびりびり動かしたが

これ亦無言で弟に渡した。幸村が讀み終ると、昌幸は待ちかねた様に

「如何致したものであらうの。」

と呟く様に云つた。

「父上は如何遊ばしますや。」

幸村の聲に

「ふむ。」

腕拱いたまま昌幸は考込んでしまつた。何れに加勢いたしたものであらうか——じつと默想する老將昌幸の額には脂汗がにじんでゐた。——この昌幸とてもみすみす負ける方には味方したくない。それに今度の戦は、如何あつても豊臣方に勝利がみられるとは思はれない。それに又信之は徳川氏の祿まで食んでゐるではないか——かう考へて來たときであつた。昌幸の頭には電光の如く閃くものがあつた。それは豊太閤から受けた深い御恩だつた。若い頃から目にかけて昌幸を可愛がつて下さつた太閤に對し、かねがねこの昌幸は、主君のためには如何なる困難も厭ふまいと幾度誓つたことであらう。先年豊太閤がなくなれるときにもあれ程に「頼む」と仰せられたではないか。であるのに太

闇がなくなると間もなく天下の勢力は家康に移り、豊臣家は落日の運命に立至つてしまつた。今やあの太閤殿下の御子にとつては、正しく危機ではないか。ここここに及んでからは、何を迷ひ何を惑ふ所があらうぞ……。昌幸の胸にはぐつと強いものがこみ上げて來た。如何なることがあつても豊臣家の味方をして御恩に報いねば、武士としての面目が立たぬ。昌幸は強い強い決心をした。稍、あつて

「豊臣家にお味方をするのが我等にとつて當然であらう。」

昌幸は低いが、しかし力強い聲でさう云つた。

「私もさう存じまするが……。」

幸村も熱を帯びた聲で父の言葉に相和した。

「しかし父上。」

信之には信之だけの心持があつた。彼は幼い頃から家康に仕へて徳川家には大恩を受けた身である。假令今兩家の争が起つたと云つても、この恩をどうして捨てられようぞ。

「しかし父上。信之は豊臣家に優る徳川家に受けた大恩がござりまする。」

君父の恩と義理に絡まれて、苦し氣な表情で低く云ふのであつた。世の中が亂れてゐた

戦國時代には、人情を殺して義理に生きねばならぬ事も少くなかつた。

「では兄上——。」

幸村は息をはずませて

「兄上は父上にお逆ひ遊ばす御所存か。」

幸村の聲は激しかった。

「さうぢや。」

信之はぐつと息を呑んで

「父上にお逆ひ致すは不孝と存すれど致し方あるまい。信之は徳川の祿を食んだのぢや。」

低く云つて信之は項垂れた。

「假令親子兄弟相別れても、主君の恩に背くことは出来ぬ。」

信之は呻吟く様に呟いた。信之の唇は微かにふるへてゐた。

「兄上は——。」

幸村は興奮して聲をふるはせ乍ら詰る様に云つた。そして

「私は、父上に従ひませう。假令徳川の祿を食むとも、父上は豊臣家より厚い御恩をうけてをられます。我が家名の今日あるのも父上のお蔭ではありませぬか。」
信之は黙つたまま項垂れてゐた。如何に苦しくとも彼の堅い決心は微動だにしなかつた。

昌幸は信之の堅い決意の色をみてとると

「世が世故致し方あるまい。父子三人との三成殿の達ての仰せであつたが……。」
と寂しげにこれも頭を垂れた。

「もはや致し方あるまい。これも時世ぢや。」

昌幸はもう一度呟く様に云つて

「この昌幸とそして幸村は豊臣家に加勢をいたし、信之は徳川家に加勢せねばなるまい。何れも各の主君の爲に忠を盡し後日戰場に於て相見えようぞ。」

信之も幸村も頭を垂れて父の言葉を聴いてゐた。二人とももう何も言はなかつた。ただ老いた父を感じて苦しい心をおさへて黙々と項垂れてゐた。

義理と人情とに泣く信之の心中は如何ばかりであつたであらうか。稍々暫くして信之は頭を上げた。

「では父上、再び戰場でお目にかかりませう。幸村、そちも主君の爲に盡せ——何れ戰場にて……。」

と云ふ信之の聲は潤んだ。

「信之、では主君への忠を忘るるな。何れ戦の場にて互に戦功を誇らうぞ。」

昌幸は立つて

「さらばぢや。」

と甲に手をかけた。幸村は何も云はず微かに兄に對して會釋した。

「父上も幸村も——では——おさらば……。」

信之は立つて父を見上げてゐた。父子としての對面は恐らくこれが最後であらう。東西相別れて戦はば、親子といへども敵である。再び今生で逢へるものとは計られない。父子兄弟の再會すら頼めないのが亂世の常である。信之は複雑な感情でじつと父をみつめてゐた。慈愛のこもつた昌幸の眼もやはり我子としての信之を見交してゐた。

「さらば御免あれ。」

盡きの別れを一言に云ひ放つて信之は足早に立去つた。我子の姿を、兄の後影を見守つてゐる二人の眼にはかすかな涙が浮んでゐた。

◇

信之に別れた昌幸と幸村とは居城へ引返すことにした。大阪方に加勢するにしても、何かと諸準備が必要だつた。昌幸は先刻敵として別れた我子信之のことを、密かに思ひ續けてゐた。幸村も亦敵となつて別れたとはいへ、骨肉の兄信之の倅を臉に浮べて、父子は黙黙として道を辿つて行くのであつた。

途中、昌幸はふと信之の居城沼田の城にゐる可愛い孫を思ひ浮べた。戦場に於ての荒武者昌幸も、愛しい孫には優しい祖父であつた。昌幸は今夜は沼田城に泊り、久方ぶりに孫共をあやしたいと、戦に出でゆく人とは思はれない程落着いた美しい幻を描いてゐた。いやその心の奥には、孫との再會も恐らくもうこれが最後であるとの悲しい決心があつたのかもしれない。

昌幸からの使者は、昌幸等より一足先に沼田城の城門の前に立つてゐた。城はねむつた様に静かであつた。

「お頼み申す。」

使者の聲が城門の静寂を破つて響き渡ると、暫くして若い侍が現れた。

「昌幸殿よりの使でござるが。」

やがて通された使者は庭先で信之夫人に對面してゐた。

「昌幸殿の事でござるが。」

使者は息を吞んで

「久久で孫共の顔もみたき故、今宵一夜を城中に明したいとのお言葉にござりまする——。」

使者はかう云ふと低く頭を下げた。夫人の顔には俄かに緊張の色が表れた。

「して舅御一人にござりまするか。」

「いや、幸村殿とお二人にござりまする。」

夫人の顔には緊張の色が深く印されて、彼女の身内には異様な強い力が湧上つて來るかに見えた。若しも夫人が普通の婦女子であつたならば、自分の舅御の言はれることであるから、何の疑もなく城門を開いてゐたかもしれない。併し夫人の注意深い心は、使者

の言葉のみで満足はしなかつた。夫人は重ねて

「何の爲の御退陣でございませうか。」
と尋ねた。

「餘りにお急ぎの御様子故、何事か確と存じ上げませぬが。」

「それでは我が夫は如何なされしや。」

「信之殿には後よりお出ででござりませうが……。」

使者は意外な間に、はつとして口早にかう答へた。この一言で夫人の心にはもう一切が諒解されてゐた。

夫人は屹となつて眉を震はせ乍ら

「此の城は我が夫信之の命によつて妾が預りたるもの、夫よりの許しがなくば、假令舅君にあらうともお入れ參らすことは出来ませぬ。御無禮ではござりますが、入城の儀は、固く思ひ止まつていただきたくござりまする。併し乍ら若し是非にとの仰であるならば、致し方ありません。弓矢を以てお迎へ申し上げませう。」
「はつ。」

と云つたまま使者は夫人をまともには見られなかつた。舅君に當る昌幸殿の仰ではあるし、それにか弱い女性のごと故、強い言葉など全く豫想してはゐなかつたので、この斷乎とした夫人の言葉には、先づ荒膽を挫かれてたじたとなつてしまつたのである。使者はそのまゝ一禮をして馬に鞭をあてた。夫人は使者の一舉一動に目を据ゑて見守つてゐたが、舅の使者が遠ざかると、はつとした様に小さく息をついた。と、夫人の心には微かな悔に似た一抹のかけを覺えた。

使者より一切をきくと、昌幸はからからと打笑つて

「流石に本多忠勝殿の息女。信之はよい妻を持つたものであるわい。」
と稱めた。この昌幸の態度は幸村にも使者にも意外なことであつた。幸村は唇をかんだままじつとしてゐた。使者は又主人から何と云はれるかと、馬で駆返つたものの、内心恐れてゐたので、この主人の態度にはつとした様子であつた。

「弓矢を以て……か。」

昌幸は呟きながら

「流石ぢやなう。」

ともう一度稱めた。

「では父上。」

幸村は、逸る氣をおさへながら父を見上げて

「父上は如何なされるおつもりにござりまする。」

と詰るやうに尋ねた。若い幸村が兄の態度やその夫人の態度に對して、耐らない反感を抱いてゐたことは言ふまでもない。時によつては一戦をこさへ考へてゐた程である。昌幸は静かな目で幸村を見て

「今一度使を遣さう。」

と云つた。

使者は再び沼田の城門を叩いた。

「何の御用でございますか。」

夫人は静かな態度で使者に向つてゐた。

「『我は決して城を奪はん等といふのではない。唯懐しき孫の顔が見たいのみである。枉げて開門せられたい。』との昌幸殿よりのお頼みでござるが……。」

「勿體なうござります。妾は決して舅君をお疑ひ致してゐるのではありません。唯主に代つて城を預つてをります者、思ふに任されぬのでござります。」

「では如何あつても。」

「先刻お返事申し上げましたる通りでござります。」

もの靜かな態度で夫人はかう答へて目を伏せた。先刻の強い感情はどこにひそんでしまつたのであらうか。強い態度を豫期してゐた使者は些か意外であつた。

幾度くり返しても同じ事であつた。夫人は如何あつても聞き容れない。致し方なく使者は馬を返した。夫人だとして舅君の事故従ひたいのは山山である。しかし親子を敵味方とするこの世の中、忍ばねばならない人情であつた。

人情をおさへて強く自己を保つてゐた夫人の胸中は如何ばかりであつたであらう。頑固な嫁、不人情な嫁と云はれても致し方ない。妻として嫁として最もつらい言葉である。仕方ない。時世なのだ。夫人は自身自らを慰めるより外はなかつた。

使者の返事をきいて昌幸は

「止むを得ぬ。これも御時世ぢや。」

と低く呟いた。その言葉には流石に耐らない淋しい響があつた。幸村は黙つたまま何も云はうとはしなかつた。

昌幸は城下に近い野中に陣を敷いて露營することにした。これを知つた夫人は、せめてとの心づかひで、夜具調度、飲食品も十分に整へて。

「せめてこれなりとも召させられて、今宵は緩緩御休息遊ばしませ。」

と使の者に口上させて、諸事萬端些かも不自由のない様に禮を盡した。そして警護には、男であつては却つて争がおこり易いであらうとの心遣ひから、侍女數十人に鉢巻褌をさせ薙刀を持たせ、又自らは眉尖刀を提げ侍女たちを指揮して一寸の隙もなく、いざと云へば男であつてもただでは措かぬと云ふ様なものしさを見せた。

この夫人の細い心遣ひと、又夫の留守に女ながらも斯くまでも心を配らうとする夫人の志に、昌幸はいたく感心し

「芳志忝し。」

と喜びうけて、翌朝未明に此の城下を引拂つたのであつた。

——愛知縣第一高等女學校第四學年 芝原壽子——

七、柳生連也

【連也事績の梗概】連也、名は殿包、兵庫と稱し、天下無双の劍道達人であつた。尾張侯初代の義直及び第二代の光友の師範となつた。慶安四年將軍家光連也を召し、江戸柳生家宗矩の三男宗冬と試合を行はしめ、殿包は二尺の木劍を執り、宗冬が三尺三寸の太刀を以て立ちあがつたのを、一撃に切落し宗冬の拇指が碎けて血ばしつたといふ。宮本武藏諸國を遍歴し、尾張に至り始めて眼光炯炯たる一男子を見「貴殿は兵庫殿ならずや。」と尋ねしに、果して柳生兵庫其の人であつたといふ。

筆太に雄渾な文字で——柳生眞陰流指南——と書かれた看板のすぐ上に威めしく張られた注連繩を、春の風が飄つてゐる。

「エイツ、エイツ、」

と叫ぶ裂帛の掛け聲は、まだ若年らしうは思はれるが、朝まだきの石疊の上を凜然と流れて来る。今日は年の始めの稽古休み故、道場は隅隅までひっそり閑と静まり返つて

ゐた。併し十歳を超えた許りの伴兵助にとつては春休も何もない。對手がなければ一人稽古でもしなければ氣のすまない彼であつた。「劍術あつての兵助、彼こそ劍術の權化と言ふべきであらう。」と、父をして日を追うての進境ぶりに舌をまかせ、頼もしい行末よと微笑ませてゐたのである。實際兵助の身にとつては他人を相手としないで、自分一人の修練に因つて新しい劍の道を自得することが、却つて望ましかつたのであらう。又一面父の門弟中では、もう自分と互角に覇を争ふ者を選ぶのに困難であつたことも確かであつた。併しこれが十歳になつた許りの兵助の腕前であるとは、誰しも一度は疑つたことも無理ではなかつた。

兵助は故あつて幼少の頃、姉婿の三州御油、林五郎太夫といふ人の家で成長して前年の暮に名古屋へ呼戻され、父の膝下にあつて一層劍術を修業することになつた。稽古に對しては心魂を傾け、毎日道場の日課が終つても尙下僕相手に疲れを知らない程の熱心さであつた。その爲に床に就かうとしても、帯を解くに腕が痛んで、母の手をわずらはすことが一再ではなかつた。母はその都度、「それでこそ上手にもなれるといふもの。」と優しく手を加しては、次第に肩幅のひろくなる兵助の背をたのもしく見入るのであつた。

た。



この日も、何時もの通り兵助の一人稽古の劇しい鍊磨の聲が、風薫る四月の庭へ木霊してゐた。永年このお屋敷に仕へてゐる伍助爺は、微笑ましくその聲をきき乍ら、せつせと主人から命せられたらしい盆栽の世話に餘念がなかつた。

お父さまよりお坊ちやまの方がひよつとしたら上におなりであらうか——とつぶやき乍ら、庭の隅に在る水甕の傍に来て何氣なくその水面に眼を落すと、急に瞳を見張らずには居られなかつた。甕には何時もの様に水が満たされて、水面には二片三片の櫻の花瓣が事もなげに浮んでゐた。併し爺は何時に變らぬこの水甕に、久しく待ちのぞんでゐた嬉しい異變を發見したのである。

「エイッ！」といふ裂帛の氣合が、この水の表に波紋を呼んでゐるのだ。そのかみの鼓師がその進境を、鐵瓶に漲る水によんだ波紋によつて召使ひの婆やに教へられたといふ故事を、伍助爺は知つてゐたのである。そんな馬鹿なことが——と否定しながらもそ

の心の隅には、否定しきれぬ氣持を持ちつづけて來てゐたのは事實であつた。爺にとつてそれが狂躍すべきことであつたのはもとよりである。

「坊ちやまは矢張り名人におなりの方だ。」

と一人頷いて隠し切れぬ喜びに面をほころばせるのであつた。父からも教へてもらへぬ柳生流の眞の祕奥を、自ら探り得て新しい流儀を編みえたのもその時であつた。



正木坂陣屋お取立の手練者が江戸參向の途次に訪づれて、噂にきく兵助との手合せを懇望した。兵助は父の命に服して、何時もと同じく怖れず侮らず十本の勝負を限つた。さて仕合をしてみると、十本が十本兵助が勝を占むるところとなつた。彼等は大いに立腹し、父如雲利嚴じよんとしよしの前に膝をすすめ

「拙者等劍術いっちはんかに一知半解の徒ならばいざ知らず、支流ながら正木坂にて免許を得たる者でござれば、如何に夙成しゆくせいの御子息とは申せ只今の御審判は餘りにも依怙よこ千萬、神妙なる武術精神にも悖るかど存じまする。」

と面詰した。併し如雲は少しも騒がず、微笑みさへうかべ

「子に甘いと申されるのか。」

と、汗をぬぐつて控へてゐる兵助の油斷を見すまし、やにはに傍の脇息を投げつけた。兵助に飛鳥のやうにかはされた脇息は、羽目板の一枚にめりこんだ。如雲は満足さうに大きく息をつく。

「依怙の沙汰とはそこ許等にも似合はぬことを言はれる。別に口傳相傳などはまだ致して居ないが、實は此の間から兵助の仕合ぶりを見てゐると、最早相許す祕奥の餘地なきまでの自得ぶりに、實は親のわしさへ舌をまいて居つた。唯のぞみは兵助に互角の士を招いて、眞の進境ぶりを知りたかつた。それが今日實現されたのだ。貴殿等はおそらく紙一重の差でござらう。若しもわしが武道精神に悖ると思ふならば、二三日逗留されて兵助の日常を眺められたならば、わしの言葉の眞偽が自ら知れるであらう。」

と言つた。手練の者等は慙慙されるまま二三日をつひやしたが、如雲の言葉を裏書する以上の眞價を知り、兵助に信服し、江戸への道を暫時尾州に留つたことを悔いなかつた。

武人にも風懐がある。兵助は長じて嚴包としかねと言ひ、後連也と號して俳諧をよくした。まごろみたい春の宵、頬を刺すやうな昨日の風も今日はめつきり暖く、晚酌の酔をぬれ縁に出てさましながら、龜鳴くや——龜鳴くやと口吟んで、下の句を練つてみたが、心地よい微風がいつしか眠を誘ひ、肘を枕にいつうとうととしてしまつた。とその時、庭の生垣を斜に一人の曲者が忍びよつた。手には既に抜き身を構へてゐる。朧月が雲に隠れて、潮がひくやうに庭が一方から暗くなつた。二足三足曲者は近づいて、あはやと思ふ一瞬、ぬれ縁に投げ出されたのは、不思議なことに今まで曲者の手にあつた兇器であつた。

連也は、常日頃子弟に教へて言ふのには

「不意打をかけられて一番困るのは熟睡中であるが、絶対に仰向けに寝ぬことである。仰向けに寝ることは、敵に此處を突くと示してゐるやうなものだ。横に寝ればたとへ少しの手疵は受けても防禦の手のある場合が多い。又枕刀を蒲團の下に置くのは勿論

であるけれども、何時も同じ處に置いて場所を變へぬがよい。いざと云ふ時には直ちに其處へ手がゆく。次には躰をかかぬこと、躰をかくは敵に不覺を示すものである。口をふさいで寝れば躰はかかぬものだ。その他、大酔した時、遠路を歩いた時、働きすぎた時、空腹の後で飽食した時の類、之等の後に寝に就けば、必ず熟睡して死人同様になる。斯様な場合には平生家人に言ひつけて置いて、氣をつけさせるより外はないが、武士として一身の守護を他の者に頼むといふのは慚愧すべきことであるから、御用の外は成可く饑飽勞逸を自ら心掛けて、平均しなければならぬ。

わしが多年の實驗によれば、常に心を練つて氣を安靜にして置けば、よしんば熟睡しても、事があれば目が覺め易い。心に油斷せぬ習慣をつけるに、少しの物音少しの氣配にも目が覺める。目が覺めても、こゝがなければ直ちに眠られる修鍊——それこそ劍の道を學ぶものの要諦である。」

と、さて連也は自分に危害を加へようとした曲者にもかかはらず、招じて一盞いっさんを傾けた。曲者は連也の度量並に武人としての立派さに、自分が他から頼まれて僅かな金子に目がくらんだ非を詫び、改めて弟子となり、後日には師範代の位置にまでなつたと言ふ

ことである。

夏にしては長すぎる雨も七日目といふ今日、だまされるのではないかと思ふほどからりと晴れて、時々思ひ出したやうに遠雷がごろごろ鳴つてゐた。濡れて色の濃い梢の滴りを抜けて、一陣の涼風が軒の風鈴を鳴らしてゐる。連也は葭簀障子の陰のところで、書見に疲れた身を憩めてゐた。ふと通りすがりの父如雲が此の様子を見て急に悪戯氣が起り、枕元の障子を力一杯にたてつけた。ところが頸筋の手前一尺許りの處で、ひたご障子が動かなくなつたので、如雲が怪しく思つてのぞき込むと、連也は寝返りをうつて、敷居の上から扇子をとり出し、何事もなかつたやうに再びかゝるい眠りに入るのであつた。

練屏の櫛が八つ下りの陽かげに映えて、秋も漸く深くなつていつた。閑かな十疊の部屋にはちんちんと鐵瓶が沸つて、時々ばかりと思ひ出したやうに基石の音がしてゐる。

世の常の劍術家に見るやうな眼光炯炯といふ鋭さはなく、至極溫和な眼差をした連也、これが一度劍をされば如何なる刀葉林たうせうりんも脱するほどの手練者などは、初對面のものにはどうして思はれよう。

今日は高弟松井某の歸宅を止めて、夢中であつた。連也は中年以後、特に碁を好んで時折りこの男と烏鷲うしよを闘はして楽しんでゐた。劍をとつては、柳生流中出色の名人である連也も、碁にかけては松井の方が數目強かつたのである。連也は一目の布石にもあつてもない、かうでもないと思ふ苦心慘膽、盤面を睨む瞳が、稍々焦り氣味になつて姿勢が前踏みになつて來た時である。松井某の拳が盤の蔭でぎゅつと握り締められた。と、この時、連也がひよいと顔を上げたので松井は素知らぬ顔をして拳をそつと解いた。平常から松井は師の氣構へを試さう試さうと心懸けてゐたので、此の好機逸すべからずと思つたのであらう。聽てばかりと考へあぐねた石が連也の手から下された。續いて松井——然し下された松井の石は意外の石であつた。連也は、傍らの湯呑を無意識にとりながら、今度の松井の石がどうしても腑におちぬので、一層深く考へた。それもその筈、松井は先刻の拳の一件が事實連也が此方の意志を覺つたか、或は偶然であつたのか判然としなかつ

たから、今一度試さうとして無理な布石をして連也を考へさせ、その虚をつかうとした。

「却却の御上達、拙者もいよいよ奥の手でも出さねば一敗血にまみれさうです。」

松井のこの言葉は、連也をしていよいよ考へさせた。連也の姿勢が、又又前躡みになつて、盤面の一處に吸ひつけられた。とその時である。松井の握り締めた拳があはや盤面の側面から躍り出さうとした。その間一髪、連也は矢庭に反り身になつて

「碁でやり込めろ。碁で勝負を決するのぢや。」

と言つて、少しも動せず、一心に布石を案じた。夕陽は、楯の葉裏まで透き通つて徐かな棋譜とは反對にぐんぐんとすさつて行つた。



今日も連也は二三の門弟と俳諧師とを連れて、とある里はづれに逝く秋をたづねた。其の中には例の碁の相手松井某も加つてゐた。連也と言ふのは俳號で、尾張の人は今日でも、單に連也と呼んで、本名を知つてゐる人は少い位である。各自に程よい場所を選んで、まだまばらにある遠方の稻架を眺めたり、葉のない蔓草に残る眞赤な草の實に秋の行方を求めたりしてゐた。連也も先刻から流れの傍に佇んで、うすれゆく縹雲をじいつ

と仰いでゐたが、ふと尿意を催して來たので、流の岸近くに立つた。その時である、絶えず隙を窺つてゐた松井は、今日こそと連也の背後に忍びより、力をこめて腰のあたり突きを入れた。時既に、連也はそれを感知して、ひらりと體を横に躲してゐた。その爲に松井は虚空を突いて川の中へ飛込んでしまつた。

逝く秋や松井とびこむ水の音

連也の一句は、句三昧の人達のもの笑ひに供された。他日、連也は松井に訓へて

「其方が度度予を試さうとするのは、武藝の眞意が解らぬからである。立合には其の間に、必ず『機』といふものが生ずる。その機に乗することは勿論であるが、機に乗るといふだけでは未だ足らぬ。その機を自由にするやうにならねばならぬ。武術が上達すれば機は我から開くことが出来る。我から開くといふのは、敵を我が思ふ壺へ惹きつけるのである。又事には『きざし』といふものがある。これは機といつてもよいのであらうが、機よりも今少し早く、極めて微妙なものである。其方が碁を打ちながら、予を打たうとした時も、流れで突き飛ばさうとした時にも、其の日其方の顔を見た時に、今日は何かやるなどいふ豫感があつた。これが即ち『きざし』で、其方の

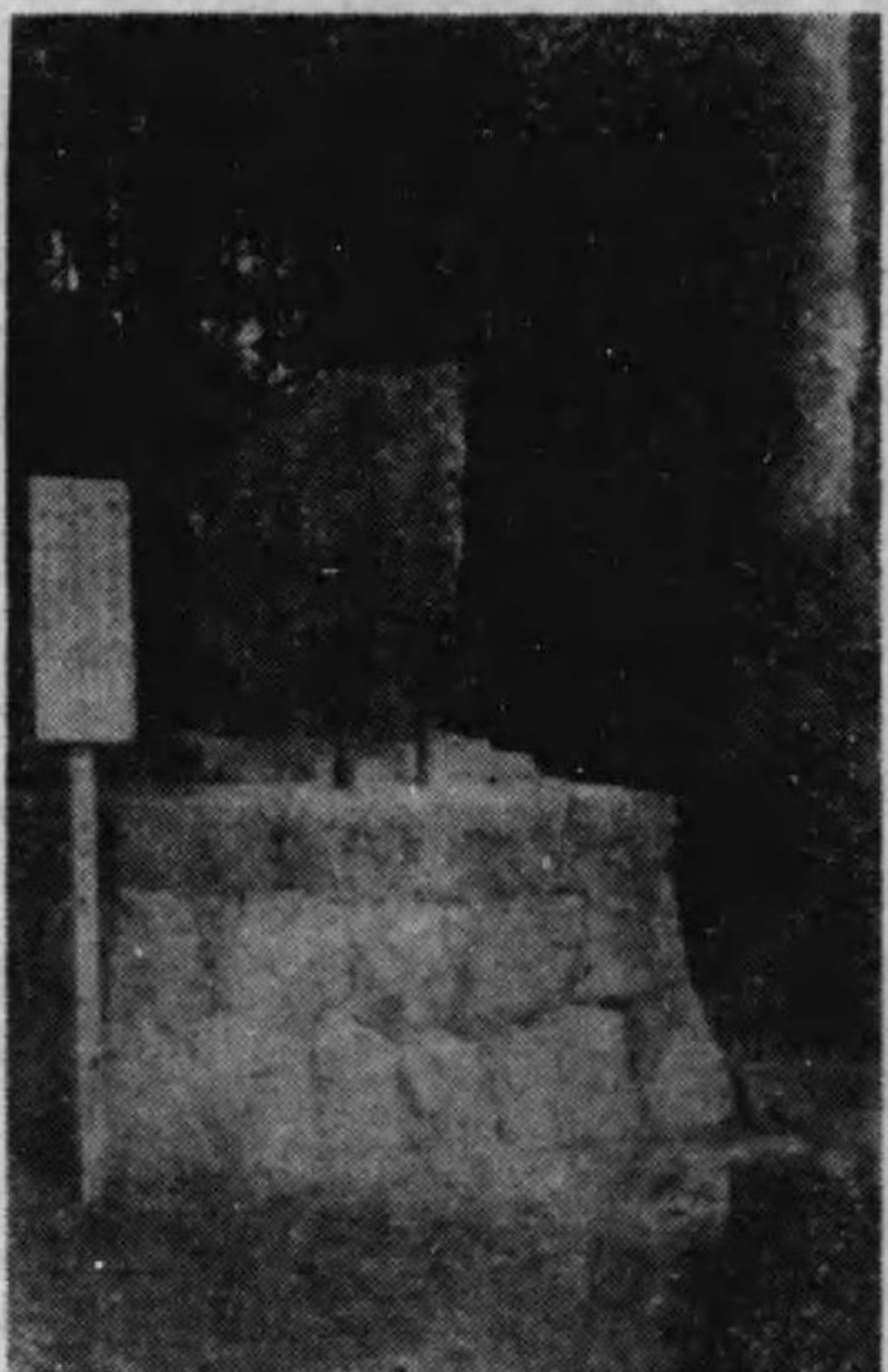
心の動きが顔に現れて、わしの心に響いたのである。尤も突きとばさうとするのを躲したのは術であるが、既に何かやるなど覺つた上は、充分に氣をつけてゐるから、其方は不意に出る心算でも、此方では不意でも何でも無い。元來『心』は恰も鏡のやうなもので、不斷曇らぬやうによく磨いて置けば、他より來ることが、善惡共にその鏡に映るものである。』

と懇懇と教へた。松井が慚愧して邪念から脱してよく連也の衣鉢をうけつぎ、尾州柳生家の爲に力を致したことは言ふまでもない。

——大阪府中河内郡曙川村字八尾木 西尾

巖——

八、忠臣眞木定前



忠臣眞木定前墓

田原町巖巖寺三宅家累代の墓所の傍に、主君康直の筆になりし七大字が墓石に刻まれて、千載不滅の雄魂を留めてゐる。

◇

「渡邊殿。お放し下さい。重臣どもの不忠に迷つた心を、この定前刀さだちかにかけてもよびさましてやるのだ。」

「待て、それこそ無駄といふもの。今更となつてはとてもかなはぬことだ。眞木氏、

貴殿とは同じ心のこの登、あくまで真心を以て反対したが大勢の前には如何とも出来なかつたのだ。」

止めるは渡邊登定のほりさだやす、止められてゐるのは眞木重郎兵衛定前、共に三州田原の藩士である。ここは田原城内の大廊下、今奥の大廣間では、藩主の後継者を定めるための重役重臣會議が終らうとしてゐた。

「おのれ！ 身は高祿を食んで居ながら、主家の尊き御血統も思はざる人非人ごもこの定前が斬りすてて……。」

「待て、待たれい。血氣は身を破るのみ。先づこの登が言ふことをよく聞かれよ。」しつかと抱き止められて、やつと奥廣間へ踏み入ることを思ひ止つた眞木ではあつたが、目は悲憤の涙にうるんでゐた。

壯年の渡邊登はこの青年の心にくひ入る様に説き語るのである。

「先君康明公御死去の節から、既に御舍弟友信様は御隠退を決意なされた。御世繼ぎの御子一人もあらせられぬ先君故、第一に御弟友信様が、先君のあとをお繼ぎ遊ばされるが當然なのに、友信様は藩中の情勢を見ぬいて、廿二歳のお若さで自ら隠居の決

心を遊ばされたのだ。この御胸中御察し申せば、實に御いたはしい限り……。」

聲は沈痛にしめつて靜かに瞳を伏せた。

「さ、それなればこそ猶更重臣共には、友信様の御隠居を御止め申上げるのが至當ではござらぬか。それを……。」

定前の聲は烈しい怒りにふるへてゐる。

「駄目だ。重役共は藩中の暮し向の苦しさ、我が身の生活の窮乏に心も萎え、主家を思ひ奉る真心は消えうせてゐるのだ。」

わが田原藩は祿高こそ一萬二千石の小藩ではあるが、將軍家の御おぼえもめでたく、柳營に於ては帝鑑の間詰を仰せつかつた御家柄。代代の殿にも、大藩の諸侯と肩をならべての御附合に、藩の財政は窮乏に陥つてから既に年久しい。藩士等が自身の屋敷内に田畑をつくり生活のたすけとするのは、わが田原藩の外にはない。この窮乏を救つて一藩の振興をはかるには、あの真心も、氣慨も、智略もまたぬ重臣共としては、たごへ御舍弟君の友信様を排しても、他の大藩の御子息を迎入れて藩主として、その實家の財力の援助によつて、藩中の生活向を立直さうと考へるのは當然ではあるまい

か。」

「ええい、如何に藩政窮乏とはいへ、主家の御血統を絶やしてまでも他家の力にすがつて生活したいのか。もしも重臣共の定めたやうに、姫路酒井雅樂頭殿うたのかみの御子息を御迎へ申し、他家から奥方を迎入れられるとすれば、主家三宅家の血は中絶。忠臣兒島高德たかのりから傳はる尊い御血統は永久に絶えるのではござらぬか。」

定前は齒がみして憤る。

「既に、決議された上はせん方ない。だが真木氏。われらは臣下としてどこまでも三宅家の御血統復活をはかり、命にかけても尊い御家系をもとにかへす對策をはからねばならぬぞ。」

忠誠の言は凜としてひびいた。二人は黙黙として表玄關へ歩を移したが、主家を憂へる真心はいよいよ重く沈んで底深く燃えていつた。



「華山渡邊登は其方か。かねてから田原に渡邊あり……とは聞き知つてゐたぞ。若年

の身で名家のあとを繼ぐことになつたこの康直。其方を輔導の師と願ふ心で參つた。頼みおくぞ。」

新藩主康直は初目通の登に向つて、にこやかに言つた。

「唯唯、恐入りましたる仰せ、登、粉骨碎身御奉公仕りまする。」

姫路の城主酒井侯の二男康直、望まれて三宅家に入り藩主となつたのである。額高く頬豊かに、若年乍ら凡庸の相ではなかつた。

「其方の後にひかへたのは誰か。一徹剛氣らしい相貌、頼もし氣な男だなう。」

登は、はつとしてふり返つたが、微笑んで

「真木重郎兵衛定前でござりまする。若年とは申せたくましい魂のものでござりまする。」

「真木と申すのか。忠誠をはげんでくれよ。」

定前は平伏したまま、熱い熱い感激が胸底にあふれるのを覺えた。

「渡邊、其方へ申つけることがある。予が當三宅家をつぐに當つて考へることは、先づ一つには尊い傳統の御家系を後世につたへ、二つにはこの御血統をけがさない様身

の戒とするために、三宅家家譜撰集を調査編纂したいことである。其方にこの調査を頼みおく。よいか。しかと申しつけたぞ。」

「ああ、この君凡庸の資でないわい——登と定前は喜悅の面を綻ばせて感服したのである。」

◇

數年の歲月は流れた。この間における田原藩の振興は目を驚かすものがあつた。

先づ名君康直を助けるのに、先覺の人傑渡邊と剛直の忠士眞木とがゐた。登は家老に、定前は側用人に登用されたのである。又他から招かれ來つて政道を助けた者に、農耕學者には佐藤信淵のぶひらがあり、儒者には伊藤鳳山があり、蘭學者には高野長英たかののちやうえいと小關三英せきせきさんえいがあり。劍客には齋藤彌九郎と杉山大助があり、農政家には大藏永常おほくらえいじやうがあり、且つ同藩からの傑出者には、西洋學者鈴木春山と西洋兵術家村上範致のりむねとがゐた。全く天下の人材が集して、小藩田原は恰度海内文化の先驅を以て任ずる有様であつた。

康直には既に他家より迎へた奥方との間に一男一女があつた。若君友丸殿は四歳、姫

お銚殿は二歳、ことにお銚殿は奥方の美貌をうけついで、美しく愛らしくすくすくと育ち、田原城内は瑞氣みちみちてゐた。

「殿。眞木定前、折入つて御ねがひが御座りまする。」

「おお、眞木か。折入つてとは何事か。」

萬一の飢饉を慮つて建てられる救民の義倉の工事の音に、ききとれてゐた康直は、決意にひきしまつた定前の顔を見た。

「恐れ乍ら、三宅家御家督の儀に御座りまする。」

「何、三宅家の家督のこと？」

康直の面はふつと曇つた。

「渡邊殿から申上げたことは思ひますが、わが君、酒井家より御入興になりましたる際は、先君康明公に御子なく、康明公の御弟友信様には重臣共の乞を容れたまうて、病の故を以て江戸の巢鴨へ御隠退相成りました。爾來殿の御威光をもちまして藩政は隆昌を極め、臣等も唯唯感涙に咽ぶ次第でございますが、只心を去らぬは三宅家の御血統のこと、恐れ乍らわが君他家より奥方を御迎へ遊ばしますれば、三宅家御祖先よ

りの御血統はこのままでは絶える次第に御座ります。」

康直は黙々と耳を傾けてゐる。

「御當家の御血統と申せば友信様をおいて他にござりませぬ。」

「さうぢや。まことに其方の申す通り。友信殿に對しては、予は知らなかつたこととはいへ、御氣の毒に存じて居る。」

「殿には若君友丸様が御誕生、次いで友信様にも若君伯太郎様御生れにござりまする、殿、この定前が殿の御怒をも憚らず、命をかけての御願にござりまする。何卒、何卒、若君友丸様の御代りに、友信様の御子伯太郎様を迎へて殿の御後繼とお定め下さりまする様、偏に御ねがひ申上げまする。」

言言衷心からほとばしる、必死の覺悟を面に表しての願ひであつた。

「さうか……よく申してくれた。家督については予も心を痛めぬではなかつた。だがこの康直も人間、いつしか我子の愛に惹かされて、伯太郎殿のことも強ひて考へようとはしなかつたのだ。」

「恐入り奉りまする。臣として若君友丸様の御家督を御祈り申すことの出来ぬわれら

の苦しさ……。唯唯御詫び申上げまする。」

剛氣の定前も主君の心中を思ひはかれば熱鐵を呑む苦しさであつた。

「殿、何卒定前奴が心を哀れと思召し伯太郎様に殿の御跡目を御繼がせ下さりまするやう……。」

「よし、よし、よくわかつた。如何にも伯太郎殿を迎へて世繼といたさう。そしてお銚どめあはせて、兒鳥高德以來の御血統をもごへかへさうぞ。この旨登にも傳へよ。」

「では、あの、御聞届け下されまするか、私めの御無禮も御咎めなく……。」

「いや、予に向つて憚らず進言する者は登と其方だけぢや。頼もしく思ふぞ。永くその心を忘れてくれるな。」

しみじみとした主君の聲を聞いた時、定前はひれ伏したまま聲を呑んで泣いてゐた。



又十餘年の歳月が流れた。

「おお、大さう成人致したの。」

友信は眼前に手を支へた我子の伯太郎を見下してにこやかにさう言つた。田原藩主の後継として乞はれて十年前に三宅家へやつた伯太郎である。兄康明の死後、重臣等の間に酒井家より養子を迎へて藩政をたてなほす計畫のあるのを知り、藩のためと心を決めてこの江戸の巢鴨の私邸に隠退したが、この生活の氣安さと、生れ附いての好學心とから渡邊登を輔導として蘭學、西洋事情の研究に没頭して既に權威ある存在となつてゐた。今日は數年ぶりに見る我子伯太郎の姿である。

「どうぢや。養父上、養母上はじめ、御健勝か。」

「はい。皆様、御健勝にござりまする。」

「それは目出度い。」

と言つたが、友信は久久に見る我子の面が憂に曇つてゐるのを見のがさなかつた。

「お銚殿は行く行くは其方の妻とられる人、いたはつてあげるであらうの。」
十五歳の伯太郎はじつと面を伏せてゐた。

「如何したのぢや。氣にかかる事でもあるのか。」

「父上、伯太郎は、今日からこの邸へ歸らうと思ひまする。」

伯太郎の聲は沈んでゐた。

「何、ここへ歸る？ 田原藩の主になるべき身が、どうしたのぢや。」

「父上、伯太郎は田原の御家には邪魔者にござりまする。養母上も、友丸殿も、私を憎まれ、伯太郎あるが爲に、友丸は御家督がつけぬ……などと仰せられることもしばしば耳に入りまする。何も知らぬお銚殿は私をいたはり力づけてくれますもの、あの養父上でさへ近頃は私の顔を見れば座を外され、御言葉もかけられませぬ始末……。」

「ふむ……。」

友信は重く肯いた。

「して家臣どもは？」

「勿論家臣どもとて、この伯太郎には反對の心の者ばかり、既に重臣どもの間には、私を退けようど企てる者もあるげに聞及んでをりまする。」

「さうか。」

友信は我子の顔を痛痛しく見やつた。

「楯となり、柱となつてかばひくれますは、真木定前唯一人。今はその真木とて國元の田原に留守居の身、遂に心を決して、今日は江戸邸をぬけて参りました。どうぞ伯太郎を御膝元において下さりませ。」

「よいとも。どうせ浪人した父の子ぢや。ここにゐて勉學にはげむがよい。三宅家は友丸殿が居られる。御家督は御ゆづり申せ。」

友信は靜かに我子の肩に手をかけてやつた。



「失敗つた。萬事終つた。この定前が臣としての面目も最早破れはてた。」

真木定前は、ごつかと腰を下すと、手紙を握り締めたまま面をおほつた。

江戸巢鴨の友信から伯太郎離縁を知らせて來た書狀である。

我子の愛にひかされて伯太郎殿を憎みはじめた奥方の心、みめよいお銚殿を妻はすことさへ拒まれる奥方の心。それを取りまいて媚諂ふ重臣ども、それによつて固く誓はれた殿の御心までが動かうとするのをごんなに恐れ、氣遣つて過したことであらう。共に

心を併せて主家を守り、御血統復興をはかり、兄事した渡邊登は、開港の論が身に禍して割腹して既に世にない。

ああその憂ひが、この國元における御留守居中に遂に實現しようとは……。何として先君康明公の靈前に見えよう。何として畏友華山の魂に詫びよう……。定前四十餘歳の金鐵心も麻と亂れた。

彼は妻を呼び、早速旅立ちの準備を命じた。そして心を靜めて、しまつてあつた故人渡邊登の手紙を探した。

「死せる畏友よ、ねがはくばこの不甲斐ない定前に行くべき指針を教示せられよ。」

彼は泣きながら遂に探し得た。それはかつて登が定前の申入れによつて、伯太郎を康直の世繼に迎へるべく江戸に出向き、友信の承諾を得て目的を達した夜、江戸の宿舎から定前に送つた一書であつた。十年前の墨痕はなほ淋漓として懐しくにはつてゐた。

たごへ一日にても君臣となり 一粒の祿をも食む上は一命をなげうつても忠の一字を守らざるべからず 君に私心あるとも臣たるものそれに盲従するは不忠の極みなり かかる時には事のとげらるるまではかるこそ臣の道に候

足下がこの大事をなすには必ず人を力といたすべからず 自分の心に生れたる信念によりて行はるべし……

御血統復興をばげまして書き諭された血の言言句句を、くりかへして讀む定前の眼には凄壯な光をおびていつた。聽て彼は妻に向つて

「わしは江戸へ立つ。これが今生の別れかもしれぬ。別盃を汲まう。よいか。取りみだすでないぞ。」

「覺悟いたして居りまする。」

妻は顔色一つかへなかつた。



「殿、十年前にこの定前に仰せられました御家督のこゝ、よもや御忘れではござりませぬ。伯太郎様を如何遊ばしますか。」

三宅侯の江戸屋敷、康直公の前には、國元田原から夜に日をついでかけつけた定前が、毅然として坐つてゐた。康直は苦惱の面をやや伏せて無言であつた。

「三宅の御家の御血統復興を念じ、夜に日に心をくだきましたこの定前、今に至つて伯太郎様御離縁とは肯きかねまする。」

「眞木、ゆるせ。予も出來得るかぎり心がけては來たが、奥はじめ、重臣等のすすめは最早動かしがたく伯太郎は巢鴨へ返した。其方もこらへてくれ。」

「殿、御情なき御言葉、あれほど御聰明に、御家系を尊ばれ御血統復活を決心なされました御心が、何故かくお曇りになりましたか。殿には御當家御祖先に對して、濟まぬとは思はせられませぬか。」

「眞木、主に向ひ言葉が過ぎようぞ。つつしめ。」

「いいや。ひかへ申さぬ。伯太郎様御家督を元にお返しなされぬからには、たとへ如何なる御どがめ受けようとも一步もひきませぬぞ。」

「おのれ、無禮千萬。汝の申すこと、きく耳もたぬ。たつて申さば許しおかぬぞ。」
定前は面を正して主君康直を仰いだ。

「殿！……。」

言葉はつまり、熱血の涙は瀧のやうに頬を傳はつた。

「殿の御前に面ををかしておいさめ申す上は、定前素より命はすてて居ります。なれども、この私が偏へにお願ひ申しまするは主家の御血統をもとにお返し下さるごことばかり……何卒私奴の心を哀れみ給ひ、伯太郎様をお世繼にお迎へ下さりませ。」

「ええい、さかしら顔の諫言だて、きく耳もたぬわい。下れ。えい、下りをらぬか！」
康直は憤怒に心亂れて立上つたが

「殿、何卒、今暫く御止りあつて、定前が申すことを……。」

「おのれ、無禮者！」

裾をたらへて止める定前の肩を蹴放つて

「誰かある、眞木を排けい！」

一喝を残して後をも見ずに奥へ駆込むのであつた。



參觀交代を終へて田原へ歸る三宅侯の行列は、遠州金谷の宿に入つた。宿外れの松並木の間から秋晴れの海は遠くひらけて、沖合はのかにかすむ一抹の陸影は三州渥美の半島

である。

「ああ、國元が見える……。」

眞木定前は寔れた面に淡い笑をうかべて佇んだ。

烈しい主君の怒をうけて以來、閉門同様の身もはばからず御歸國の行列に加はつた彼は、泊り泊りの夜毎に、面ををかして康直を諫めては懇願した。併し康直の心は固かつた。定前に對する憎悪は遂に彼に一目の目通りさへもゆるさなかつた。

「——今は唯一つの道があるばかりだ……。」

定前は心靜かに獨言した。今一目と思つた國元の土も、遠くのぞむことが出來て、彼にはもう思ひ遣すことはなかつた。

「渡邊殿、不甲斐なき定前、お誓ひ申せし約束も果し得ず、臣の道を全うし得なかつたことはただただ面目なうござる。いざ御膝下に參つて御詫び仕らう。」

ほの暗い旅舎の行燈のもとで、逆手に持った短刀の切先をじつと見つめて、定前は祈つた。

「先君康明公の御靈にお祈り奉る。何卒定前が命を哀れみ給うて御血統の復興を遂げさせ給へ……」

白光さつと動くや、行燈の灯に紅いものがばつと散つた。



「何？ 眞木が死んだと申すのか。」

康直は夜具の上へがばと起直つたが

「さうか、さうか、腹を切つたのか。」

つぶやく様に言つたその聲は餘りにもふるへてゐた。

「予にあてた遺書があると申すか。早く見せい。」

「恐れ乍ら血潮にけがれまして……。」

とためらふ老臣に

「苦しうない。早く持參せい。」

遺書を読む康直の眼はうるんでいつた。

「眞木ゆるせ。予があやまつた。予があやまつた。かほごの其方の誠忠を……ああ、予は愚だつた。許せ、許せ。」

涙と共にかこつ主君の前に、家臣らは、皆もらひ泣の袖をぬらしたのである。

「眞木、魂あらばよく聞け。伯太郎は三宅家の世継として即刻招きよせるであらう。

三宅家の血統は必ず復活させるぞ……。」

眼前に人あるが如くに言ひきかせる、康直は老臣らに向つて言つた。

「即刻江戸表へ使者を立てい。伯太郎をよび迎へる様、友信殿におねがひ申せ——それから……。」

聲をのんで續けた。

「又とない忠義の者ぢや。眞木の骸は手あつく回向して棺におさめい。國元につれ歸つてねんごろに葬つてやらうぞ。」

——西加茂郡學母第三尋常小學校 伊藤 巖——

九、獨眼龍松本奎堂

【松本奎堂事績の梗概】十八歳槍の稽古に左眼を失ひ泰然として詩を賦した。廿一歳江戸に出て昌平黌に入つたが意に滿たず、「天下眞闇りなり」と稱し白晝提燈をさげて退出し、國に歸りて禁錮せらる。廿五歳再び昌平黌に入り官命によつて詩文を教へた。後大阪に遊び、尾張に歸りて塾を開いた。其の後京都に出入し天下の志士と交はり、天忠組を組織し其の中心となつて、勤皇倒幕の義兵を大和に擧げた。戦勝たずして斃る年三十三。

此處は禁裏を繞る京の都、わけでも三條大橋の西の袂である。皎皎と澄みわたつた夜更の月は、時折薄墨色の雲に隠れては又橋の上に白い光を投げてゐる。あたりは全く人足を絶つて、静寂といふよりも寧ろ凄愴な氣配を帯びてゐる。

今しも夜目にもくつきりと墨繪のやうな影が一つ、何か深い考へごとでもあるのか、それとも人でも探し求めて來たのか、腕を拱いて黙々と橋の袂に差しかかつた、年の頃

三十歳前後と覺しい一人の壯士である。

恰も其の時、反對の方向から東山を背に負んで二つの影が、低い聲ではあるが頻りに話合ひながらやつて來た。

壯士は素早く橋の袂に姿を隠した。話は手に取るやうに聞えて來る。

「今宵の橋上の月も亦格別な趣があるなう。」

「何時に變らぬ明月であるわい。時に、これからの嵯峨の相談は一體どう結着するのかな、愈、明日にでも決行と極まれば、京の所司代を先づ第一にやつつけて、幕府の奴等の度肝を抜いて日頃の鬱憤を晴らしてやらうよ。」

「如何にもさやう、御勅諭があつては我我同志の身にとつて一時もじつとはして居れぬ。我我の起つべき時は眼前に迫つたのだ。だが奎堂總裁は何と考へられて居られるのかなう。」

「さあ——なかなかの軍師、どうやら考は深さうだぞ。」

「ごもあれ軍議の會合とあるからには——或は事を急に運ぶつもりかも知れないぞ。貴公の意見のやうに明日にでも決行と……。」

「さて奎堂先生は何の御用で遅くなると言はれたかの。」

「拙者が立寄つた時には、何かしきりに書を認めて居られたやうだ。藤本鐵石先生への御書状かも知れない。とにかく一足先きに參れとの仰せだつた。」

「して見ると愈、かな……。お互にしつかりやらうせ。」

「さうだとも——まあ我我は早く行つて今晚の顔ぶれを見るとしよう。」

「中山忠光卿、吉村寅太郎先生方も嘸かし御待ちかねであらうから……。」

「しつ……聲が高い。貴公はとかく昂奮するからいけない。ここで奴等が聞いてゐないとも限らない昨今だ。用心用心。」

「何、心配するな。奴等の壽命も茲一兩日だ。此頃では、ごいつもこいつも腰抜け武士ばかりだ。聞いたところで何が出来るものかハハハ……。」

二人の姿が彼方に消えた頃、あたりの様子を見計らつて先刻の壯士が姿を現して

「ふむ、さては彼等は奎堂と同志の者か、やつぱりやるのか——。」
獨で深く頷く顔には微笑さへ浮べてゐた。



と、程經て又彼方から聞えて來る足音。

「さうだ！」

彼は自身にさう頷くと、やがて足音のする方に腕拱いて近づいて行つた。

今橋にかからうとする先方の姿も確かに一人の壯士、而も其の態度は如何にも落着のある様子に見える。

二人は橋の中程で行交つた。途端！彼の眼は鋭く先方の壯士を射た。しかし先方の壯士は一向無頓着の様子で通り過ぎて行く。彼は二三步過させておいて、突然背後から叫んだ。

「謙三郎、待て！」

聲は低いが底力があつて、然も腸をゑぐるやうな響である。

流石に無頓着を装うてゐた壯士も、これには驚いたのか振向きざま

「何者だ！」

と叱咤する。

彼は其の時、尙も先方の容貌を確めるためか、いよいよ近づいてじつと見つめた。

「確に謙三郎と見届けたぞ。貴公片眼では如何に鋭くとも解るまい。拙者は池田銚之助だ！」

「おお！銚之助殿か、これは久方振りの對面、して貴公どうして此の京へ。やつぱり時勢に目覺められてかの。」

「だまれ！謙三郎、空慌そらばけるな。言ふまでもない君命によつて貴公の一命を爲留めに參つたのだ。其處動くな！」

「何を！」

二人は言ふが速いかばつと東西に分れた。その瞬間、二人の間にはさつと殺氣が漲つた。晝を欺く月光は二人の姿をももの凄く照し出してゐる。

謙三郎と呼ばれた壯士は、左右の鬢が心持拔上つて、黒髪を肩まで流した一見儒者とも武士とも見られる風體で、人品はあるが一眼が眇すかめで顎の角ばつた氣骨稜稜たる骨相、齡の程は三十歳餘りの若壯士である。彼は——刈谷藩の獨眼龍奎堂——と勤皇派の中に

稱揚されてゐる錚錚たる頭目である。相手の打込みを待つ爲に、欄干を背に右足を踏出して左の親指の腹を鐔裏にしつかと握つて、じつと身構へてゐるがその面には稍々焦躁の氣が漂うてゐた。

一方池田銚之助と名乗る壯士は、謙三郎の心を焦らすのも道理、彼は同じ刈谷藩士で謙三郎とは幼な友達の劍客である。二人は十五歳頃までは共に學び、共に武を練つて其の當時藩中で最も前途を囑望されてゐたのだ。謙三郎は武よりも文に、銚之助は文よりも武に秀でて共に天才の名を得てゐた。謙三郎が江戸へ學を志して郷里を出た時、銚之助は志を異にして藩に止まつて藩の軍務部に入り、専心武道に精進して、やがて指南役にまで進んだ武道の達人である。謙三郎と較べれば勝味は當然彼の方にある。

銚之助は反對側の欄干を背に、鐔裏に手を掛けてじつと謙三郎の構へを見つめる。彼の言葉には凄味があつた。

「さあ斬つて來い！この乃公が恐しいのか。何をぐづぐづしてゐるのだ。謙三郎！貴公は何を狼狽へたのか。そんなことで勤皇派の頭目とは片腹痛いぞ。——あきらめて神妙に斬られてしまへ、この愚者め！」

謙三郎は返す言葉もなく怒に震へてゐる。汗がたらたらと流れた。この侮辱、この罵倒、恥を知る武士の身にとつては死に優る恥辱なのだ。恐らく彼が今までの生涯で、これ程の苦惱を受けたことはなかつたであらう。謙三郎は惱みに惱んでゐる。——若し自分が彼に斬られたらどうなるのか。自分が折角築いた今迄のあらゆる苦心が水泡に歸してしまふばかりでなく、明日にも舉げようとしてゐる同志の義舉が全く無駄になつてしまふではないか。同志は今頃嵯峨の廢寺でどんなに自分を待つてゐるだらう……と言つて、此の窮地を容易く逃れることは勿論出来さうにない——謙三郎の心は今全く行詰つて、無念にも我と我が胸に燃立つ焔に焦されて行くのであつた。



「謙三郎！ 何を躊躇してゐるのだ。構へに狂ひがあるぞ。まゐれといふのに……ようし、もうこれまでだ、覺悟！」

銚之助の太刀が閃いた。

「えい！」

白刃一閃——あはや真つ二つ——と、謙三郎はさつと身をかはして觀念の眼は鋭く銚之助を睨んだ。力が續く限りの死力である。而も全く無我夢中だつた。

「謙三郎！ 今の技は見事だつたぞ。」

言ふ暇もなく續いて又もや

「えい！」

と今度は謙三郎の真正面目掛けて打ち込んで来る。謙三郎はすかさず相手の胸を拂ふ。ぱつと飛び退きざま銚之助は最後の一刀をと鋭く構へた。

劍客銚之助の心中には流石に豫裕があつた。——今の拂ひの一手なかなか謙三郎腕を上げたわい、こやつ以前俺とよく稽古試合をしたことがあるが、何時も焦る癖があつたのに、今の一手は見事なものだつた。彼は闘ひながらこんなことまで考へてゐた。

謙三郎の方はと見ると、一太刀、二太刀と打合ふ中に、漸次心の冷靜を取戻して來たといつても、やつと落着いて相手の隙を窺ふといふ程の心持である。

銚之助は——ようし、これで彼の心もどうやら正氣附いて來たぞ——と感附くや否や何を思つたのか、銚之助は自分の太刀先に態と少しの狂ひを見せた。と、謙三郎の切先

は銚之助の左の手に

「えい！」

と飛び込んだ。一撃は見事に窮所を斬つた。

「やりをつたな！」

と叫ぶなり銚之助は、傷附いた左腕を刀から離して右腕片手の大上段に構へて

「えい！」

と打ち込んだ。謙三郎はすかさず

「やあつ！」

と其の右腕の刀を碎けよとばかりに思ひきり打つた。

如何に達人の銚之助とはいへ、左腕に深手を負うての片腕の技とて、太刀のひびきは忽ち手を痺れさせてしまつた。ひよろひよろとよろめいて前に泳ぐ——泳いで崩れた隙を見て、謙三郎は左の肩先を斜め後から斬下した。銚之助は倒れながらも、尙も太刀を持ち直して立ち直らうと足掻いたが、もう足にも腰にも力は無く、そのまま片膝突いて、辛うじて振り向けた顔は蒼白く歪んで見えた。

謙三郎は後によろめいて、欄干を背に暫くは自失の體であつた。彼にとつてはあまりにも強い敵を斃したのである。眞實のこととも思へぬであらう、精根も盡き切つたであらう……。

「謙三郎——謙三郎——もう駄目だ——謙三郎は居らぬか！」

銚之助の聲に謙三郎は呼返された。恰も夢から醒めたやうな氣持でじつとあたりを見廻した。冷いものが頭から胸に傳つてくる。血だ血だ、夥しい血だ——。



「おうい——謙——謙三郎は——居らぬのか。」

再び叫ぶ銚之助の呻き聲に總てのことが彼の意識に蘇つてきた。——俺は生きてゐたのだ。而も自分の前には今の今迄生命を争つた、それも斬られるものごばかり觀念して戦つた、強敵銚之助が苦しんで居るではないか。後頸部からは、むくむくと溢れるやうに血潮が流れ出てゐるではないか。——胸をつたひ手を傳つて流れてゐる——斬つたのは此の俺だつたのだ——。謙三郎は自分ながら不思議なこの情景に自らの眼を疑はずには

をられなかつた。併し次の瞬間には、憎むべき敵としてではなしに、なつかしい幼な友達として苦しむ彼を捨ててはおけなかつた。

「おうい、謙三郎はここに居るぞ。」

「謙——おうゐたか——謙三郎貴公が勝つたのだ。——謙三郎どこにゐる——手、手を——、」

銚之助はもう少しの間も待てぬといふ風に見えた。謙三郎は刀を捨てて銚之助の手をしつかと執りながら

「銚之助！氣をしつかともて、それにしてもこの俺がどうして貴公を斬つたのか、全く自分にもわからないのだ。技を考へて見たつて倒底貴公の敵ではないのに……。」

「いやいやさうぢやない。確かに貴公の太刀先には不思議な力がこもつてゐたのだ。それに正しい者が勝利を得るのは當然のことだ。此の世の中には争ひといふものが絶える時はないのだ。だが最後は必ず正しい者だけが勝つのだ。昔の親友の誼みだ。俺の最期の頼みを聞いて此の不忠者の友を救つてくれ。」

銚之助は苦しい息遣ひの中から自分の過去を物語るのであつた。

物語といふのは——

銚之助と謙三郎とが互に別れて生活し始めたのは、今から凡そ十二三年程前で、謙三郎が江戸の遊學を思立つた時である。其れ以來謙三郎は學に志し研鑽を重ねて廣く天下の志士と交はり、天下の情勢を看破した。然るに銚之助は藩に仕へて只管武道にばかり邁進して居た爲、七年後に謙三郎が謹慎仰せつかつて刈谷へ歸宅した當時に於ては、銚之助とは思想上では正に天地の懸隔を持つてゐた。全く銚之助にとつては謙三郎の言動が氣違ひしか思へなかつた。恐らく彼だけではなく、藩の者殆んどがさういふ見方であつたらう。間もなく謙三郎は藩主の許を得て京阪を東奔西走する身となつてゐた。藩としては謙三郎のやうな人物を藩から出してゐることは、藩の將來のため幕府に對して不利であるから、彼を今のうちに仆して藩の禍根を絶つべきであるといふ意見になつた。それについては謙三郎も相當の武藝者であるから、未熟な者を差遣はすわけにはいかない。そこで詮議の結果、銚之助を最適任者と決定して命令は銚之助に下されたのである。ここまで語つて來た時彼は苦しい息の下から

「おい——俺に水をくれ、水を！」

と頼んだ。

「まあ待て、氣をしつかと持て、傷は浅いのだ。」

謙三郎は話を聴くにつれて、次第に氣の沈んで来るのをどうすることも出来なかつた。併しかうしてゐる間にも銚之助の最期は刻々と迫つて來た。謙三郎は、もう駄目だと思つた。

「さうだ、聞けるだけ聞かう。」

と思つた。銚之助のどぎれどぎれに語つていつたのをまごめるとかういふ筋であつた。

それから銚之助は、「よし必ず斬つて首級を持參致します」と、謙三郎の後を追つて京に上つた。京にゐないことを知るや大阪に下り、淡路に渡り、播磨にも行つた。そして次々と探したが何時も謙三郎の發つた後ばかりで、遂に探しあぐんで再び京に歸つて來て見ると、京の情勢はからりと變つてゐた。かうした明け暮れの中に、銚之助には何時の頃からともなく自分の目的が疑はしいものになつて來た。といふのは日本の國の正しい姿が銚之助の心の一隅に映つて來始めたからなのである。自分のもちつづけてきた心の的が、誤であるといふことをはつきり見極められて來るといふことは、銚之助にとつ

てそれは歡びであるよりも大きな苦惱でしかなかつた——と語つてきて息をつぐ銚之助であつた。

銚之助の體をささへながら聞いてゐた謙三郎の眼には光るものがあつた。そして——銚之助も矢張り日本人だ。俺と同じ日本人だ——といつた感激とも歡喜ともつかない感情に胸を熱くするのであつた。

銚之助の話はつづく——

それからの銚之助は、もうじつとして居られなくなつた。今更故郷に歸れる身でもない。さうして謙三郎を殺すといふことは尙更出来ないことだ。そこでいつそのこと自害しようと思つたのであつた。そして自分の自害を嗤ふ奴は、やがては自分のやうに自決しなければならぬのだといふことまで銚之助にははつきり解つて來たのだつた。併し自決するとしても一度謙三郎の顔を見て、自分の過去を語つた上で、謙三郎の手で制裁を受けて死にたいものだと思つた。それ以來毎夜のやうに、京の街街をさまようて歩いた。が、その間にも情勢は刻々と變化して、勤皇の士の動きは慌しくなつてきたので、或は近い中にめぐり會ふ時もあるかと思つてゐる矢先、今夜はからずも通り

すがりの武士の話を橋の袂で聞いて、間もなく謙三郎が此所を通ることを知つたので、時機来れりと身をひそめて待つてゐたのである。行きちがつた影が謙三郎とわかると流石に胸は懐しさに高鳴つた。すぐにも、かうした長年の経緯を話さうかとも思つたが、話せば却つて執着が起りはせぬかといふ心配が急にそれを思ひ止まらせて、咄嗟に思ひついたのが今夜の處置であるといふのであつた。そして、彼は過去を懺悔して正しい皇民の道を知つて死んで行くことが出来るのは、無上の喜びであるといふのであつた。

抱きかかへてゐる謙三郎の手が急に重みを感じた時

「本懐達成を祈つてゐるぞ。謙三郎！刺止を——。」

といふなり彼の五體は謙三郎の兩腕の中に落ちてしまつた。

恩讐を越えた美しいものが二人を包んだ。

「銚之助！銚之助！死んではならぬ——死んではならぬのだ——。」

今はことされた銚之助の體をしつかと抱いたまま謙三郎は涙をしぼつた。

銚之助の死を以ての激勵は、謙三郎の五體の底の底までも沁み徹つてゆくのであつた。

——帝の御聖代にして見せるぞ。銚之助、見てゐてくれ。貴公の生命は俺の五體に生き

更つたのだ——。

謙三郎は靜かに立上つて、亂れてゐる容儀を正し、次に今は冷い屍となつてゐる友の亂れてゐる髪を撫でつけてやつたり、羽織袴を正してやつたりしてから抱へ起して皇居の方角に向けて座らせ

「皇居が拜めるぞ、銚之助……。」

いひ聞かせると、自分も銚之助に並んで膝を正し、片手をついて平伏し、凜とした聲で申上げるのであつた。

「臣、池田銚之助・松本謙三郎謹んで 帝の御安泰を祈り奉る。萬古不滅の御稜威を六合に垂れさせ給ふやう、臣我等兩人、誓つて屍を捧げて盡し奉る。」

謙三郎は小柄で銚之助の鬚髪を切つて押し戴き、紙に包んで懷中にし、屍を橋の袂に運んで暫く合掌してゐたが、やがて立上り、今更のやうに月夜に黒い京の山山を眺めて、やがて輝かしい曉が訪づれるのも遠くはないであらうと思ふのであつた。

——碧海郡亀城尋常高等小學校 松原三郎——

一〇、倉田珪太郎と其の母

倉田珪太郎は刈谷藩士である。慶應三年、朝廷再三刈谷藩主土井利教に上京を促し、皇事に忠勤せよと命じたけれども、藩論が佐幕黨にかたむき、利教は更に皇命に従はなかつた。珪太郎京都に在り、急遽歸國し、母の激勵を得、其の日登城して主君利教に面接して大義を説き、更に同志十五名を引率して慶應四年二月八日の夜、佐幕の主將、多米・津田・黒田の三家老を暗殺し、藩論を一變した。時に珪太郎十八歳。維新後中央に仕官を勸むれども珪太郎はいつも固辭して、寸毫も自己の榮達を計らず。木戸孝允は妹を珪太郎に嫁せんとしたが受けず。終に駿河の清見寺にて剃髮し、清翁と名乗り、三家老の菩提を弔ひ、後横濱に出でて白瀧不動の堂守となり、更に近郷森村の墓修庵に入りて餘世を遂げた。

年號は元治と改まり、然も正月だと云ふのに珪太郎の心は鉛を吞まされた様に沈んでゐた。

去年の暮、勤皇の志士福原が、彼の屋敷内で幕吏に取抑へられたのが切掛となり、大野

信吾外同志三名の者まで召し捕へられ、當時有名な江戸の小傳馬町の牢屋と並び稱せられた、總州古河の牢屋へ繋がれてしまつたのである。

此の時には彼も勿論一緒にと覺悟はしてゐたが、彼にはただ

「刈谷へ歸り謹慎せよ。」

と、江戸詰御用を解かれただけで事が落着してしまつた。

彼には其れが不思議ではあつたが、今度の事件に土井本家が氣を揉んだと聞いて、彼が六歳の折から、土井利興公の御養育係として本家へ上つてゐた母の力であることに氣付き、有難い事とは思つたが、同志の事を想ふとそれだけ一層苦しくて、彼の胸は張り裂ける思ひであつた。

獨り靜かに考へてゐると、彼は耐らない焦躁感に迫られて、自分の心が手當り次第に掻き毟つて捨てたい様な氣にさへなるので、この心をじつと押し沈めるために彼は遂に屋敷を外に歩き出してゐた。

空はよく晴れてはゐたが、ぞくつと身に沁む秩父嵐が絶え間もなく吹き荒んでゐた。彼は何時の間にか赤坂の高臺から藩邸の立並ぶ街を北に向ひ、代代木の森も通り越して、

遙かに秩父の連山を真と面に眺める代代木の原を西へと向つて歩いてゐた。

「おや！」

彼は喫驚して行手の山に眼を瞠つて佇んだ。

今、一塊の大きな灰色の雪雲が暮れ行く陽を遮つたのであらう、薄墨色の連山の上に頂を覗かせてゐた富嶽が、瞬間に眞黒に眺められたのであつた。

「こんな富士の姿は一度も観なかつた——同志を失つた心の亂れからであらうか。」

と見直してみたが矢張り「黝い富士」だつた。それが亦「時代を示す天啓」のやうにさへ思はれて、懼しい氣持が湧いてくる。

「こんな事はない筈だ、尊嚴無比な姿こそ富嶽の實體でなくてはならぬ。まこと富士山は神國日本の象徴だと信じ、今にも大君の知ろし召す大御代となつて眺める富士は、どんなに美しいことであらう……。」

凝つと睨んでゐると次第に富士も明るくなつた。

この時だつた。彼は

「吾と吾が心に暗黒の富士を描くやうなことをしてはならない。」
と呟いた。

「自分獨りでも残された事がまだしも幸であつたのだ。さうだ、吾が五體の續く限りは大義の爲に盡してこれまでに不幸に遭ひ、悲運に斃れた同志のもの達に報いねば相濟まぬことだ。」

と強く心に決して吾に返つた彼は、何時しか日も暮れてあたりにはもう夕暗が迫つてゐるのに氣が附いた。彼は「おおさうだ」と呟いて赤坂の自邸に向つて踵を返した。

彼が我が家へ這入ると、其處には歸を待たびてゐた懐しい母の姿を認めて、喫驚はしたものの亦嬉しかつた。

「母上様、色々御心配をお掛けして申譯ございません、不幸の罪は何卒御容赦の程を願ひます。」

と両手をつけば、母も

「何の、何の、心配など御無用のこと、國事に盡す者なればさも有るべき事、力を落しては相成りませぬぞ。」

と優しい微笑をさへ湛へて

「其處許が刈谷へ歸られる前に間に合うてよかつた、おやす殿や千代藏等が淋しからうかと急いで歸つて來たのだよ。最早御殿からお暇を賜はつたから、此の上は心置きなく出立されるやう——」。

母の優しい言葉を受けるに珪太郎の臉には熱い涙が光つてゐた。



刈谷へ歸つてからの彼は、全く孤軍奮闘の形であつた。同志一味の青年藩士は、多城の北方八幡山の牢屋に入れられ、藩政は家老多米新左衛門一派の思ひの儘であつた。併し彼は

「吾吾青年藩士の勤皇の血潮が必ず勝つ日が來ると思ふ。其の時こそは藩政も改革されるに違ひない。」

と、堅く信じて止まなかつた。

先に文久三年九月二十五日松本、宍戸兩先生が勤皇の先驅をなした天誅組大和の義舉に斃れてから、此處刈谷藩の青年藩士の胸に暖められつつあつた勤皇の血潮は、遽かに

熱湯となつて滾り出した。

それが其の年の冬には藩主土井利善公の養嗣子の問題と絡みついて、二口目には「何といつたつて刈谷藩は親藩だからなう。」

と保守慣例を至上のものやうに繰返す家老多米等が、幡州林田一萬石の城主建部政醇の四男謹五郎を推舉したのに對抗して、青年層の連中は紀伊の新宮藩主の息、録之助を擁立して、一時は守舊派の連中を抑へてしまつた。

けれど、惜しくも江戸赤坂山王臺の刈谷藩上屋敷、倉田珪太郎の藩邸に起つた福原の事件は、折角燃上らうとした勤皇討幕の炬火に、濡れ縶をかぶせたやうな結果となつた。

その長州藩士福原晋之進は、尊皇攘夷の權化とも云ふべき家老福原越後の弟で、同志を糾合しながら全國を歩いてゐたのである。

福原は京都で大和義舉にも加はつた刈谷藩の伊藤謙吉（三彌）が、岩倉邸に匿れてゐるのと相識り、刈谷藩の江戸藩邸に勤皇の士を訪ねて、倉田の邸に草鞋の紐を解いたのであつた。

江戸は何と云つても幕府の金城湯池、それを何の不安もなく易易と這入つて來られたといふのが、彼に——山嶺山麓を見ずとは此處の事だ——と云つたやうな油断を抱かせたのか、遂に倉田の邸に彼が匿れてゐる事を幕吏に嗅ぎつけられたのである。

同志の連判狀を懷に、夜陰に紛れて旅に出ようとした所を背後から幕吏に襲はれ、不幸物に躓づいて倒れた所を捕縛されて仕舞つた。然し彼も剛の者であつた。咄嗟に彼は「同志への申譯は死を以て。」と、自ら白刃に己の首を磨り付けて相果てたが、惜しくも、同志の名簿は幕吏の手に這入つてしまつた。

これを聞いて狼狽したのは同志の者よりも寧ろ土井大炊頭であつた。

「其儘には捨て置かれぬ、刈谷藩の浮沈に關する事は勿論だが、本家も亦お咎めは免れ難からう。早速藩主は何も識らないものと幕府へ陳情しろ。」

と命じて置いて、元治元年の正月の二日だと云ふのに、連判名簿に在つた江戸詰の大野信吾、澤俊彦、安井盛信、井關定功の四名を召し捕つて古河の牢屋へ入れてしまつた。

これで藩の勤皇派は一時潰滅の形となつたが、併し彼、珪太郎が信じてゐる勤皇の血潮が必ず勝つ日が來る——といふ其の待望の日が來たのである。慶應元年、二年と京

都を中心に勤皇・佐幕の渦は急旋回を起し、暗雲低迷してゐた天下の形勢は、薩長の聯合が成立すると、急轉直下慶應三年の暮、幕府の大政奉還といふ所まで行つてしまつた。

同時に討幕の密勅が岩倉公に降つた。刈谷藩主の許へも——上京せよ——との勅諭が傳へられた。

藩主が江戸から刈谷へ歸ると、亦第三回目速刻上京せよ——との御沙汰が岩倉公から届けられた。

此の有難い勅諭を受けながら、藩主の動く様子がみえないので堪り兼ねた珪太郎は、熱血を絞つて藩主の前に我が國體の尊嚴を説き

「天皇御統治の大御代が我が國本來の姿であつて、今こそ本然の姿に復歸したのである。徳川の親藩である尾張藩さへ既に上京して禁闕守護の任に當つてゐるのだ。此の上は速刻上京勅諭に添ひ奉り、勤皇の範を天下に示すべきである。」と、述べて譲らなかつたが、多米家老は

「今日の天下の形勢は、あれは薩長の幕府に對する反抗に過ぎぬ。」

とか、果ては

「若いものの言ふ事は頗る危険だ。じきに策動に乗りたがる。」
等と、反駁して耳を借さうとはしなかつた。

珪太郎は此の家老が有つては何も出来ない。いつそ一思ひに——とは思つたが、凝と我慢して下城し、石川良造、日高浩藏の兩氏を伴ひ脱藩の手續を取つた。が、既に上京してゐた濱田與四郎や伊藤謙吉等に、藩の實情を報告してからでも家老のことは遅くはなからうと、京都へと急いだのである。

道中は嵐の前の様な氣味悪い静けさを感じたが京都へ這入ると、何處にも皇室中心の動きが堰を切つた怒濤のやうに渦巻いてゐた。

濱田や伊藤に會つてみると

「もう既に討幕の密勅は降つてゐるし、御東征も時間の問題だ、三度勅諭が下る筈になつてゐる。今になつて上京しないといふ法があるものか。」

と怒つてゐるのである。——もう、どうしても藩主を奉じて上京しなくてはならぬ——と云ふことが明確になつたので、三人は急遽再び刈谷へ戻つて來た。

慶應四年二月八日の午下り、珪太郎等は直ぐその足で登城して一刻を争ふ京都の實狀を藩主に訴へ、何としても上京を促さうとしたのである。



龜城の大手門から南へ出て、藩士の家の立並ぶ通りを右へ曲り、一丁許りも行くこと、何かを暗示してゐるやうに紅梅が美しく咲いてゐる邸がある。これが珪太郎の邸であつた。

珪太郎等が京都から歸つて、疲れも休めず登城した後、同志の青年藩士が十數名の邸に集つて話合つてゐた。

間も無く三名は歸つて來た。青年藩士の一同は話を止めて珪太郎等の顔を見詰めた。

「御一同、御苦勞でござる。」

と、珪太郎は佇つた儘一同を見渡した。——市川勝三郎、岡嶋斧吉、服部政之丞、天野銚吾、杉浦鎌市、毛受清兵衛、山田録之丞、酒井倉七、内藤九左衛門、鈴木鉦吉、河目源吾、市川宗平、福代鉦太郎、鈴木隆次郎等、二十歳を越えた許りの元氣な顔が揃つて

ゐるのを見ると、安堵したやうに彼は座についた。

「首尾は如何でござつたか。」

と、歳頭の市川が心配さうに訊ねる。彼は

「駄目だ。」

と吐き出す様に言つた。そこで石川が多米家老との話の顛末を掻い摘んで語つた。

「脱藩したものが何故藩主に用がある。今から夜にかけて重役會議を開くから、殿もお前等に會つては居られないと言ふのだ。『いくら夜が遅くなつても此處で待たう。』と言へば、『待つ必要はない。邪魔になるから速刻下城せよ。』と、鯉クニ膠ベもない御挨拶なんだ。」

彼等の眉宇には、更に昂奮の新たなものが見られた。

「三度目の御沙汰が下つてゐての會議だと思つたので、暫し待つ事にしたのだ。」

と、今度は日高が引取つて云つた。一同は口口に話し出した。

「今度は動くだらうか。」

「駄目だ、多米家老と來た日には。」

「彼は勤皇を口にするものを仇のやうに思つてゐるのだからなう。」

「さうだ、古河の揚屋の連中とても、もう五年越しになるんだからなう。」

「彼といふ奴は説いて分る男ではないのだ。」

「叩きのめさなければ埒はあくまい。」

「最後の手段以外にはあるまい。」

凝と黙つて聽いてゐた珪太郎は靜かに

「今夜の様な好機はまたとあるまい。今夜こそ天與の好機といふもの、御一同の命は暫く此の珪太郎に預けてもらひたいのだが……。」

其の言葉に異存のあらう一同ではない。

「いよいよ錦の御旗の下に馳せ參する日が來たのか……。」

と欣喜雀躍した。

此の時、珪太郎の母が靜かに縁傳ひに這入つて來て

「おやまあ暗い事、お前様方燈火を點したら如何。」

と、部屋の片隅から燭臺を運んで灯をつけ、珪太郎の背後を廻りながら、肩口からそつ

と彼の膝の上へ結び紙を落して出て行つた。

珪太郎が手早く膝の上で開いて見ると

君のため赤き心を盡せかし親子の道はとまれかくまれ

老人子供のごご必必御心にかけてられまじく御志のほど立派に貫きなさるべく候

かしこ

母より

としるしてあつた。

「ああ有難い母上のみ心——。」

彼は心の中で限り無い母の恩に泣き

「きつと立派に討果します。」

と誓つたのであつた。

「さあ彼等の下城刻に遅れては一大事。」

と一同は立上つて、誰からと云ふ事もなく、襷十字に綾なし、白鉢巻さへ締めた。

彼等が仕度を整へ、打揃つて出ようとする後の縁の上から珪太郎の母は

「皆の衆何です、その装束は。」

と聲をかけた。一同が凝として振り向く所へ更に言葉を續けて

「仇討ちでもあるまいに、白鉢巻や襷掛けとは見苦しい。高が家老の二三人、どれ程の手間暇が掛りませうぞ。さあ、襷を外してお出掛け召され。」

一同は顔見合はせて、きまり悪氣に装束を直したのであつたが、此の母の言葉はいやが上にも彼等の士氣を鼓舞した。

庭の紅梅がちらほら座敷の灯に映える中を、彼等は静かに一團となつて出て行くのであつた。



此處は清見瀉を距てて富嶽を望み、三保の松原、久能山も指呼の間に望み、眺望は海道第一の天下の名刹、駿河の國興津、清見寺の住持の居室である。

初夏の陽差が、中庭の泉水の上にも若葉の間からも、燦燦と降注いでゐる。部屋の中が若葉の蔭で却つて暗く見えるのが、如何にも俗を脱した住持の居室らしい落着を見せてゐた。

其の部屋には六十歳位かと思はれる、兄弟とも見違へられさうな老僧が二人向合つて坐してゐた。

よく似てはゐるが、一人は白眉の附け根が太く、顎が大きく、それが一見魁偉なといふ感じを懐かせ、もう一人は眼光こそは意志の強さを閃かしてはゐるが、何處かに温雅を思はせるものがあつた。

この魁偉な老僧は、ここの住持で、徳望の高い事で聽えてゐる眞淨老師であり、温顔の老僧こそ清翁坊倉田珪太郎その人であつた。

彼が身を挺して、刈谷藩を勤皇に導いたあの大事件を惹起してから、藩政が改革せられ、一時は刈谷縣の小參事を勤めたが、皇政維新の業が全く成ると——私の仕事はこれで濟んだ——と、榮達を少しも意としなかつた彼は、中央仕官を勧められても固辭して受けようとはしなかつた。木戸孝允から妹を嫁にと言はれたがこれも亦斷つてしまつた。

「これからは、武士も一野人となつて何なりとも實業に就いて働くことがお國に盡す道である。」

と言つて名も三河屋珪太郎と改め、呉服を背負つて行商に出た事もあつた。

「士魂商才」とは云へ、慈悲深い彼の性格は、氣の毒な人と見れば反物を無料で與へたりした。それが亦、彼には何よりの樂みでもあつたのである。

かうしたうちに、彼は四十六歳の春、大事な母親を失ひ、長男の千代藏にも二十三歳の若さで先立たれてしまつた。この時、翻然彼は清見寺に来て眞淨和尚に剃髪して貰ひ、禪道修行に精進して親子の靈を慰め、三家老の菩提を弔ふことにしたのであつた。

或は龍華寺に寄食し、或は横濱の白瀧不動や、其の近郷森村の篁修庵等に堂守をして茲に十三年、今かうして久方振りて師匠を訪づれた彼の温顔からは、四十年前身を以て藩論を覆した若き日の珪太郎の面影を偲ぶべくもなかつた。篁の水音を聞きながら今は安らかな境地にあるこの老僧たちは、時々笑ひ聲さへ交へつつ、昔語りをするのであつた。

——碧海郡亀城尋常高等小學校 神谷愛泉——

一一、尊皇愛民の古橋父子

古橋源六郎暉兒（暉のり）は北設樂郡稻橋村（現今稻武町）の人、家は代代村の豪家であり、夙に尊皇の心厚く産業の奨励につとめ、明治十八年六月一日藍綬褒賞を受け、明治二十五年十二月廿四日八十一歳を以て歿し、大正二年十一月贈正五位を賜はつた。其の子源六郎義眞父（よしまさ）の志をつぎ尊皇愛民の志厚く、かつては東加茂・北設樂兩郡長を兼任し、後稻橋・武節組合村村長となり治績をあげ、明治四十二年十一月十三日歿するの日に藍綬褒賞を受く。其の長男唯四郎後を嗣ぎ源六郎を稱す。二男古橋卓四郎は咸鏡北道知事となり、三男川村貞四郎は山形縣知事となつた。



主客三人端坐して、話は和氣霽霽の中に運ばれて行つた。主の古橋暉兒（暉のり）が

「流石に幕府の目もここまでは届きかねてか、御かくまひ申上げる方もお心安くお過し下されて、これでこの暉兒もいくらか御奉公出来ると思すものかな。」

「いや、御身のやうな方がこの地に居られるからこそ御維新の大業も着着と進むわけ

ぢや。我我とても貴殿に倣つてせめて尊皇同志の方方を御かくまひ致したうは思ふものの、何分此の頃は平坦の地は格別探査がきびしうての。」

「その通りぢや。同志の人人の艱難を目のあたりに見たり、壯烈な殉國の死を聞く度に、不甲斐なく思つては見るが、何共致し方のない次第ぢや。」

主客共に四十歳をやや越えた年配であるが主の暉兒だけはもう半白で、齒も大分脱落ちてゐる。併し氣魄は中中鋭さうに見えた。

客は三州堤村の村上忠順（たけまさ）と、同西方村の羽田野敬雄（はたのたかを）とで兩人共に勤皇の志が厚い篤學の士であつた。

「それがしが、かうして古橋氏を訪ねて談論したり、日頃の鬱憤を晴らすやうに勤皇の志を語らうと思つて来て見れば、羽田野氏も思ひがけなく來駕される。お互に心の通ふといふことは嬉しいものぢや。」

忠順は如何にも嬉しさうに微笑む。

「何さま、不思議といへば不思議だが、これもつまりは古橋氏の御人徳がさうさせるのであらう。お互にわざわざ幾山川越えて參るのだからの。」

「いや——と暉兒は敬雄の言葉をさへぎつて——恐らく兩君ともに、この山莊の氣樂さと、山紫水明を味はひに參られたのでござらう。この古橋の變屈者なんか何でお役に立ち申さう。」

三人は顔を見合せて心おきなく笑つた。

「おおさうぢや御兩氏にお引合せする方がある。」

と暉兒は言葉を改める。

「われわれ二人に引合せるお人とは……誰かの？何れ志士の方ではあらうが。」

「さうとも、珍らしいお方ぢや。女人ぢや。」

「女人？」

二人は不審氣に顔見合せた。

暉兒は無言で立上ると奥の間へ這入つて行つた。二人の客は思出した様に、前の盃を取上げて口にした。酒は當古橋家醸造の芳醇なものであつたが、肴は質素なこの里の野菜二三品であつた。襖が靜かに開いて暉兒と共に一人の武家風な女性が這入つて来て、下座につくと一禮した。

「信州の松尾多勢子殿ぢや。」

暉兒は靜かに引合せた。

「何、松尾多勢子殿？これは意外な——。」

二人は眼を瞠つて居すまひを正した。信州の勤皇女傑として尊皇の志士の間にも令名の高い松尾多勢子である。

「古橋様、並に村上先生、羽田野先生の御高名は、豫てから同志の方方を御庇護下さいます御厚恩によつて早くから承つて居りました。女だてらにお恥づかしうは存じますが、この度は身の危ふさに追はれ、遂に古橋様の御助けをねがひ、かくまひ戴いて居りまする。」

多勢子は明快な口調でしどやかに挨拶した。美しいと言ふのではないが、聰明で勝氣な性格が眉宇のあたりにかがはれて、四十歳にはまだ間のある齡と見られた。村上が

「御挨拶誠に痛み入ります。今も今とて身を以て皇事國事に盡し得ぬわれわれの身を恥ぢ託つて居りました次第、ほんに女性の貴女には合せる顔もござらぬぢや。」
と、しみじみ言ふのを多勢子は止めて

「何と仰せられます。恥づかしながら妾どもが惜しからぬ身を守りつつ、かうして臯事に奔走いたしますのも謂はば一つのまはりあはせ、既に無い命を古橋様はじめ皆様方に御助け願つて居ります。かつて水戸の木村久之進さまも、『古橋氏がござらねば拙者は三つ四つの命があつても足りなかつた。』と述懐してゐられました。」

「しかし我等には我等としてもつともつと尊皇の志に生きる道があるのではないか……なごど考へますのぢや。」

と暉兒は獨言のやうに言ふ。

「否否我我同志を今まであまた御かくまひ下されましたことでさへ、我我の日夜の奔走にもまさる勤皇の功勞と申上げて憚りません……。」

多勢子の舌端は眞實をほとばしらせて、主客を深く肯かじめた。やがて多勢子は「皆様方に、是非共御目にかけて品がございます。」

と言ひながら、袖の下から帛紗の包を取出して一冊の寫本らしいものを靜かに三人の前にさし展べた。

「平野國臣様が、先年京都六角の牢舎にて刑死いたされまする前、獄中で認められた

ものでございます。」

「何、平野國臣殿が……。」

三人は期せずして異口同音だつた。それは手あかによれた一綴りの半紙の上に、紙縊こまひをち切り貼りつけて文字とした辛苦の手記なのである。

「おお！一點一畫皆精氣がただよつて、文言皆魂魄がこもつて居る。」
敬雄が呻吟うめくやうに言つた。

「英四、英四！」

暉兒は大聲に我子と呼んだ。

「父上、御用でござりまするか。」

今年八歳の英四郎は、一座へたごたごしい一禮をすると父を見上げて言つた。一昨年こぞの春、母を亡くした弱弱しい子であつた。

「うむ。ここへ來い。お前は身も心もつよくならねばならぬ。ここへ來て、この書物を見せていただくがよい。勤皇の爲に命を捨てられた平野國臣殿の辛苦の絶筆ぢや。」
父の嚴かな聲に示されて、英四郎はじつとその紙縊の文字に視入つた。清く澄んだ兩の

眼にもきつと結んだ口元にもどこか末頼もしい強さがあつた。



「誰ぢや、お英四郎であつたか。用事かの。」

暉兒は抜放つてゐた一刀を鞘におさめると、徐ろにふり返つて言つた。

「父上には有栖川宮大總督の御軍に加はり、出征いたされるといふはまことでございまするか。」

「うむわしの年來の志を果す時が來たのぢや。刃をひつさげて錦旗の下に馳參する日にいよいよ惠まれたのぢや。」

面には會心の微笑が浮んでゐる。戊辰の役が勃發して、有栖川大總督の宮が征東將軍として江戸の徳川慶喜を討ちたまふのである。

「父上、それはなりません。出征の儀はこの英四郎に御譲り下さいませ。私とて既に十九歳、木村久之進先生より傳授願ひました腕に覺えもございます。御老年の父上には何卒思ひ止まり下さりませ。」

「何を申すのだ。老年とはいへまだ六十には満たぬ。一期の思出に錦旗の下に馳參するのぢや。止めてはならぬぞ。」

「いいやお父上。出征は私がいたします。その一刀はこの私に下さりませ。」
その時、襖を開いて手をつかへたのは、古橋家の家僕として忠節の心厚い古橋義周よしちかであつた。

「無様は御ゆるし下されませ。御父子の御争ひ、御兩者共に道理はあつても互に無理がござりまする。大旦那様には御老年、しかも郷國のため無くてはならぬ今の御體、又若旦那様には御家にとつて唯一人の御子息。何れも御出征は郷國の爲、家のためには御無理に存じます。かかる時こそ、この義周が御二人様に代つて官軍に加はりまする。」

毅然として言ふのであつた。

「義周、お主が代りになると……それで我我の志が止まると思ふのか。馬鹿な。」
語氣鋭く言放す英四郎には、往年のあの女兒の様な面影はもう見られなかつた。

「事をわけて申上げて若旦那様には、義周の申すことがわかりませぬか。」

「わからぬども。いらぬ止めだてだ。」
「何と申されます。」

若い義周の聲も激して行つた。

「まあ待て。成程、聞いて見れば汝等の言分にも道理はある。わしも考へるところがあつた。お互にこのことはもう取止めとしよう。」

「何と申されます。今となつて理不盡な。」

「御二人はとにかく、この義周は、出征させていただきます……。」
せき込む二人を暉兒は強ひて制しながら言つた。

「この一家から、只一人の戦士を出したとてそれが何ほど皇事に盡すことにならう。常考へながらわし自身も氣附かなかつたが、我等としては他につくすべき道があるのだ。いくさに殉じた覺悟で別の道を講じて國のために奮闘することこそ、眞の勤皇なのだぞ。」

「否、私は戦士として行かせて戴きます。」

英四郎は斷乎として言ふ。

「私の進む道が間違つてゐることは斷じて思ひませぬ。」
十九歳の若人の面は自信に輝いてゐた。

「私も行かせて戴きます。若旦那様の御出征ならば猶のことお伴をさせて戴きます。」
暉兒は思案のうめき聲をあげた。

三人は顔見合せたまま互に譲らぬ意氣込みで相對してゐた。

「よし。」

暉兒は決心の臍を固めて言放つた。

「では八幡宮の御神靈に御裁きを仰ぐとしよう。神前で御鬨をひくのぢや。そちたちに吉と出たら望をかなへてやらう。わしのが吉ならば、わしに従ふのだぞ。」

暉兒はやうやく肯いた二人を連れて、産土神の八幡宮へ行つた。かくて……御鬨の結果は遂に暉兒に吉と出て、出征は中止されたのであつた。



十九歳の時郷里三河國稻橋村の名主となり、二十三歳で家督をついで源六郎義真と名

乗つた頃から、郷邑支配の公職は彼の身から離れなかつた。彼が百年の大事業として林産の奨励に着手したのは、恰度三十二歳で北設樂郡長を勤めた時であつた。父暉兒と諮つた彼は、次の如くにして郡下各村の林産振興を計畫した。

一、古橋家の田地を村に供託して、その作米を植林百年間の扶食米として給與すること。
一、給與米をうける上は必ずどの家も毎年百株の植林をすること。併しこの百年間は、如何なる事故があらうとも樹林を伐採賣却してはならぬこと。

かうして郡内五十餘箇村に於てこの計畫は着着と實行せられて、七年後には既に總樹林は優に百萬本をこえるに至つた。この林産と並んで行はれた大事業には産馬があつた。

明治十一年愛知縣知事安場保和やすかほ氏は北設樂郡の産馬に着眼してこれを郡長古橋源六郎に勧めた。源六郎は縣へ乞うて奥羽の種馬を得、元騎兵大尉奥田賢英かたひでの輔導によつて、産馬講習所を開いて之を郡内に奨励した。

第一回の仔馬の産出が比較的少かつたのと、馬の優劣を解せぬ郷人が、南部馬や歐洲馬の仔の體軀が長大で沈勇なのを、魯鈍で扱ひにくいと思込んだ所へ、近郷の馬商人が間に這入つて、種種の煽動めいた悪口を放つたりしたので、折角の馬匹改良の事業も一時は崩潰に至らうとした。

源六郎は決然として一策を建て、駿・遠・三・尾・各國の馬商人に告げて仔馬の市を開いた。これによつて馬匹の優良さは、有眼の馬商人等によつてたちまち在來の馬との間に非常な値段の差をあらはした。即ち在來の仔馬一頭が五圓から三十圓までであつたのに較べて、改良馬は十二圓から八十圓までの値段を勝ち得たので、ここに一目瞭然郷人の迷を醒し、奸商を退けて非難の聲は自然に消去り、事業は隆隆と榮えたのである。



源六郎は、時の遞信次官田氏の前に同志の一人と共に坐してゐた。時刻は既に午前零時を過ぎてゐる。

「明朝ではも早手遅れでございます。是非御面會を……。」
門前で幾度ことばられても屈しないで通された一間である。

「承りますに、私共から決議を御願ひしました參信鐵道の許可の件は、今回の會議に

は提出されなかつたとのこと、それはまことでございませうか。」

六十歳に近い、半ば霜を交へた頭をふりたてて源六郎は真剣であつた。

「その通りです。今回の鐵道會議は、本日終了しましたので明日は閉會式が行はれるばかりです。あの鐵道の件は今回は審議されませんでした。」

「それを聞きました故に、夜中をおしてお目にかかりに参りました。何とか貴殿の御奔走で、今一度會議が開かれる様御はからひ願へないでせうか。」

源六郎の面は蒼白であつた。

參信鐵道は三河と信州とをつなぐ鐵道である。その許可のために源六郎等は非常な奔走をし、やうやく省の許可をうけるまでになり、全責任をまかせられて上京して來たのであつた。

「次官殿、私事にわたつて恐入りますが、この鐵道の件は、わが稻橋線と岐阜縣中津川線との競争となり、既に前回は中津川町の奔走のためにおくれをとつてしまひ、今回こそはと、この古橋が命をかけて盡力いたしましたものでございます。中津川には小生の妻の實家がありますが此のため、私の一家は妻の實家と義絶までいたして居ります。」

この御許可を得ないで歸りましては、郷黨の人人に對して源六郎生きて顔は會はされませぬ。」

「御推察申します。貴下の御骨折も御苦心もよく私にはわかります。然し鐵道、遞信兩大臣の命によつて會議も閉ぢられた今は何ともいたし方ないのです。どうかあきらめて、次回までお待ち願ひたい。」

源六郎は田次官の面をじつとみつめた。大きな眼から涙が點點と滴つた。

「御氣の毒です……。」

次官も外に言葉はなかつた。

「源六郎の男はすたれました。私が出郷の際には、近郷近在の人人が擧つて激勵後援をしてくれて、沿道の小店で柿を商ふ婆さんまでが、賣上を掻き集めて出金してくれた程です。其の尊い資金を託せられて上京して運動してゐた私が、今許可を受得ずに歸つたらば、何の面目があつて地方の人民に見えられませう。私一人腹切つて申ひらきすることは決して厭ひはしませんが、彼等郷黨翁媪の落膽失望を思ふ時は如何ばかりでござらうか……。」

源六郎の聲が少しうるんだと思ふと、彼は大聲をあげて泣出したのである。頬をながれひげをつたふ涙、かきくごき泣叫ぶ聲は悲壯にひびきわたつた。

田次官の面に見えてゐた哀れみのかげは、見る見る深い感動と變り、つよい決心となつて表はれた。

「古橋君。よくわかりました。小官は貴君の熱誠に感動して、今一度、成るかならぬかは別として會議を提議してみませう。併し不可能と定つたときは、この小官の眞心を信じて萬止むを得ぬと諦めて下さい。」

「次官殿、御盡力下さいますか。有りがたうございます。古橋一生の恩に着ます。何卒何卒御ねがひいたします。」

源六郎は座をすべつて頼み入つた。

かうして臨時鐵道會議は、閉會式がせまつた直前に異例の再開を見て、つひに參信鐵道の免許は得られたのであつた。

參信鐵道は工事の實現を見ない中に源六郎の死去となつたが、その後碧海郡新川町から東加茂郡足助に至る五十餘軒の申請地域には、着着として鐵道が敷設せられて、源六

郎の勞は今や報いられつつあるのである。

——西加茂郡譽母第三尋常小學校 伊藤 巖——

一一、興亞の先覺者東方齋荒尾精



頭山滿先生が荒尾精を批評せられた言葉の中に次のやうな一節がある。

「諺に——五百年に一度は、天偉人をこの世に下す——といふが、荒尾精のやうな人物は確かにその一人である。彼の徳望、識見、容貌はどれも偉人の風格を具へて居り、凜乎とした威風のうちに何となく人を惹きつける力を持つてゐた。この人ならば必ず東亞の大計を樹てて、斷乎としてその主義を世界に普及させ、必ず後世を益する鴻業を成し遂げるものと信じてゐた……。」

と。一體荒尾精といふ名は餘り世間には知られてゐない。従つて右の言葉も褒め過ぎであると思ふ人があるかも知れない。併し精がその在世中に支那大陸に遺した偉大な足跡と、更に後進に深い感化を與へたその高い人格と、東亞百年の大計を策した卓拔な識見とを想ひ合せる時、精のやうな人物は、尾三が生んだ織豊徳の三傑にも比較すべき偉人

といつても、大方過言ではあるまい。

尾張が生んだ蓋世の英雄豊太閤は、既に三百年の昔に大陸遠征の壯圖を敢行して、大いに皇國の威武を世界に發揚したが、その秀吉の誕生地中村とは、つい目と鼻の間である名古屋の花の木町から、荒尾精のやうな大陸經營の一大先覺者が生れ出たのは、まことに不思議な因縁である。否、これは偶然の不思議といふよりも、先人が後人に與へた偉大な感化力と見るのが當然ではあるまいか。

先の上海方面軍最高指揮官として勇名を謳はれ、現に内閣參議の要職に在る松井石根大將も亦中村の近くに生れ、有名な豊太閤崇拜者であるが、同時にまた荒尾精をも深く敬慕してゐられるといふことである。大將は今や大亞細亞協會の主宰者として、日夜興亞國策の經綸に盡瘁してゐられるが、この松井大將に鑑みても、郷土の偉人が與へる後代への影響の如何に偉大であるかを知ることが出來よう。

今や支那事變も第四年を迎へて、所謂東亞の新秩序も着着と建設途上にある時、大陸の天地に雄飛すべき人物は、愈々必要を加へてゐる。この秋、尾三の青少年たるもの、緊禪一番第二の荒尾精たらうとして大いに奮起すべきである。

何時の時代にあつても、何れの國家にあつても、國難を打開して、國運を進展させる原動力となつたものは、實にその國家を擔ふ青少年の愛國的情熱以外の何物でもない。明治維新並に明治初期における青年志士の氣概、情熱は正しく我が日本を飛躍せしめる推進力となつたのを見ても明かではないか。しかもそれは事變下の今日にとつても最も必要なことであつて、青少年の情熱を以て徒らに夢想の中に終らせてはならない。英雄偉人と言ふも、その夢を具體化し、現實化したものに過ぎないのである。彼荒尾精の如きも、一部からは誇大妄想狂視せられ、野心家のやうに目されてゐたが、世評などには一切頓着なく、西歐謳歌時代に獨り敢然と時流に抗して、己が信ずるところに向つて直往邁進したのである。そして衆に先んじて興亞政策を叫び、その三十有八年の生涯を通じて苦心慘憺、東亞振興の大事業に没頭し、不幸業半に仆れたとはいへ、その抱懷してゐた日支提携の大抱負は、現在の大陸經營の指導精神として生き、彼が上海に創立した日清貿易研究所は、やがて東亞同文書院となり、幾多の人材を雲の如く輩出して、それらの後輩は彼の大理想を着着と實現して、現に事變下の支那大陸に縦横無盡の活躍をなしつつあるのである。



荒尾精は幼名を一太郎といひ、後精と改め、東方齋とも號した。父は名古屋藩士で、家祿は百石であつたといふから、決して豊かな家に生れたものではなかつた。精は幕末の物情騒然たる安政五年に呱呱の聲をあげたが、その少年時代の逸話にはこんなのがあ

る。ある時友達數名と共に隣村へ魚を捕りに行つたが、土地の悪童どもが多數を恃んで喧嘩を挑んで來た。連れの友達は恐れて逸速く皆逃げてしまつたが、精一人は一步も退かないで

「僕達はただ魚を捕りに來ただけだ。何の悪戯もしないのに、お前達はなぜ亂暴をしかけるのだ……。」

と、その非を論しながら、しかも手向つて來れば容赦はせぬぞ……と身構へてゐた。精は少年時代から人並優れて身體も大きく、喧嘩にも強かつたが、世の常の餓鬼大將とは違つて、その態度はいつもこのやうに堂堂たるものであつた。これには流石の悪童ども

も氣を吞まれてしまつて、手出しをするどころか、こそこそと逃出してしまつたといふ。

精は明治維新後、十五歳の時、父母に伴はれて上京したが、家計が乏しかつたので、當時麴町警察署に勤務してゐた鹿兒島縣人菅井誠美氏（後栃木縣知事）の許に書生として寄寓することになつた。そしてその餘暇に外國語學校に通學して、傍ら獨學で國漢、數學などを學んだが、その勉強ぶりは眞に涙ぐましいものがあつた。一例を擧げて見ると、男子非常の用意といふので、常に袴を着け、夜間でも決してこれを解くことがなかつたといふ。書生としての色色な雑務をする傍ら、暇さへあれば端然と机に向ひ、疲れれば机に凭れたままで僅かに睡眠をとり、目が覺めればまた讀書を續けるといふ風で、精が寢床の中で横になつてゐたのをついぞ見かけたものがなかつたといふほどであつた。併も精は寒中でも決して足袋などは穿かず、また火鉢に手をかざすなどといふこともなかつた。主人の菅井氏は警官といふ職責上、一週に一度は當直があり、勤務が濟んで夜明頃に歸宅されたが、さういふ時でも、精は玄關脇の三疊の間で端然と坐つたまま讀書を續け、菅井氏の靴音を聞けば

「お歸りなさい。」

と禮儀正しく早速出迎へるのが常であつたといふ。



かういふ精の勉強ぶりや、その人と爲りを見て、菅井氏は精の將來を大いに囑望されて、西郷南洲にその薰陶を依頼された。それは明治六年頃の話で、南洲翁は征韓論に敗れてその後幾許もなく故山鹿兒島に歸られたから、精が南洲翁の屋敷にゐた期間はごく僅かではあつたが、その間に大西郷から受けた感化といふものは實に大きかつた。後年總理大臣黒田清隆伯が「荒尾の青年時代は、南洲翁の若い時そつくりだつた。」と批評されたといふが、精を目して世人が「小西郷、小西郷」といふやうになつたのも、一つには精の身體が巨大で、風貌も堂堂として、大西郷の倅に髣髴たるものがあつたからであるが、この時代に親しく南洲翁の警咳に接して、知らず識らずのうちにその影響を受けたからであらう。

ある時かういふこともあつた。精が例の如く夜遅くまで机に向つて讀書をしてゐると、

南洲翁と夫人との話聲が聞えて來た。聞くともなく聞いてゐると、夫人の聲で

「もうこの家も古くなつて雨が漏るやうになりました。今度お上から澤山お金を頂きましたから、せめて屋根だけなりとも修繕したら如何でせう。」

すると南洲翁は

「何をお前はいふのぢや、今日本の國は雨が漏つてゐるのだ。自分の家よりも日本の屋根を修繕しなければいかんのぢや。」

と言はれた。この言葉に夫人は前言を悔いて泣いて詫びられた。翌朝精は南洲翁の前に行つて

「昨夜はよいお話を偶然耳にいたしましたまして大變感激しました。」

と言つたところ、南洲翁は黙つて傍らの硯を引寄せ——一貫唯唯諾、從來鐵石肝云云の詩を書いて與へられたといふ。



外國語學校から陸軍教導團へ入隊した精は、成績優秀の故をもつて、選拔せられて陸

軍士官學校へ入學許可になつた。

陸士時代の精は日夜孜孜として勉學に勵んでゐたが、當時我が國は恰も自由民權論時代で、政治家はすべて國內の政治問題にばかり没頭して、對外問題には頗る無關心な態度をとつてゐた。併しその頃朝鮮の暴徒がわが京城の公使館を襲撃するなど、東亞の事態は漸く複雑にならうとする時であつたので、精は政府の軟弱な對外政策に對して常に嫌らなく感じて、寸暇を割いては東洋に關する研究書物を読み、また先輩有志を訪ねてその意見を叩くなど、憂國の熱情の勃勃たるものがあつた。

ある時はつひに意を決して、時の陸軍大臣大山巖大將を陸軍省に訪問して、平素から抱懐するところの東亞經綸の信念を吐露し、且つ熱心に獻策を試みたので、公もその熱誠振りに對して大いに感動せられたといふ。

明治十五年二十四歳の冬、精は優秀な成績をもつて陸軍士官學校を卒業し、陸軍少尉に任せられた。精は早速年來の鵬翼を支那の天地に伸すべく渡支運動をはじめた。併し彼を知るすべての上長先輩は、荒尾精こそ未來の帝國陸軍を背負つて立つべき大人物と見込んでゐるので、皆眞向から反對した。當時某大官は彼に

「人人は争つて歐米に留學し、世界の大事を究めようとしてゐるのに、君だけは何故老衰國の支那などに行かうとするのか。」

と尋ねたところ

「他の者は皆歐米諸國に心酔して大切な東洋のことを顧みません。それだからこそ自分分は支那に行かうと思つてゐるのです。」

と答へた。

「では君は支那へ渡つて何をしようと思つてゐるのか。」

「これを治めて、以て東方亞細亞の興隆を欲するのみであります。」

と、精は莞爾として應酬したといふが、その意氣の壯さかんなことはこれによつても想察されるのである。

併し精の熱望も容れられないで、ついに大陸行は思ひ止まらねばならなくなり、間もなく熊本聯隊付を命ぜられた。ここでも彼は大いに士氣の振作に努め、青年將校としての荒尾精の名聲は全聯隊を壓するまでに至つた。荒尾少尉の名が如何に高かつたかは、當時市井の少年達が遊戯する時にも一人が

「俺は西郷大將だぞ。」

といへば他の一人は必ず

「俺は荒尾少尉だ。」

といつてゐたと傳へられることによつてもその一斑は判る。

精は軍務に精勵しながらも支那行の宿志は一日も忘れなかつた。そして熊本在勤二年、參謀本部支那課勤務を命ぜられたことは、その鵬翼を支那大陸に伸すべき第一段階となつたのである。參謀本部にゐること一年、明治十九年の春、精が多年の希望は叶へられて、命を受けて渡支することになつた。時に年二十八歳であつた。



精は憧の上海に上陸した。初めて見る大陸の春だ。楊子江は濁水滔滔として流れ、江南の楊柳は新緑に萌えてゐた。この新しい活躍の舞臺を目前にして、多感な青年將校荒尾精の感慨はどんなに深かつたであらう。

荒尾中尉は上陸後先づ大陸進出の邦人の草分けともいふべき大先輩、岸田吟江を訪ね

た。岸田吟江は三河舉母藩の支封、岡山縣久米郡^坪和村の出身で、當時上海で樂善堂といふ商舗を經營してゐる氣骨稜稜たる國士肌の人物であつた。精はいろいろと將來の計畫を語つた後、吟江の進言を容れて、その活動の根據地を漢口に定め、樂善堂漢口支店の看板を掲げ、書籍、雜貨、藥劑等を販賣する店舗を開いた。これは支那の事情を調査研究する捷徑であるとともに、一方支那官憲の注意を免れる爲でもあつた。

精の任務は支那駐在の軍事探偵として、各地の状況を精査して軍部へ諜報するのであつたから、早速同志を募り、店員に變装させて各地に潜行させた。この時集つた人人は皆ながい間上海や、北京や天津などに在留してゐた志士ばかりで、その中には後年荒尾の片腕と謳はれた、わが三河出身の中西正樹もゐた。中西は晩年には滿洲で大活躍をなし、幾度か馬賊に襲はれたり、生死の境を彷徨したりして國事に奔走した志士であるが、その名が一向郷里に知られてゐないのは遺憾なことである。

これら十數人の命知らずの志士の一團は、何れも支那服に辮髮姿で、身を商人に扮しては各地へ向けて探査の壯途に上つた。そして到るところの山河の形勢や、關塞の要害、氣候風土、人情風俗等を詳しく調べて荒尾の許へ報告して來た。その一人は遠く雲

南の蠻境で瘴癘に仆れ、ある者は捕へられて斬られ、また一人は今日の赤色都甘肅省の蘭州にまで足を伸ばし、その途中危く賊に殺されかかつたり、支那兵に追ひかけられたりして、萬死に一生を得て使命を果たした程であつた。

荒尾精が何故かかる危険を冒して迄、支那内地の調査を企てたかと言へば、彼の興へられた任務は軍事探偵であつたが、荒尾個人には東亞振興といふ大目的があつたからである。當時西歐の勢力は恰も巨濤の押寄せるやうに、イギリスはビルマ・香港を手中に收め、フランスは安南を侵略し、シヤムに勢力を及ぼし、ロシヤはシベリヤから朝鮮の背後を脅かしてゐる際なので、この老大國の眠りを覺させて大いに振作鼓舞し、一大革新を圖らしめて、わが國と相携へて西方東漸の大勢に對抗しようと思つたからである。それには先づ支那をよく知ることが第一であるといふので、四百餘州に同志を飛ばせて支那解剖の大メスを揮つたのである。



荒尾精は支那を研究すればするほど東亞の再興は日支の經濟提携から出發しなければ

ならないといふ結論に達した。そこで日清貿易研究所の設立を思ひ立ち、一先づ明治二十二年に三ヶ年振で故國の土を踏み、首相黒田清隆、藏相松方正義等に説いて、研究所の設立に補助を仰がうとした。

荒尾は

「西歐諸國に對抗する爲には、先づ日支の貿易を振興し、相共に富強を圖らねばならない。」

と經濟提携論を眞向から振翳して、黒田首相等を屢々説いたが、その實現はなかなか容易ではなかつた。當時最もよく斡旋奔走の勞をとつてくれたのは、時の參謀次長川上操六、陸軍次官桂太郎の兩大將であつた。

この川上大將は荒尾精を非常に信頼し、終始一貫種種援助し指導した。一例を擧げると、精がまだ參謀本部在勤時代に、何かの用件で川上大將に面會に行くと、大將は他の將校連と對談中であつても

「荒尾君何か用事かね。」

と直ぐ席を立つて別室に招じて面談するのが常であつたといふ。また後に日清貿易研究

所の財政が逼迫してゐるのを聞いた時、自らその邸宅を擔保として數千圓を調達し

「これで荒尾を救へ。」

と言つて送金したことさへあつた。

さて一ヶ年にわたる東奔西走の努力は遂に酬いられて、さしも困難を極めた研究所の開設問題も漸く解決して、明治二十三年九月には、全國から選抜した俊敏な青年二百餘名を第一回研究生として引率し、再び上海の土を踏み、同月二十日を以て日清貿易研究所の開校式を擧げた。これが今日數千名の大陸先覺者を生んだ東亞同文書院の前身である。

なほ多年同志が血を流して蒐めた資料の一部を精が整理編輯し、支那古今の書籍をも漁つて、同志の一人であり莫逆の友である根津一と協力して編纂したのが、日支貿易上絶大な貢獻をした「清國通商綜覽」であつた。



その後精等の志と違つて、日清の風雲が急となり、遂に明治二十七年には干戈を交へ

ることになつた。精はこの時決然と起つて、會ての同志並に研究所の卒業生に檄を飛ばし、軍事探偵または通譯として従軍せしめた。その數實に九十一名に及び、中には敵地深く潜入して捕へられ、金州城頭の露と消えた鐘崎三郎の如き、日清戦役史上有名な人物もあつた。

また精自身は、戦端開始と共に、清國の形勢、兵略並に戦後の善後措置などについて「對清意見」「對清辨妄」等の書を著して意見を述べ、また演說會を開催して多年の蘊蓄を傾けて大いにその重大性を強調する一方、政府へも直接色々有益な獻策をした。

戦勝後は新たに獲得した臺灣の未開發資源を開發すること、國策的見地より最も緊急務だと痛感したので、明治二十九年八月臺灣視察旅行の途に上つた。臺北に着いた精は先づ何よりも日臺兩國人の融和を圖らねばならんと悟り、紳商協會といふものの創立を提唱して大いに畫策した。

同年十月目出度く紳商協會の發會式も濟んだので、精は再び臺南、南支方面の視察に向はんと臺北の宿舍を出發しようとした時、何といふ不幸であらうか、當時臺北地方に流行してゐたベストに感染して病むこと數日、同志や友人らの獻身的看護も空しく、

十月三十日には異境の客舎で溘然として逝去したのであつた。行年纔かに三十有八、これから大いに爲す所あらうと期待せられた大鵬が將に鵬搏を試みようとして斃れたとでも言はうか、將又志業半にして己むといはうか、實に皇國のため、大東亞のために痛恨の限りであつた。

精が罹病した時、彼に隨行してゐた友人や部下達は、その病名があつたの恐ろしいベストであること知りつつ、「先生と生死を共にしたい。」と争つて避病院に同行をせがんで、その師弟の情誼の厚いのに醫師達を泣かしめたといふことである。

またその逝去の報が一度東京に着くや「なせ荒尾を殺したか。」と、川上操六大將・松方正義侯等から詰問の電報が返されて、友人達を困らせたさうである。これによつても精が如何に上長、友人、部下から敬愛せられてゐたかが窺はれる。

精は臨終の際

「嗚呼東洋が……嗚呼東洋が……。」

と叫んで息が絶えたといふ。東洋を想ひ、東洋を愛し、死の瞬間までそれを口にして逝つた荒尾精その人は、單に一介の軍人ではなく、偉大な國民教育家であり、遠大な外交